凡風韻拔群、疑ふべくもあらず土佐將監光信ゞ筆なりければ公賞翫し給ふこと一方ならず目をも離さず御覽じてありしにしばらくありて艶然として從者を顧みて云はせ給ふ嗚呼我れ多年の賞感を將監に誤れり將監が筆力遑ましからざるに非らざれども漫然塗抹す、何の風韻かある夫れ牡丹の獅子ゝ於る桐の鳳凰に於る必らず相配するものあり松にゝ鶴を配するこそ當然なるべきに今將監却つて松の梢に雁を副へたるゝ何の意なるぞと氣色を易へ給ふ折から先刻より同じ旅店に腰掛け居たる商人体の旅客ゝ此の屏風を但見斯う見て頻りに賞嘆し彩色と云ひ運筆の自在と云ひ殊に松ゝ雁を副たる落想の幽遠なる老手に非ずば成し難しと獨語するにぞ公は之れを洩れ聞き端近く出させ給ひ商人に向ひ何故に松に雁を副へたるを斯くは賞するやと問はせ給ふに商人は其の士人なるに駭き地ゝ伏して罪を謝し兎角の返答をもせざるを公は頻りに問ふて已み給はざるにぞ商人も今ゝせん方なしとや思ひけん容を改めて曰く奴卑賤書を知るものにあらねども世の人は松を畫けば必ず鶴を副るを例とするゝ將監のみ獨り古歌に倣ふて雁を副たれを其の落想の非凡なるを賞賛せるなりと答ふ公更に其の古歌ゝと推して問はせ給ふに商人取敢へず冷泉帝の御製を詠じて曰く「秋わたり春歸り行く雁がねもはね休めせん函館の松」と公之れを聞こなはし始めの疑惑忽ち晴れ大に此の旅人の風流に意あるを感じ給ひ親しく座敷へ伴はせられ其姓名を問はせ給ふに當時驕奢を以つて闕所となりたる淀屋辰五郎なること知れたれば公は切りに憫みを垂れ其後幕府に請ふて辰五郎を石清水八幡社の神官に任せられたり

●銀錢を以て護身符となすべし

德川氏の鎮府を江戸に徙すの初め其舊臣清水久三郎なる者あり久しく館林に居る一日太公（家康を指す）に謁せんと欲し俄かに行裝を理へて獨り行き徑ちに城中に入る新營方ゝ成り輪奐目を奪ふ久三茫然として東西を辨せず暫らく殿廊の間に徘徊す偶々故舊某に會ふ問ふに其故を以てす久三對へて曰く「久しく太公に見えず契濶の情自ら止む能はず故に來る耳然るに宮殿深邃頗る岐路に迷ふ子幸ひに導きを爲せ」と某乃ち入りて之を公に告ぐ公時に便室に在り即ち延いて之を見る公曰く「久三恙なきか久しぶりの面會大慶に存ずる、聞く館林は幽僻の地なりと定めし百事不便なる應し」久三對

へて曰く「難有き御詞を拜し恐悦至極に存じ奉る小僕ゞ居村僻在すと雖ども他に不足も候はず但濁醪頗る口に適せず特に之れに苦むばかりに有之候」と公笑つて曰く「吾に佳釀あり」と即ち命じて一樽を取り之に賜ふ而して膝を交ゑて談語刻を移して退く公近臣二人をして導ひて城を出でしむ送りて階下に至るや久三襞を探ぐり銀錢各一枚を取り出し二人に與へて爲めに謝し乃ち自ら布褌を脱し賜はる所の樽を縛し之を肩にして去る二人歸り報ず公問ふて曰く「久三い奇士なり其去るや何の狀ありしや」二人輙ち具ぶさに其狀を告ぐ公默思すること久之即ち曰く「久三もと銀錢抔蓄ふるの資なし此必らず先年姉川の役織田右府其戰功拔群を賞して賜ふ所のものならん渠れい無雙の勇士たり汝等宜しく之を學ぶべし其の錢は以て各自の護身符と爲すべし」と當時の狀想ひ見るべし

●近松門左の才識

門左衛門名は信盛、巢林子不移山人等の號あり承應二年癸巳を以つて長州萩に生る本姓は杉森氏世々毛利家に仕ふ門左幼にして穎悟一を聞て萬を知る父之を奇として學問に從事せしむ果して先進を超越し嶄然頭角を見はす後志す所あり笈を負ふて諸州を漫遊し暫らく肥前の唐津近松寺に止まり又去りて京師に登り縉紳に仕へ其御内人となり從六位に叙す然るに當時朝廷の式微最も甚しく門左其才を伸し力を當世に致す能はざるを思ひ斷然青雲の志を絶ち浪華の俳人井原西鶴に就て專ら淨瑠璃を學び其嘗て近松寺に遊學せる緣故を以て近松門左と稱すと云ふ」氏が作中著名なるもの少からざる中にも國姓爺合戰は最も賞すべし而して人其の文章の好さと結構の妙なるとを賞すれども其の最も賞すべきい識見の高さよ在り先づ日本生れの鄭成功が義に仗りて明室を既よ傾きたるに扶くるを主意とする一なり日本にて外國の近事を淨瑠璃よ作りしは是を首とする二なり近松が此の淨瑠璃を作りしは成功が事を擧しより僅かに五十餘年の後に係り當時長崎の外い商船の往來なかりし頃なるに早やく其事實を探り得て人の目を驚かしたる三なり此一事によりても近松が見識の高さを知るに足るべし然れども氏が長じたるは單り識見のみにあらず其才學よも富みたる一證は最明寺殿百人上臈といふ淨瑠璃中最明寺の道行を形容する詞に宗の石曼荆が雪を詠せし詩の蝶遺三粉翼一

輕難レ拾、鶴墜二霜毛一散未レ轉の句を和らげ「蝶の翼のおしろいを草にこぼして梢には鶴の霜毛を脱きかくる雪は花よりなほ白き」と綴れるによりても知るべし、或る時竹田出雲穂積以貫と同行して近松ゞ許に至りしゐ机の邊に淀屋辰五郎が驕奢の景狀を綴りかけたる草稿あり其末に「金の冠着ぬ計り」とあり兩人歸途之を評しいかゞ形容の詞にもせよ辰五郎ハタカヾ町人のことなれば金の冠の句は相應しからず然るにても其の下の句は何と綴るやらんと兩人申合せ翌日又近松を訪ひ竊かに彼の草稿を見しに金の冠云々の下に「癪(笏と音相通ず)は持病にありとかや」と書つゝけありければ兩人舌を捲て其のぬけ方の妙なるに驚けりと是れ亦近松が才の非凡なる一證とすべし

●酒瓢勇を勵ます

丹羽長重の將、江口三郎右衛門の從者に出口藤藏と云ふものあり剛猛にして戰功鮮からざれども性驕傲不遜なるを以てはか〳〵しく知行をも得ず年既に六十を過ぎ祿僅か〳〵二百石を食む慶長四年前田利家兵を發し大聖寺の城を攻め之を下して凱旋す時に長重兵を出して之れを追擊し淺井山下に戰ふ折から藤藏は後軍に在りしが吾が畢生の功名を立つべきは今日ゝ在りと驀地に敵軍に駈け入りて縱横自在に薙倒し竟に敵將を斃して其首級を取去らんとする折から敵兵十五六騎駈け集り之れを挑む藤藏咄嗟之を防ぐと雖も如何せん衆寡敵し難く空しく之を奪ひ去らる此時藤藏の妻半白の髮を後に結び上げ手織の麻衣甲斐〳〵しく引き裹げ腰ゝ短刀を帶び手に瓢簞を提げ此方を指して足早に歩み來るを藤藏は遙かに之れを認めアワレ吾妻我に酒を與へん爲めに敵兵の中を健氣にも來れるもの哉とて即ち兩手を上げて指し招き出口こそ此に在り早く來りて酒を飲ましめよ見まがふ事なかれと聲を限りゝ呼べども應へず本陣さして行かんとするゆゑ傍にある兵卒呼び止め出口氏が斯く迄に呼ばるゝを何故應へられざると云へば否とゝ首僅かに一ッ計り取り然もそれを取り返されて追ふ事知らぬ男には妾が夫なりともいかでか言辭を交へん殊に此酒は主君に奉らんとて態々持ち來りしなり卑怯者に振舞ためにに持來りたるゝあらずと菅なく言捨て本陣に赴けば藤藏大に感奮し逸足出して彼の首級を奪ひ去りたる一隊に追及び火花を散して戰鬪し四方八面に追ひ捲り再び首級を得山下の本陣に至る此時主將江口は藤藏が妻の酒を持來るを悅び副將南部武右

衙門と共に一瓢の酒を傾け居たるが藤藏の首級を携へ來るを見て大に喜びイザ一杯飲むべしと云ふを妻は傍よりれし止め其酒は此瓢よこそ賜はる可けれ藤藏の飲むべき理なし何故なれば其首級を取戻したるは此瓢にして藤藏にあらずと言ひたりしかば藤藏も打笑ひて此の古姥又しても惡口を申し出したり折角の勳功も汝が爲めに無汰骨折となりたりと打つぶやきしにぞ陣中擧りて絶倒せざるものなし

○寶井其角高野の小僧にへこまさる

寶井其角遊歷して高野山に登り奥の院に詣でしが折しも秋の半ばよて殘る暑さ猶堪へ難かりければ但ある坊中に入りて水を乞ひけるに其の庭に生しげりたる千草の内、女郎花の最なまめかしう咲出たるに思はず椽へ腰打かけつゝ如何で一句をと詠め居たるを此坊の子僧十二三ばかりなるが見てれろかしき顏して何にをか考ふるぞと問ふに然ればとよ此の女郎花のあまりに奇麗ければ發句一ッ詠まんとて考ふるなりといへば發句とは如何なるものぞといふ好し今詠みて見せ參らせんと軈て懷より紙を取り出で墨斗の筆もて「餘所に咲け高野の奥の女郎花」とかきつけゝれば子僧打ちみて大いに

笑ひ斯る譯も別らぬことを多くの暇をつぶして考ふるこそかしけれ殊に此句は最と無理なる云ひぐさなりと云ふに其角心におかしく何故無理なりとはいふぞと問へば我れ好く補して參らすべしとて「餘所よさけ」と云ふ句に墨ぬりて傍へに「名をかへよ」と書そえければ其角初めて其才に驚き我れ遠く及ばずと舌を捲たりと云ふ

●搖かして見れば石なり苔の花（支考の風流）

俳人支考或る時行脚して美濃に至たり某の鄕某の家を訪ひしに折節主人は不在なりけれども家婦は豫て其顏をしれるものなれば支考をとゞめけるに夜に入れども主人は歸りこず、去ればとて夏の夜のいと短かきに斯くてあらんよりは早く休らひ玉ひね妾も臥戸に罷らんとて辭して入りぬ支考はさすが寐ねもやらず旅の記なんどものして月を愛でつゝ椽側傳へに徐ろ歩行せしにそこらこゝら明はなしてありければ不圖納戸の方を窺へば蚊帳の内に妻眠りて雪をも欺く白脛のほのかに現はれ居るよ支考も木石にあらざれば潛りに其内に入れば家婦は俄かに起き直り支考を痛く窘めけるに支考はそこよ居たゝまらず取り敢ず「搖かして見れば石なり苔の花」と一句を書きのこし月に乘

じて出で去りぬ斯る折しも主人の歸り來りければ家婦は憤ほりてありしことゞも打ち語るを主人は徐かに聞き終りて何にか詐をのこしては行かざりしやと尋ねけるに彼の一句を取り出し見せければ、さもこそあらめと主人は其踪跡を要め頓て追つきけるに支考は恐る〳〵詫けるを主人はは、笑みつゝ何條わぶる程のことやあるべき願くば節を返し給へとて連れ返り互に笑ふて語り合ひしとなん

●術の交換

支那の金陵に一人の藥商ありけり車上に大いなる佛像を載せ市街を曳き歩るき藥を求むるものあれゞ先づ藥を佛の掌中に投じ掌裡に留まりて下らざるものは其人の病症に適したるものとして初めて之を賣る、遠近其奇を傳へ買ふ者日々數百人の多きに至る、一少年あり之れを觀て窃かに其術を得んと欲し衆人の散ずるを俟ち相伴ふて一酒樓に至り其の術を問はんとす然れども少年思へらく彼れ此の術を以つて業を營むものなり必らず容易に敎へざるべし若かず韜略を以つて之れを聞かんにはと胸に一策を畫し飲畢りて酒錢を拂はずして出づ、酒家亦敢て之れを求めず藥商怪むで其故を問ふ少年曰くこれ寔とに小術のみ若し君の術と交換するを得ば幸甚なりと藥商は質朴の性なりければ一儀に及ばず直ちに說て曰く我が術他あるにあらず佛像の手は磁石を以つて之れを造る故に鐵氣ある藥劑を載すれゞ之れに固着して下らざるなりと少年曰く我術も亦他あるにあらず豫じめ酒錢を以つて酒家に附し置き客至るも必らず酒錢を問ふ勿れと約し置くのみ

●權家の茶番

今を距ること百餘年、天明元年十二月江戸の丸の內にて當時の老職田沼主殿頭が歲忘れの大饗宴を張られたるとき密かに茶番狂言を催されしが客は當時の權家の歷々にて茶番の題は「鬼に金棒」「二階から目ぐすり」「猫の尻へ木椎」等いふ卑俗の諺なりき其頃神田邊に住居せる挿花の師匠がその門人なる處女を强姦し陰部を破りたるより終に獄に下りたりとの巷說囂然たる頃なりしにより彼の猫の尻へ木椎といふ題を此强姦の事に趣向を付たるは此頃有名なりし北廓の幇間五町と云ふものなりし扨て當日の午前より花街にて尤も勝れて美しき十四五人の禿を屋根船に載せ來り愈々茶番となるや五町

は坊主の髪を冠り挿花の師匠に扮ち殊に美麗なる禿に花を教ゆる仕打宜しくありて強姦に及ばんとするとき十二人の禿、一同に出來り五町を打たゝきて終に赤裸となしたる時張子の木椎を五本持出し少し歳長たる禿が五町の尻を打つて餅舂の体をなす此時大小入三味線の合方にて餅舂歌を唄ふは廓中の歌妓なり、五町は段々餅の練れ上る身振をなし禿共にとり粉を振り掛られ箕の中に入られて引摺られ樂屋へ入る一座絶倒せざる者なし頓かて五町容を改め出れば跡より大なる三寶へ蒲色天鵞絨にて製したる烟草入と筒へ烟管を入れ打違にして木椎の形と見せたるを積かさねて持出し是は某樣の御茶番で五座り升と面白く口上を述べ惣景物として禿を以つて連中に配らせたり此日の饗應酒池肉林はさらなり其頃有名なりし藝妓十四五名は思ひ〳〵の踊りをなす抔驕奢至らざる所なし又「鬼に金棒」と言ふ題の景物は其頃流行せる銀の延烟管に虎の皮の多葉粉入なり茶番の番組も多かりし故夜明たれど雨戸を明ず銀燭を照して興行せるに漸やく朝の五ツ頃に至り終しとなん京山の蜘蛛の糸卷と云へる隨筆に見ゆ當時權家の豪奢想ひ見るべし

●名古屋の鯱

尾州名古屋城の造營は慶長の昔し德川家康の命を奉じて西國大名北國諸侯二十家の衆力を並せ其知行高六百三十八萬七千四百五十八石三斗の歩役を以て普請ありしとは種々の古き記錄に存するとなるが就中當時熊本の城主加藤肥後守清正は自ら望みて獨力以て天守閣を築き建て上層には黄金もて造れる鯱一雙を置き碧銅の瓦を以て五重の高樓を造營せりとの事は舊話略雜記創業錄等の諸書に載て詳らかなり又町場圖附錄中よ加藤清正の家人飯田覺兵衛朝鮮攻の時城の石壘築法を彼國にて傳授し來り名古屋天守築立に角石を揚る時は幕を打て他見を禁せしと記せり又其天守と名づけられたるは信長岐阜城を立たりしとき僧澤彦に命じて城内の高樓に始めて名くる所なりと或書に見えたり又楊柳眺望記よ據れば名古屋城天守の寸尺は石垣東は輪地形より土臺まで高六間五尺西北堀底より土臺まで高十間五寸土臺下端より五重目棟上端まで總高拾七間四尺七寸五分鯱高七尺七寸なりとあり又某氏の記錄中には其用材間數等を詳載せるが其中に「蚩吻高サ七尺七寸延テ一尺五寸（黄金ヲ以テ作ル）此附金千九百四十枚小

判ニシテ一萬七千九百七十五兩」とあり今ま此の小判の數を今日の新貨に換算すれば實に十八萬四千三百三十三圓六十二錢五厘強となるを見るべし　鯱の附金のみにても既に如此の巨萬に上れり而るに天主閣の造營を肥後守一手に引受けたるとは驚くべきの豪舉と謂はざるべからず況んや當時名古屋一城を築くに果して幾百千萬の財力を費やせしや知るべからざるをや（此稿總て舊記に依る）

●狂歌凶兆を變じて吉兆となす

むかし豊太閤の深く愛翫されたる庭前の松、故なくして枯れたりしかば太閤之れを不吉の兆とし甚だ憂ひ給ふ氣色ありしに滑稽諧謔を以て聞こえある曾呂利新左衛門これを祝して

御秘藏の御庭の松は枯にけり千代の齡を君に讓りて

爰に於て大に喜び給へりとぞ　又文化年中江戸の竹橋なる松の風もなきに大なる枝の折たれば此は唯事ならずと人々異變の思ひをなして色々風聞せるに或人の祝せし狂歌に

千代の松折なば臼と杵にせん遣へど盡じ君が齡は

是等は曾呂利にも劣るまじき歌なり、またある人の年賀に「壽」の字を染めたる餅の數四十九あまりければ始終苦の唱へを忌みて不興なりしをある人祝して

七ッ宛七福神に配はや數は四十九あらふ賀の餅

と申たりしと、いづれも面白き祝し樣なり又或る人八十の賀に際し松契千歳といふ題にて知人に賀章を勸進せるに蜀山人ハ

八十の賀らくた爺生さ延てまだも齡を松に契るか

と詠みて贈りたり

●柳澤淇園風流の丐兒を訪ふ

柳澤淇園は柳澤侯の家老にて書畫を能くす一日書齋に在りて山水を作り居られしに、いつか窓下に乞人兩手をつき伏して之を伺ひ見る其の容、蓬頭垢面跣足敝衣未だ曾つて日一飯を得ざる者の如し、去れども衰顏非凡、雙眸烱々たり淇園畫き終り始めて頭を擧げ乞人の窓下に畫を見て心醉する体を見て謂て云く汝は我畫を見て樂しきや乞人答て云く先程より行筆を拜見し身は青松白石の間に在りて烟霞を弄する如き心地致し

候　憚には候へども君の胸懷これにて推し計られ侍るなりと猶ほ危坐して立たず、時に淇園横手を打ち扱も〳〵汝は如何なる人にや我も亦汝が胸懷を推し計りて其風流は吾輩に一籌を讓らざるものと覺へたり此畫は汝に與ふべしとて手づから畫を卷て與へければ乞人欣々然として曰く賤人これを名山の間にて展覽し猶ほ丘壑とこの奇を鬪はしむべしとて畫を抱て去る日ならずして乞人又來りて謁を請ふ淇園固よりゆかしく思ひければ早速に逢ひ見て其仔細を問ひけるに乞人先づ云く此程は貴筆を賜はり展觀するごとに覺へず畫中の松は仙風の響を聞くが如く清流は掬して飲んと思ひ總べて一丘一壑乞人の得意にあらざるはなし去ばれ謝し奉つるべきに辞なし乞人近頃某山某處に暫時居を卜し候へば願くは乞人の賤しきを忘れ給ひ明日午後住所を尋ね給はゞ聊か寸志の謝をも報じ奉らんとすとて飄然として立去る淇園いかにも怪しみ亦其趣の凡ならざるを思ひて其翌日其處に到り見るに山を登ること十五六町にして山上古松數株の間に小徑ありて纖塵の汚れもなく又往こと半町許りにして少しく打開けたる處ありて峭壁に垂枝の松あり此枝に一條の繩を下げ新しき手桶に清水を貯へ柄杓を添傍に新しき薦にて席を設け其上に茶具をならべ、いづれも麁物なれど清淨の品なり淇園思ふにこれぞ乞人が我がために設けたるならんと其席に坐を占め今や乞人來るべしと待つこと多時なるも終に來らず淇園こゝに於て手づから茶を立て數椀を傾け何氣なく坐邊を見るゆ扇面のありければ手に取り開き見るに一首の絶句あり曰く

這回空過二十年、肉重不レ能三飛上レ天、抖擻納頭還日笑、囊中也沒二一六錢一、

と狂草もて寫し其勢飛動せり於是淇園不覺驚嘆再三にして自ら失ふが如く猶ほ乞人を待てども來らず遂に家に歸りしとなんこの乞人は如何なる隱君子にや最奥もかし

●蜀山人桐の木を賣ッて一九を饗せんとす

蜀山人は狂歌狂詩狂文俳諧を以て著名なる人なり十返舍一九も又同時の人にて狂歌狂文を能くせるものなり兩人互ひに其の名を知りて未だ相遇はざる頃、一日一九蜀山の門に抵り名刺を通じて面會を請へり取次のもの名刺を持つて奥に入りたる儘久しく待てども出で來らざるにぞ一九も立腹し罵りて曰く「蜀山は一賤士に過ぎず然るに人に驕ると尚ほ如此か」と其儘立ち去りしが數日を經て偶然途上にて蜀山人に邂逅せし

かは一九曰く「先生過日何が故に余を困しめたるや」蜀山答て曰く「吾子又何が故に余を弄したるや」と一九怪しむで其故を問ふ蜀山曰く「余足下の名を聞くと久し幸ひにして訪はれたれは相與に快飲せんと欲したるも生憎酒錢なかりしにゞ庭中にある桐の木を伐りて下駄屋に鬻ぎ五六十錢を得んと下僕に差圖をなし扨て足下を求むれは足下は既ゑ去りて門前になし足下豈に余を弄したるにあらざるなきを得んや」と一九も亦た詰ると能はす一笑して相別れたり

●柴栗山大雅堂の記念碑を案ず

昔し大雅堂の死後門人許多の遺墨を篋中に得たりければ之れを賣りて師の碑を立てんと欲し遺墨を賣るの披露をなしけるに遠近之を聞いて購はんとするもの踵を接し數日を出でざるに七百金を獲たり由りて建碑の協議愈々整ひ扨て碑文を柴野栗山先生に乞ふに先生曰く翁の履歴を記するは固より余が望む所なれども我筆を以つて翁を汚さんよりは、茲に一策あり其金を以つて一座の大石を求め人像を彫らしめ其胸部に「たいがだう」と深く彫り之れを京都より大津に通ふ粟田口の街道に傍ふ山腹に置かば行旅之を望むで記標とし既に大雅堂に來れりと云はん然らば衆庶皆な大雅の名を記し萬世に至りて湮滅すること無るべしこれ乃ち翁の名を不朽に傳ふるの策なり思ふに如此せば翁も又無何有の鄉に一笑せんと門人等此の非凡の盛擧を解せず其事遂に成らずして止めるは遺憾と云ふべし

●奇童

一奇童あり齡纔かに八九歳常に群兒を率ゐて市上に横行す近隣皆之を厭ふ一日獨り陶器店ゑ至る店頭一大水甕を列す高さ五尺許横徑之に稱ふ童其大に驚き注視すること良々久し店主之れに戲れて曰く汝之を得んと欲せば宜敢く獨力を以て汝の家に運び去るべし我汝に價を索めず童曰く汝余が幼にして力なきを思ひ余を欺くならん好し我に方法あり汝先づ余に約するゑ方法を擇ばざるを以てせんか店主笑て曰く法方は汝に一任せん但他人の力を借ることを許さゞるのみ童曰く諾直ちゑ一箇の籠と一箇の斧とを求め來り力を極めて甕を打つ甕碎けて片々たり童乃ち碎片を拾ふて籠ゑ盛り數回にして盡く其家ゑ運び去る

●淨瑠理の冒頭

元祿以後の淨瑠理中に於て今の世に三名言と稱するハ一に福内鬼外が作りたる新田神霊矢口渡の序に死となつて全からんよりは玉となつて碎よとあり二に長谷川千四が作りたる壇浦兜軍記琴責の段に鳧の脛短しと云へども之を續ば憂なん鶴の脛長しといへども之を斷ば悲しみなんとあり三に竹田出雲が作りたる假名手本忠臣藏五段目に應は死しても穗は喙ずとある是なり鬼外が用ひたるハ魏の景皓の言に大丈夫寧可二玉碎一不レ能二瓦全一とあるを引たるなり故に其下ゟ古人の金言と續け又千四が用ひたるは鳧脛雖レ短續レ之則憂、鶴脛雖レ長斷レ之則悲といふ莊子の語なり此二ツハ古人の成語を和げたるものにて出雲は當時の譬を用ひたるものなり而して出雲が此譬を用ひしゑ勘平が一旦女色の爲に主人の勘氣を蒙り零落たれども他に食祿を求めず死に至るまで能く義を守りたるに較べ死の字を以て六段目切腹の伏線となし且應の羽は淺野氏の徽章なれば暗に淺野氏遺臣の隨一人たるを示すに足り大に味ひあり我國の小說軍記淨瑠璃抔ハ十ゟ七八まで其かきだしに經史の語を引く習ひなれども適切ならざるもの多し今此鬼外、千四、出雲の三子が冒頭の一句を以つて全篇又は一段の主意を定めたるは學識あるにあらざればなゝがたし又能く漢語を和げて我有となしたるは才あるにあらざればなし難きことなり

●王安石經濟を知らず

宋の王安石宰相たりしとき土功を興すことを好みしかば佞諛ふて開拓疏通の事を奏上するもの多かる中に太湖を埋めて開墾しなば莫大の利益あるべゝと勸めたるものありけり安石實にもと思ひ土着の老輩を集へて此事を話し出で如何にせば滿湖の水を去り得べきやと諮問ありければみな〳〵其の威權を憚り默してありけるが一老人進み出で僕に一策こそあれ聞給はんやと云ければ安石大いゝ喜び如何なる策なりやと問ふに老人云く別に策あるにあらず太湖の側に太湖と同じ位なる湖を鑿なば容易に水を去るを得べゝと安石初めて悟る所あり此の起業を思ひ止まれりと土功を好むものゝ戒とすべし

●龍陽

古より城を傾け國を亡すもの唯だに女色のみよ限らず男色も亦た往々天下を傾くるに足ること青史に歴然たり即ち支那に於て周の穆王の慈童に於ける、漢哀帝の董賢よ於ける、衞の靈公の彌子瑕に於ける、漢の高祖の籍孺に於ける、唐の韓史邦の孟郊に於ける何人も知る所の事實にして東坡も風水洞の遊をなし鄧通併びに安陵、龍陽皆な男色に名あり又詩人の句に上りたる者を擧れば李白云く「若敎二管仲身常仕一、宮內何妨六人、」楊誠齋云く「但願君王誅二宰嚭一、不レ愁宮裏有二西施一、」唐人明皇を詠じて云く「姚宋不レ亡妃子在、胡塵那得レ到二中華一、」僖宗幸レ蜀詩に云く「地下阿瞞應レ有レ語、這回休二更怨二楊妃一、」范同叔云く「吳國若敎二丞相在一、越王空送二美人一來、」唐人又句あり云く「吳王事々都顚倒、未三必西施勝二六宮一、」男色の支那に盛んなりしこと知るべし又天竺にもこれ在りと見へ大悲華經に狎甎と云ふ語ありて男色なる旨を註せり吾國にては或は若道と云ひ或は庶道と云ひ夫の弘法の弟なる瑱雅が業平の未だ弱冠にして曼陀羅丸と云しときに懸想したりと云ふが如きは人口に膾炙する所にして江の島の白菊、竹生島の童子、書寫山の乙若松帆丸の如きはみな男色の名あるものなり

●太宰春臺徠門に冠たり

太宰春臺の徂徠の門にあるや自ら孔門曾顏の地を以て居り徠翁の羽翼として最も台望ある東野周南諸子と動もすれば凌轢する色あるを以て徠翁常に悅ハず而して春臺も亦た其の己れよ與へざる所あるを知り心竊かに之を恨らみ自ら以爲らく吾が學經を治むるのみならず文藻と雖ども東野南郭輩に讓らんやと是に於て吾が變幻無窮の技倆を示し併せて諸子の眼識を試みんと竊かに古文に擬し產語十二篇を著し儒書に附して故紙に謄寫せしめ故らに撰者の姓名を題せず之を周南に示し欺いて曰く余此書を浪華の市考に獲より傳へて云ふ東大寺の古藏を出るを寫せるものなりと文辭の古雅なる秦漢以前の撰たるまた疑ひを容れざるなり然れども漢より以來歷代の藝文經籍志に於て一も產語の名を載せず思ふに古書の中華に逸して我邦に存する者頗る多し古文尙書孝經の如き其照々たるものなり而して書中多く管晏李悝白圭等の語を錄するを見れば豈に其管晏李白の輩が著す所にして彼れに逸して我れに存するものにあらざるを知らんや子以つて如何となすと周南答へず先づ卷を取りて讀むこと少時、歎じて曰くこれ奇書な

り實に秦漢に下らざるものならんかと携へ歸つて南郭に示す南郭又た喜んで曰く眞に奇書なりと乃ち之を徂徠に質す徂徠瀏讀數篇よして眉を顰めて曰く辭句淡なりと雖ども歸旨純ならす或い弇州輩の戲作に成る者かと讀んで皐賓篇に至り卷を釋て、噱然として笑つて曰く德夫(春臺の字)の人を弄するも亦た甚だしいかな然れども渠にして能く其魅術を逞しくするを得さり余に非れば其妖を摘發すると能はざるべし則ち護門の一書生たるに恥ぢずと云ふべきのみと是に於て周南南郭皆な其卓識に服し且其及ばざるを慚ぢたり

●開元三詩人の雅遊

唐の開元中王昌齡、高適、王之渙、名を齊うして共に吟壇に鳴る、一日天寒して微雪す、三詩人共に旗亭に登り宴を張りて小飲す、偶々梨園伶官十數人あり同じく是に來りて會讌す、三詩人因て席隅に避けて見る、俄かに妙妓三四輩尋續し至り席に陪す艶冶婀娜皆な當時の名妓なり昌齡等私かに相約して曰く余輩各々名を詩壇に同ふし未だ甲乙を定めず今諸伶の謳ふ所を見詩の歌詞に入るもの多きを以て優りとすべしと相約して待つやがて一伶節を拊つて先づ唱ひて曰く「寒雨連江夜入ㇾ吳、平明送ㇾ客楚山孤、洛陽親友如相問、一片氷心在二玉壺一」蓋し昌齡の詩なり齡欣然先づ指を屈して曰く一絶句、尋ひで一伶又謳ふて曰く「開ㇾ筐淚沾ㇾ臆、見二君前日書一、夜臺何寂寞、猶是子雲居、」蓋し高適の詩なり適則ち指を屈して曰く一絶句と尋で又一伶謳ふて曰く「奉帚平明金殿開、强將二團扇一共徘徊、玉顏不ㇾ及寒鴉色、猶帶二斜陽日影一來、」蓋し亦昌齡の詩なり則又指を屈して曰く二絶句と、而して之渙の詩獨り誦せられず之渙因て諸人に謂て曰く此輩は皆な潦倒の樂官唱ふる所、皆な下俚の詞のみ俗物豈に能く陽春白雪の曲を知らんや因りて諸伶中最とも佳なるものを指して曰く請ふ此子の唱ふる所を待て若し我詩に非ざれば吾れ即ち終身敢て子等と衒を詩陣に爭はざるべし若し我詩ならば諸子敗旗を捲き吾れを奉じて師と爲すべしと因りて歡笑して之を待つ須臾にして、さきに指選せる一雙鬟聲を發して曰く「黃河遠上白雲間、一片孤城萬仞山、羌笛何須怨二楊柳一、春風不ㇾ度玉門關」蓋し之渙の詩なり即ち驕然二子に誇りて曰く田舍奴我豈妄ならんやと因て共に大に笑ふ而して諸伶其故を覺らす皆起て請ふて曰く知らず諸郎君何んぞ斯の如

く快なるや昌齢等因て其事を語る諸伶競ひ拜して曰く俗眼神仙を知らず願くハ尊嚴を降し俯して筵席に就けと三子之れに從ひ痛飲日を竟ひたり亦文苑の一佳話なり

●蜀山人幕吏となつて職を勉めず

上は王公貴人より下は車夫馬丁に至るまでも能く其名を知るは蜀山人なり、翁性酒を嗜み善く狂歌狂詩狂文俳諧を作る巧思泉の湧くが如く皆な人の意表に出づ酒後筆を揮ふこと飛ぶが如く數百首の詩文立ぞころに成る詩文歌俳を索むる者常に門に滿てり一篇出づる毎に遠近爭ひ傳へ或ハ其書を模擬して利を計るものあるに至る翁又性豁達にして所行人の意表に出るもの多し曾つて幕吏たりしとき職務を勉めず文筆を弄して例の狂詩などのみ認め同僚のものゝ戯れ居ること多かりけれバ上官より痛く督責を蒙り向後は何人の需なりとも一切筆取るまじとの誓書を書されたり然るに兩三日を經る後、御殿より蜀山に書せよとて奥女中に「フクサ」を持たせて遣ハされたることありければ上官も據なく此度限り筆取ることを許す旨を傳れども蜀山は固く辞して諾せざりしが請求甚だ急なるゆゑ終ひに辞するに詞なく嫌がて筆取りて先きに誓書に認めたる文言をそが儘最も筆大に認めて奥女中に附し御殿に奉りたりと

●蜀山人老僕を扶助す

又翁の家に一老僕あり其名を逸助と云ふ質慤朴魯のものなりければ翁之れを愛し後授くるに本錢を以てし商業を營むで自ら供せしむ然れども逸助迂鈍ゝして動もすれば資を失ひ哀を乞ふを常とせり一日復來りて何事か言ハんとせしに翁笑て曰く「汝ぢ又例の如く資を請ふまわらずや」逸助曰く「否な此度は然ることにあらず奴が家の壁、剝げ落ぬれば敗紙を請ふて之れを補ハんと思ふなり」と蜀山笑ふて「そは甚だ易き事なり」とて机上に在りたる書幅を取りて與へければ逸助拜謝して去りぬ、歸路蜀山の門人に逢ふ門人その携ふる所の故紙を取りて之れを見るに皆な師の文章詩歌ゝして奇想横逸、平日未だ曾つて見ざる所のものなりければ門人大いに驚き走せて之れを蜀山に告ぐ蜀山曰く「是れ渠の福なり子等之を欲せば彼れに求めよ」と門人爭ひ至りて之を買ふ逸助因りて十餘金を獲たり幾ばくもなく資又盡きぬ折節盂蘭盆なりしゝば逸助囊を傾けて紙燈籠を造り携へて市に賣るも賣れず因りて已むを得ず又蜀山の家に抵り

買はんことを求む蜀山「他の物ならんふは買ひ置く可し紙燈籠い余亦用ふる所なし」と云ひけれども逸助跪き乞ふて已まざるにぞ蜀山曰く「然らば余汝に一策を授けん先づ其の紙燈籠を持ち來れよ」と逸助盡く之れを致す其數凡そ百餘あり蜀山命じて墨を磨らしめ自ら筆を執り腕を揮ふて疾書し一燈毎に一詞を題し隨つて吐けば隨つて寫し宛ながら宿構よ出るが如く頃刻にして成れり蜀山又更らに一通の廻文を作る其文辞洒落にして戲謔百出人の頤を解く可し逸助に命じて之れを諸友に致し副ふるに紙燈籠を以てせしむ諸友傳觀爭ふて之を買へり尋常の紙燈籠ならんよは七八錢に過ぎざるに其蜀山の手に出でたるを以つて貴きこと五六十錢よ及び遠近傳ひ聞き更らに價を倍よして之を買ふに至れり逸助由りて又十餘金を獲たり

●米元章の奇癖

書名を以つて支那及び本邦に知らるゝ米元章は潔癖を有し屋宇器具は必らず毎朝清水を以つて一たび之れを洗はしむるよあらずば一日不快なりとなし帽子に僅かの塵あれば之れを濯がしめ來客去れは必らず亦其の坐榻を濯がしめ自ら手を洗ふときは布巾を汚穢なりとして之れを拭はず兩手を相拍つて乾くに至りて止む曾つて靴を他人に穿さ違ひられたることあり元章百方之れを求め得て家僕をして屢々之れを洗はしめ遂に損じて復た穿つべからざるに至れりと元章亦た石を愛するの癖あり佳石を得る毎に朝服を着けて之れを拜するを例とせりある時端州石の屹立山を成すを得愛翫措かず抱て眠ると三夜に及べりと云ふ時に元章は吏籍に在り往々此癖の爲めに事務を廢するとありければ上官楊傑之れを責めんと元章を訪ふに未だ拜するに及ばず元章袖中より一石を取り出し之れを楊傑に示し此くの如きの石安くんぞ愛せざるを得んやと誇れども楊傑敢て之れを顧みざるゆゑ元章失望の體にて之れを袖中に納め更らに疊嶂層崖奇巧稀なる一石を取り出し再び之れを誇り示せども楊傑又敢て之れを顧みざるにぞ最後に元章が得意の一石實に天劃神鏤の巧を盡したるものを取出し之れを示せしに楊傑忽ち喜んで曰く獨り公の愛するのみにあらず我れも亦た愛するなりと元章の手より急がはしく奪ひ取り元章の癖を諫めもせず急に車よ登り遁るが如く走せ去れりと

●赤色の河骨

谷文晁或時河骨を盆に載ゑ畫発の傍らに置き戯れゑ繪具筆の丹朱の餘りを以て河骨の花に塗りおきしに一日例の蜀山人訪ひ來り種々の雅談をなす内偶然傍らなる河骨の花の赤色なるを見此は誠に本邦には珍らしき異花なりと頻りに稱賛し何卒一莖を余ゑ譲り給はんやと切に乞ふて止まざれば文晁心の中に可笑しさ堪がたけれど態と眞面目にて然れば此花日本にハ最と稀有のものにて變り河骨なれば僕の珍愛する所なれども兄の切なる請求の默止し難ければ一莖丈進呈せんと然も惜氣に剪取りて蜀山に與へたりけれバ蜀山大に喜び厚く謝し歸途に就きしに偶々五月雨の頃にて折しも泫として罷まざれば蜀山右手ゑ雨傘を持ち左手に文晁が與ふる所の赤河骨の珍花を携へ心欣々然として歸りたるに既に我家に到る頃彼赤花怪しや傘の雫に其色悉く褪め果てゝ尋常一樣の黄色を呈せしにぞ能く〳〵改め見れば全く繪具を塗付けたりしとの判然せしかば蜀山大に文晁の惡戯を怒り直ぐさま左の狂歌を詠みて送れり

文晁がまッかならそと知つたなら
からはねおつて貰ふまいもの

●狂歌師の仲直り（四方側と六樹園側）

文化文政の頃狂歌大に行われたるに四方側と六樹園側と兎角不和なりしを或人の仲裁よて堺町中村座の劇場見物ながら中直りあり此演劇は當時俳優仲間の座頭問ゑて互に龍虎の勢ひを爭ひたる中村歌右衛門坂東三津五郎の兩人の中直り狂言にて其大切と「戻り駕籠」の所作事なりしかば四方側の某が「今迄のだんまりの幕引かへてあひ〳〵駕の持組にせん」と口吟けるを眞顔氏取敢ず結句へ筆を加へ「もとの持組」とせらる斯くてこそ一點の眼睛畫龍の全体を飛動せしむるものと云ふべしとてこれより兩側の間更らに圭角を生ぜざりしと

●秀吉は皇胤なり

小田清雄氏が隨筆若苗中に此事あり西田直養氏が翠竹軒の天正記に天正十七年四月八條殿（六宮御歳八才式部卿親王）感冒發熱（中略）民部卿法印命予病證次第分別無用捨可　申と予曰見傷寒四逆之證也（中略）醫林集要の四卷を披て茯苓四逆湯を可與と申一人も無用と被存候者　即可被申候と口を堅めて調合す民部法印自ら煎じて與之一服

にして御脈微顯二服にして脈全調神氣而四肢温翌日平安其後御養生藥進上の處十餘日にして本復す于時關白大相國秀吉公御感之餘御馬を被下云々と有るを引き此一條にて秀吉公の彌々皇胤なる事を知る如何にと云ふに此八條殿の御父を陽光院殿(誠仁親王)と申奉る正親町天皇の御嫡なり是桂宮家の御元祖なり戴恩記の玉體と云は即ち正親町天皇の御事なれば秀吉公は陽光院殿とは御兄弟なり然れ〻則ち八條殿は御甥に當らせ給へば歡喜に堪へず道三に御馬をば下されしなるべし扨八條殿をば六宮と申奉り天正の頃いたく尊崇せられしも全く御甥の續きよりの事なるべし斯る次第なを以て考る時は秀吉公の心を盡して經營ありし桂里の殿舍を名護屋へ下し給ふ時日用の調度さへ添て殘らず桂宮へ讓り與へ給ひしとも尤もなる御事なり然るときは復陽成天皇の御兄弟なれば當時よろづ心の儘よ政たしめ(原文のまゝ)給ひし御事みるべしと考證し其友伊東松が秀吉公の御母をば尊び今も其跡嚴然たれど父の事絶えて物に見ゑず此公の威勢にては其父の爲めには必ず納言以上の贈官をば願はれぬべきを其沙汰のなきも故あるべく又朝鮮に遣はされし書翰に慈母夢日輪入懷中而以降云々と書かせられしは御秡箱の夢の事なるべし御秡は則ち天照大御神なれば頓て日の神なりと云ふ確論を引きたるよてしうねき人の疑も晴れつ可くこそ

●點墨も梅花の觀を爲す

越後新發田下町に一富商某なる者あり弘く諸國の物産を賣捌くを以つて業とするが故に年々春秋兩季にも必らず京坂地方へ仕入れに登るを常とせるが某元來少しい和歌抔嗜めるものなりしかゞ出京の折々にい有名なる文人墨客を訪問して知契を得るも多かりけるが就中彼の當時高名なる畵伯大雅堂とは格別昵懇にて交深く一歲上京の節訪問せしに偶々主人も外出留守にて妻君の玉蘭獨り徒然を慰めんとよや兼て嗜める妻琴搔鳴して餘念もなき体なりしが某の來れるを見て徐かに坐に就きて一別以來の疎情を謝し抔せし內土瓶の湯も沸きたれゞ媒黑けたる急須に茶を點じて爐邊に打ち伏せわりし茶碗を取りサッと清めて茶を汲むで進められし故某は何心なく受けて茶を喫せんと口元まで茶碗を引寄せ不圖茶碗の伏せありし爐緣の上を見ればコハソモ如何に猫の糞をば件の茶碗以て蔽ひたりしにてありたれゞ之れを飲まんと心地惡しく左りとて飲

まぬも失禮に當らんか兎せん角せんかとためらう内急に心付きたる体にて取り上たる茶碗を傍らに置き昨秋上京の折り先生より御依頼の白縮布を差上ぐるを忘れたりとて荷包より之を取出し王蘭の前に披露して打紛らす折しもあれ主人大雅堂も歸宅して太たく懇情の辱きを謝し其まゝ白縮布を坐右へ置き贈物の答禮にもとて畫幅を揮毫し興へんと側なる硯を引寄せ毫を揮つてサラ〳〵と認められしが如何なる機にや大筆を墨池に染めらるゝ際誤つて濃墨點々坐右なる白縮布に落ちたりしに大雅も心付き此れは〳〵と云いれしまゝ意にも留めず觀るも目覺しき一幅の山水を揮毫し了り某に與へられしかば某は厚く謝して歸り其秋再たび出京の際之を訪問せしに曩きに贈りし白縮を點墨の儘仕立たるを着服してありしが着換もなき体にて厚く謝詞を述べられれば某も其風彩を見て流石に大家の事なれば點墨も宛ながら梅花の摸樣と見えたりきと一笑して歸國の後ち人々に物語れりとなん

●英一蝶が乾魚の消息

英一蝶は一名北窻と號す一家の畫工元祿年間の高手なり一年何の故にやありけん遠き島に放れんとて既に江戸を出たつとき日來より親しき友の幾名となく見送りて互ひに別れを惜む中ゑ當時寶井其角も斷金の交り厚き同胞の如く思ひをりしとなれば新島守と身をなして八重の汐路に趣むくときに足を空にし走り來り互ひに手と手をとりかわし涙を流して別れを惜む當下一蝶涙をとゞめて哀別離苦は世のならひ今更悲しむべきにあらず若互ひに命あらばまた逢ふ期のなからずやは然かれども今よりして限りも知らぬ波のうへ萬里を隔つ身となればたゞ一紙の消息だに贈り得んと難かるべし今までは好る道とて拙なき畫をもて世を送りしが是より後はさる業も絶てその要なきに似たり聞く島守いたゞ魚を漁り或は乾魚に製へて諸國へ送るを活計とする由予もはやその群なりさればわが乾魚を製する毎に一尾の魚に松葉を挾みておくべければ若乾魚のその中に松の葉を挿たるあらば未だ一蝶は存命て島に在ると思はれよこの他にまた存亡を告るよしもあらずといふ其角は是等を聽につけても敢果なきと限りなく心も消る思ひはすれどいかにとも術なくて泣々袂を分かちけるが夫より後は心ゑ忘れず乾魚を商ふ家毎にたち入りてこれを見るに松葉を挿たる魚いなし或時人の誘引によりて北里

の花街に趣むき茶坊の床机よ腰うち掛て往來の人を見やる折から乾魚を商ふ男子の來にければ呼とゞめてこれを見るに果して松葉を挿たるあり其角は大に歡びてそのある限りを買とりつゝ茶坊の店先にうち並べ夫より四方に人を走らせ常に一蝶が親める友を遣りなくこゝに招き今日如此々々の魚を得たり一蝶いまだ存命なるぞ各々こゝにて祝し給へと多く酒殺をあつらへて渠が爲に壽の酒莚を開きたり其後大赦あり一蝶も謫所より歸りこのことを聞きてその赤心を謝せしとぞ

●怨靈平九

元祿より享保の頃まで盛んに行われたる俳優山中平九郎（俳名仙家）或る狂言の怨靈を扮せんとして開場前一日我家の樓上にあり獨り鏡にむかひ狂言怨靈の顏色身入をさまゞに工夫し兎やせん斯くやと眼をよせ口をひらき心を練り思ひを凝らし終に自身にもれそろしき程の顏色身入を工夫し出しこゝぞ十分の思入れなりと思はずスックと立あがり怨靈の身ぶりをする折しも其の妻日長のつれ〳〵にとて煎茶を持ち何心なく樓に上り來りしにれもひもかけず此のありさまを見アッと叫びてのけさまよ階下へ落ちて氣絶せり家内の者此の物音に驚ろき打寄りて氣付藥をあたへ辛らふじて甦がへりぬさても平九郎は吾技精神お入り我妻すら斯く氣絶するに至るかくては看客を感動せしめんと難からずと大に喜び其工夫にて狂言を演せしに果して看客群をなし前代未聞の大當りにて（怨靈平九）の名を得るよ至れりとなん

●古川古松軒盜物を詮議す

寛政年間備中よ古川古松軒と稱せし翁あり藩士暇あれば翁を訪ひ談話す一日數士相伴ふて翁の居を過る談話中翁は家事の生せし爲めよ謝して別室に出で之を辨理し數時間を經たり諸士皆な倦む時初冬に當り簷端「つるし柿」數聯を懸け日に曝らす顆々味方さに美なり諸士竊かに謀り盡とく之を食し以て翁の爲す處を試む暫らくして翁事を了し再び坐に就き謝す諸士默して翁の言を發するを待つ翁從容として前話を繼ぎ戲談して片語も「つるし柿」に及ばず已にして其傍に在る處の烟草盆より小抽斗を抽き忽ち色を變じ搜索して措かず諸士怪んで之を問ふ翁思ふ有る如くよして曰く諸君が訪はるゝ前に某氏より數金を受取る諸君の來るに會し急に此の小抽斗よ納め迎ひて相話し此烟

草盆を他室に移さゝるは諸君の知らるゝ如し然るに今之を檢すれゞ其金全くなしと諸士各々起つて周く之を索むるも其金出でず皆氣の毒なる色を爲す翁因て妻孥を呼び糺問し奴婢ゟ及ぶ皆駭然として少しも知らざる旨を陳じ頗ぶる諸士を疑ふの色あり諸士大に困す翁乃ち曰く此烟草盆の他に移さゝるは諸君の知る所なり諸君の盗心なきは吾平生熟知する所ろ而も金の無きを如何せん吾ゝ決して諸君を疑はず而かも女子と小人ゝ養ひ難しとやら奴婢輩其口ゟ言はざるも諸君を疑つて他人に語らば口舌相傳へて怪事と爲すも亦防ぐ可らず是れ實に一大難事なりと諸士口を揃へて曰く誠に然り若し然るときは武士道立たず翁は智者なり願くは憐みて此疑を解け翁沈吟稍や久して曰く人々戸々豈に一々にして辯解す可けんや且此事口舌を以つて爭ふ可らず此に一策あり熊野午王を飲まば詐僞する者必ず吐血すと其說愚と雖ども世人之を信ずる久し僕前年熊野に遊び其眞なる者を得て歸り談柄に供せんとして未だ之を試みず今水に融解して諸君一杯を飲む時は勞せずして群疑氷解せん然りと雖ども失禮甚だし敢て强ひずと諸士皆曰く是れ妙策なり僕等速かに之を飲まん翁欣然起て各一大椀を供す諸士皆之を飲む若澁比なし然れども勢ひ辭す可らず眉を顰め唇を噤め顏をしかめ頭をふりやう〳〵にして之を盡し急に起ち嗽ぐ者あり嘔く者あり皆曰血ゝ固より吐がずと雖ども何ぞ神藥の苦きやと翁冷笑して曰樂み極まれゞ哀み來る大に甘きの後ち大に苦きも固より物理の當然ふり此ゝ所謂「ダラニッケ」と稱する腸胃の藥なり僕諸君の甘き物を多く食して腹痛を發するを恐る故に此の藥を呈せしなりと諸士始めて翁の權畧に陷ゐりたるを知り大噓各々腹を捧し以て柿を窃み食ひたるの罪となす

●文法は卑語の中にも存す

世の文法を授くる者率ね唐宋八家の文を以て準とし我邦の文書に至ては概して鄙俚章を成さゝる者となせり是れ其見る所ろ文字章句の間に止まりて未だ結構の上に於て更らゟ此より大なるものあるを知らざるの過ちなり「世を捨てば吉野の奥に(與)それよりゝ(奪)かたてのなるか深き隱家」此歌は以つて文章與奪の法を知るに足らん「我家に人の來ることそうるさけれ(擒)とはいふものゝ(縱)貴樣ではなし」これ以つて擒縱の法を悟るべし三十一文字なる一首の中に於て尙且つ然り況してや其詞稍や長きものに

於てをや曾つて白隱禪師が達摩三絃を弄するの圖に題せし讃を觀るゝ曰く「任麽是祖師西來意(問極莊重)そんなことといふてくりやるとオイラハ氣が詰マラアー(答極鄙俚)彈き見れば心の底に駒はなし絲が鳴るやら撥がなるやら(語似鄙近而意則莊重)傍有座頭四分一者曰チン、ツンテン」主意唯一句妙在レ不二說破一と評すべし看よ他の極めて鄙俚の語を以つて宗門の第一義たる莊重の一問を推開し來る其筆力果して如何是れ恰かも彼の李白山中答客詩の笑而不レ答心自閑なりと即答せると一般既に答へずと云つて却つて桃花流水の悠然たるを說きたるは又恰かも「氣がつまると云ひ却つて其自然に出るを說くに似たり何等の巧思ぞ要するに乍ち莊重乍ち鄙俚變化自在而して結尾に至り戛然として響を止むるものと謂ふべし其妙言ふべからざるものあり然れども禪師は固とより博學を以て著る其文の妙此に至る復た怪しむに足らず左に一曆鄙俚卑語よ屬するもの却つて妙味ある一例を揭げんに世の馬喰と稱ふる者の人よ與へて債を責むるの手簡なりとて傳ふるものあり馬喰の名を「龜」と呼ぶ其書に曰く「金三兩馬代(單刀直入)右馬代(重疊說下自覺語氣矯健)くすかくさぬゝ(遺與不遺二項雙雄)こりやどうじや(一問使人先思其處置)くすといふならそれでよし(即是小頓挫)くさぬにつけてはおれがゆく(漸說入主意)ゆくにつけては只おかぬ(一句主意)龜が腕には骨がある」(何等警語)と看よ他の重疊說下し來り一緩句なきを其間遺と不遺の二項を持ちて雙關と來る其氣魄光燄幾んど項羽が宋義を責むるの語と馳騁せんとするの勢あり然れば則ち文法固より特り文字章句の間に在らずと云ふも不可なからんか往時頼山陽翁學生に詩を授くるに「大坂本町絲屋の娘(起)姉は十六妹は十四(承)諸國大名ハ弓矢で殺す(轉)絲屋娘は目で殺す(合)」と云へる俚歌を以てせりと聞く亦た以つて文法の間々卑語の中に存するを知るべし

●將棊の傳來

舊幕府の將某所名人伊藤宗印氏の記錄中に將棊の傳來を詳記せるを觀るに將棊は唐土に初まり後周の武帝が創造する所にして其の本朝に傳いりしは吉備大臣が入唐歸朝の折り初めて齎らし來れるより弘く世に持て囃やさるゝ所となれりと云ふ然るに當初大

臣が持ち來たりしものは末に出す圖の如く玉將の頭に醉象各金將の頭には猛豹の駒ありて意味薄く從つて未だ運用の妙を盡さゞる所ありしかば當時軍學を以つて有名なる大江匡房卿の工夫にて醉象猛豹の二種を除き去られ夫れより無量の手段無究の變化を生じ爾來陸續上手名人も出で來り殊にハ織田信長公執政の砌りハ將棋所を被立置其後豐臣家並びに徳川家にも同樣の設けありたれば此道も追々に開け進み終よ技術の優劣に因て等級を定むることとなれり其等級の梗概を記せば凡そ九等に分ち第一等を九段之を名人と稱し次を八段半名人次の七段を上手六段を上手間五段を上手並四段を强片馬三段を並片馬二段初段を手直りと稱す然かして其名人と稱する者棋道一切の事を總理し段階を授與することを司どる名人なき時は三家の家元協議の上段階を許可すと雖ども之れと同段を許るすを得ず故に家元たる者實子ありと雖ども家業未熟なれば其任相當の者を選んで養子となし家督を讓るを常となすこれより棋道益々盛んにして遠く海外に超越するに至れり今ま其吉備公が歸朝の際唐より齎らしたる古圖なりと傳ふるものを左よ揭載す

吉備公齎來象棋之古圖

香車		歩兵						歩兵
歩兵		歩兵						歩兵
	香車		歩兵	角行	桂馬	飛車	歩兵	香車
歩兵	桂馬	歩兵	銀將	金將	玉將	金將	銀將	歩兵
角行	飛車	歩兵	金將	猛豹	醉象	猛豹	猛豹	歩兵
桂馬	桂馬	歩兵	銀將	金將	玉將	金將	金將	歩兵
歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵

●忠臣藏お輕の實說

淺野内匠頭切腹赤穗退城の後家老大石内藏助居を山科にトし復讐の念切なりといへども故と日夜淫酒に耽り表に遊蕩を示し伏見の里の遊女浮橋といふに通ひ狎れて朝夕の

別ちなく醉倒れて遊びてのみ暮しけり義士の面々はこれを見て心安からず思ふうちに遠藤小山兩人相談して内藏助は我黨の將帥なりかゝる擧動にていかでか衆を統るを得んや是れ偏に枕席のつれ〴〵なるゆゑならんとて（是より先き内藏助は其妻子を舅なる石塚源五兵衛の許に預け此時は獨住なり）京都紫野なる禪刹瑞光院主陽甫と謀りて（陽甫い淺野内匠頭の室瑤泉院の從弟にて淺野家に緣故ある者なり）京都二條寺町の二文字屋次郎左衛門といふ者の娘れ輕が容色絶群なりしかば之れを納れて妾となさしめたり然るに内藏助此の婦人を愛すること甚だしかりしが後いかなる故にやその里方二文字屋の許へ預け置きて絶へず通ひけり然るに元祿十五年復讐の期至りて内藏助江戸下向の前夜（十月七日）二文字屋にいたり是非なき用事ありて明日關東へ發足するよしを告げしかば家内一同不審に思ひつゝ先づ名殘の盃をと侑め門出を祝ひけれどもれ輕はたゞ打しほれて燈い暗し數行虞氏の涙と一古句を口ずさみけるを内藏助聞き咎めて斯る愛たき門出に數行の涙とは思ひもよらずいざ常に手馴れし調べをと望みければれ輕はやがて爪琴引寄せて「七尺の屏風はれどるともよも踰じ羅綾の袂も引かばなどか截れざらん」と唱へつ爪音に殺聲を含みて彈じければ内藏助打笑みてゝらしの今の一曲や誰れかは面白しと聞かざらめとて程よく宴を收めて立出けるかく

て十二月に至り夜討の日も豫じめ定まりければ瑞光院へ内匠頭墳墓の料を寄附するの書狀の序でに（内匠頭の遺骸は人も知れる如く泉岳寺に葬りたれども此瑞光院の墓は内藏助が内匠頭の遺物烏帽子狩衣等を埋めて築きしものなり）緋無垢の小袖二ッを院主に托してこは拙者常に着馴れたる小袖にて候へば一ッは妻が許へ差下され一ッは輕女が許へ贈りたまいるべしと賴み送れり、その紅梅衣の裏には數百首の和歌を自書せり院主限りなく哀れにおもひて驚て二文字屋が許に一ッの小袖ををくり一ッは但馬へ下すべしとゞ回答して右の如く計らひけるとゞ斯かればお輕は娼妓にもあらず又た勘平の妻にもあらず而るに淨瑠璃作者が淫奔にして遂に身を烟華叢裡に沈めし如く作りしは亦た甚しき妄といふべしと或書に見へたり

●谷風小野川の話

谷風は四拾八貫目强力海内無雙と稱し小野川は貳拾七貫目力量谷風に及ばずといへど

も手練古今獨歩の名ありて當時東西の大關たり時に二段目の相撲、赤田川は小野川の弟子なりしが年既に四十を越ゑ追々退歩に向ふよりして何卒谷風に一たび勝ちこれを相撲の面目として引込んと思ひ小野川に其由を告げ勝べき手を授けたまへと請ひければ小野川雲時考へ汝が微力と云ひ手練と云ひ谷風に勝つ事は覺束なし但一ッ稽古するならば或は勝つべき手ありそは谷風が立あがり未だ身構の整はざる所を外さず強く胸を突くならば或は倒るゝ事あらん其呼吸は十三四日稽古せざれば了解しがたからるべし眞實に勝たく思ふならば明日より稽古して取らすべしといふゑ赤田川大に喜こび是より日々來りて稽古を受けしに十日目に至り是ならば必勝を取るべしと小野川許せしかば乃ち谷風に立會を乞ひたり谷風其鋭氣を大に感じ早速立會を許し土俵に臨み立あがる途端の機を誤らず力を奮つて突き入れれば谷風は譯もなく動と後方に倒れつゝ大聲發げてうちわらひ赤田川汝は師匠に敎はつたなといひしとぞこは谷風は肥滿たるにより土俵に出で立あがりし時い速りに總身へ氣の滿たぬゑ依り其の虛を衝かしめし小野川の機轉なりしを倒れながらこれを察したるは流石は谷風なり又淺草八幡境内にて相撲興行ありしとき谷風小野川兩關取組の日谷風相撲場への出掛、藏前の米屋の前にて奉公人三四人打集り米俵を捧げて力競を爲すを見て谷風立留り笑て居りしを少年輩谷風に向ひ親方此米俵を兩手に持ち拍子木が打てますかと問ひしに谷風答へてされば十位い打てさうなものなりと即ち四斗俵二俵を兩手に持ち廿五六度拍子を打ち呵々と笑ひ投げ出して行たりし跡へ程なく小野川通りかゝりしかば少年輩呼びかけて今谷風親方は此俵にて廿五六度拍子を打たり親方も打ちて見せよと言へば小野川夫い面白き事なり打て見すべしと造作もなく一つうちナンノ譯もない事三十位は打てやうと言ひさま投出して行たりしが此日の取組い小野川見事ゑ勝を取りしと云ふこい小野川の腕にても十位は打ち得らるべきなれど谷風の廿五六打ちたるを聞き其勞に乘じて勝を取らんとして態と一つにて投出したるなりとぞ

●梁川星巖髮を削て花柳の債を免かる

梁川星巖書生となつて山本北山の塾に在りし頃同塾の書生屢々北里ゑ誘へども星巖何時も應せざりしにぞみな〳〵氏を憎み君い臆病なり何んぞ大都の妓館の盛大なるを一

見して其膽を大にせざるなど嘲り罵ることもありしが星巖い固より大志を有し事々人後に落るを愧る人なりしかば胸中窃かに一策を畫し一夕獨り仲の町の一茶亭に到り當節有名なる妓い誰れなりやと問ふに亭主某樓の花扇なる旨を答ふ、然らば其樓に伴へよと到りて花扇に接すれば風姿窈窕如何よも茶亭に聞く所に背かす星巖驩飲寢に就き徐ろに妓に告ぐるに實情を以てし且つ明日諸生と共に再たび來るべければ願くば舊知を以て余を遇せよと依頼しけるよ花扇も當世の名妓と唱へらるゝ程のものなれば早速に承諾して後日を約し星巖は塾に歸れり斯くて一兩日を經或る夜諸生に向ひ兄等先さに屢々僕に登樓を勸めたるも僕の之に從はざりしは誠とに臆病なりとす僕今日幸ひ囊中若干の金あり願くば諸兄僕を誘へ給へ諸生一議に及はず直ちに諾し乃ち相携へて行く既にして仲の町よ至り花扇の樓を過れバ星巖之れを仰ぎ見故らに驚いたる顔色をなし諸友に向ひ如何よも諸君前日の言の如く大都の壯樓は吾人の膽を大にするに足ると頻りに嘆賞するにゞ皆々此樓に登ることに一決し扨て門内に入るに花扇は靚粧麗服徐々として出で迎ひ星巖の手を執りて頻りに疎遠を詰るを見て衆皆愕然たり兎角する内星巖は妓に誘いれて花扇の房に入り衆も亦た踵で到れば丁蠶錦の茵を薦め花扇銀管を以て喫烟を進むる抔星巖を欵遇すること殊よ厚く星巖亦た意氣揚々たるにゞ諸生は愈々驚く内に樓丁數妓を引き來り之れを諸生に配するを見るに皆な花扇に比すれば下ること數等なるゆゑ諸生等且つ慚ぢ且つ憤はり或は宴の未だ終らざるに早く歸るもあり皆な一同に星巖に一杯喰いせられたりと吃さたり斯くて翌日皆々塾に歸り星巖を詰るに星巖は屈する色なく兄等向きに屢々我れを辱しむ故に聊か之れよ報るのみと一笑したり後星巖深く花扇の然諾を重んずるよ感じ數々之れを訪ふて衣物其他の所持品を典じ盡し赤貧洗ふが如くなるに至り樓主は債を責むること益々急に星巖幾んど策の出る所を知らずたま〳〵八町堀に熊と字する獄吏あり此のもの酷薄の性を有すれども亦文雅を嗜み時々北山の塾に來ることもありしが或る日星巖い例の如く債主に逼られ頗る困却の体なるを熊は前刻より來りて隣室にあり窃かに樣子を窺ひ密と星巖を招いで耳語して曰く「君若し髪を愛まずんば我れ能く君の厄難を救はん」と星巖も困却の折柄なれば直ちに之れを諾す熊曰く「然らば君先づ髻を斷りて之れを債主の前に出し

之れを以つて金に代ゆる旨を述べて謝せよ彼れ諾せざるは必常なれば其節い我れ出で丶債主を威迫せん」と星巖一笑其言の如く債主は肯んせざりしかば熊は此時なりと障子を荒々しく推し開らき突立ち上りて債主を一睨し叱して曰く「武士の髻を斷りて謝するは宛ながら首を斷りて謝すると同様なり然るに汝尚ほ債を責めて已まざるに於ては我れ必らず官に訴へて汝を捕縛せん汝知らずや我れは有名なる傳馬町の獄吏熊なるぞ」と最とも嚴しく威せしに債主も其の熊なることを知り大に驚き戰慄して幾んど辞の出る所を知らず俄かに星巖の債を許るし且つ多くの酒肴を熊に贈り只管らゑ詫びて逃るが如く塾を去り星巖も漸やく厄難を免かるゝを得たり、星巖既に髻を失ひたれば序に全髮を剃り落し破れ袴を購ひ僧笠を戴きて北里に托鉢し通よひ慣れたる某樓の前に至るや朗々佛經を誦し又花扇を呼び互ひに相見て大笑し去れりと其襟胸の寛常に此の如し

●叩々老人幽靈ゑ扮す

駿河の叩々老人い老莊より出で丶狂禪に入り生涯を洒落に暮したる人なりしが從來赤貧洗ふが如く囊中屢々匱しけれども餒たる顏色もなく常に怡然として樂しめり人之れに錢を與れば顧みずして去る酒を贈れば悅んで飲み醉ふて謠ふ其澹泊此の如くなれども唯一つの病は酒舗の前を素通りにする事の出來ぬ性分なりし故に常ゑ酒舗に借錢あり或年の大晦日酒舗の主人其菴室の近傍に至り別に債を促すゑもあらねど一應の定則なれば兎も角も立寄り見んと菴の内に入りて見しに燈火も暗き破れ行燈に「今晩留守」と書し其側らに老人兀座す債主笑つて先生如何がなされしといへば今晩留守で御座ると答ふるに債主も呆れていかに先生あまり其れでは戯言が過るといへばイヤサ先生の口から留守だと言ふからは是程確かな事はなしと言ふに債主も噴き出して歸り深く其磊落あるに感じ更らに酒一升を贈れり又或時兒輩打寄りて紙にて幽靈の形を作り此に糸をつけ樹の枝に釣り上下して夜中行人を劫かさんとするを見て大に笑ひそんな事では驚く人はない我れ自ら幽靈となり人を驚ろき走らせ汝等を面白がらせんと一丈餘の竹馬を作り白地の浴衣を着て之ゑ乘り夜中森林の前を徘徊す時しも一士人此所に來かゝり之を見て大に怪しみ劍を拔ひて之を逐ふ老人竹馬なれば疾く走るを得ず大に困却

し大聲揚げてアヽ許せ〳〵己ダ〳〵と言へども士人少しも聞容れず刀を揮つて竹馬を截らんとするにぞ老人狼狽周章き遂に竹馬より落つ此時太く腰の骨を折じきたればこれより病床に臥し終よ起たず其辞世に

五斗はおき後生も乞はぬ我腰を
折りて今日ハイ左様なら

●畫幅を以つて裩に易ゆ

僧月僊は伊勢の人にして能畫を以つて名あり然れども性甚だ吝嗇よして潤筆の料を貪るの癖あり畫を請ひ來る者あれば必ず先づ其價を論じて而る後ち始めて筆を執る程なりければ世人の謗りも喧すしかりしが月仙敢て顧みる所なく益々潤筆の料を高ふせり茲に一名妓あり偶々人を月仙の許に使はして畫幅を乞ふ月仙例により先づ價を論じて甚だ高し使者還り來りて妓よ告ぐ妓曰く其價の高下を問ふ勿れ宜しく欲する所に任すべき耳と畫成るや月仙躬から携へ來りて妓に面會を求む會々客あり盛宴を張る妓乃はす迎へて宴席に引き金若干を攫んで月仙の前に擲うつて曰く「畫を賣るの人倶に齒するに足らず、汝が賣る所の畫幅固より之を壁上に掲ぐるに足らず」と即ち衣服を脱して稠座の中に立上り自ら其着くる所の裩を解き月仙か畫く所の幅を以つて之に代へ哄然大笑して曰く「妾雅幅を獲ざる代りに一の佳裩を獲たり」と一座目を掩ふて月仙の爲めに愧づ月仙熟視毫も愧る色なし後益々其價を貴くし獲る所の金を人に貸して息を收め積んで巨萬の富を致す是に於て稍々散じて以つて窮民を救ふ貧人之に頼つて以つて活路を濟すもの甚だ多きに至りたれば終ひに初めの物議も漸く消滅するに至り今まに伊勢の國人は呼んで「月仙金」と云ふ

●王安石の字說

熙寧年中王荆公の字說新たに成るを聞き東坡戯れて曰く「竹を以つて馬を鞭つて「篤」となし竹を以つて犬を策つを「笑」と訓むは如何荆公曰く「然れども波は乃ち「水の皮」にあらずや」公又曰く然らば「水の骨」い果して滑かなる歟と荆公默然たり荆公更らに問ふて曰く「鳩字は九ッの鳥なりこれ證據ありや」坡公曰く「詩にこれあり鳴ける鳩、桑よ在り其子七と然れは即ち其父母を合せて九個となるに似たり」と荆公其の諧謔に出

るを知らず聞ひい欣然たり又嘗つて荆公に問ふて曰く「丞相微を摘して模糊の説を成す牽強附會たるを免れず姑らく莽麤の二字に就て言はんに牛の体は鹿より粗大なり而るに三鹿を合して粗大と訓むは如何に又牛は鹿より遲し而るに三牛を合して走ると訓むは如何ん二字皆其義に反するに非らずや」と荆公答ふる所を知らず

●和歌を以て罪を謝す

「浮世には心とめじと住山にこはなにごとぞ春のあけぼの」と云へる和歌と俱に著名なる僧湧蓮は伊勢の人なりあるとき茶人某の許に招かれけるに湧蓮は茶を好まずとて行かざりしに再應の招きに辭し兼ね終よ行きて茶席に座を占め居たりしが主人不圖用事出來座を立ちたる跡にて湧蓮何心なく茶入を取りて見てありしが如何にやしたりけん爐中よ取落し少しく損所を生じたる折柄主人出で來り之れを見て惜しむ氣色の面色にあらはれしかば湧蓮も氣の毒にや思ひけん默然として居たりしが主人も漸やくよして其座の白らげたるに心附き御あやまちは是非もなし何卒和歌一首よみて此の器に添へ給へと乞ひければ湧蓮も漸やく心落ち着きて筆を取り

伊勢の海の海士の翁の仕業とて二見浦に煙立けり

と書て示しければ主人も大いに喜びこれにてこそ此茶入の一奇事とこそなりたれとて大いに興に入りて其日を終はりぬ扨て其後此の器この事によりて若干の金圓に換へられ某侯の珍藏とはなりたり

●雅典の兩畫手技倆を鬪はせ

古昔希臘の雅典に哥格西並に巴拉修と稱する人あり共に丹青の道に聞え高かりしが二人相約して各々其技を鬪はせたり哥格西ハ葡萄を描きしよ顆々眞に逼るを以て鳥來りて之を啄めり巴拉修は薄紗を描き窓に掛けて哥格西を招きしに見て眞の窓紗とれもひ巴拉修に之を捲て風を入れんとを請へり時人稱して曰く哥は鳥を欺きしは巴の人目を欺きしに若かずと哥格西之を聞て大に愧ぢ其後畢世の力を盡し童子が頭上に葡萄を盛りたる籃を戴ける圖を作りしよ鳥復來りて葡萄を啄めり然るに哥格西は益す喜いずして我童子を畫くと葡萄に劣りたればこそ鳥の啄むなれ童子にして若し葡萄よりも勝りたらんには鳥ハ恐れて來らざるべきにとて大いに愧ぢたり

●烟草叢談

今時こそ喫烟大いに流行し上下貴賤の別なく烟具を携ふこと常となりたれども凡て昔は烟草を懐中することいなく他人の家を訪問せる折にい主人の出せる烟草盆の内にある烟草を喫むを常とせり扨て其喫み様は主人の座敷へ出るまで客は之れを喫まず主人之れをすゝむれば客は辭退して先づ御主人よりと恰かも酒茶の禮式の如く二三度も辭退す其時主人は重ねて鼻紙を延べ烟管の鍔をはづし（此の時分の烟管にい疊を穢さぬ爲め鍔をはめたり）紙を以て烟管を拭ひ是にて參れと差し出す客戴きて之れを喫み善き烟草なれば結構なりと褒むるなり一吸も二吸も吸ひて又鍔をかけて我前に置き歸る時は紙にて之れを拭ひ烟艸盆へ入れるなり其烟管を拭ふときに主人い其儘に差置るべしと挨拶す若し主人の方頭役なるか親方なれば假令主人より喫めといはるゝとも給べずと云て喫まぬを禮とす（聞く今蝦夷の土人か烟艸を喫む折主客の禮式殆んど此の如しと）斯く喫烟に禮式あること故當時無法なる腕立てをなして我意を盡したる人なりとも慇懃なる座敷或は親分老人などの前に於て烟艸を喫し人なしと而して今は其喫

み様も無作法千萬となれり昔い烟艸入を落したりとも自分の物に非ずと云ひて隱しけるとなん又寛文の頃まで長壽せし老人の物語りなりと云ふを聞に煙艸い南蠻人我朝へ往來して之れを喫み初めたり其時分には小さき蠟燭を立てゝ喫みたる人多し然るに間もなく大にはやり出し上も下もれしなべて珍重することとなれり其以前世上にコセ瘡といふもの流行せしよ烟草を喫める人い此患ひなしと云ひはやらせて廣く世上に廣まれり然れども近代の如くよ華美なる煙草道具はなし只竹煙管とて細き竹の節をこめて火皿程ゐ切り眞書の筆の軸ほどのものを横につけて喫みしなり故に煙管を持ちたる人は至つて稀なり依て下々などは直きに煙艸の葉をくるくるとまき其吸口に紙を卷き火を付けて喫みしと云ふ當時十萬石とり給ひし大名の煙艸を喫みたるを見るに先づ近習の小姓を呼び煙艸喫むと命ずれゞ彼小姓片手に釣の付たる火入に火を入れたるを提げて立出で火入れの脇に一つの小石を置き又其片手には唐革の二尺四方程なるを四つ折にして持ち來り之を主人の前に置く其唐革の内にきせると煙艸あり火入を其革の上よ置き煙艸をつぎて差出す主人喫み了れば石にて灰を落し右の革をもとの如くたゝみて勝

手へ入る又た煙艸呑まんと云ふときは幾度にても此の如しと當時大名すらも尙ほ如此し下々の質素推して知るべし

●連歌狂体彙聞

西行法師津の國に行脚の時、尼の手づから板屋根を修覆し居りけるを見て「賤か板屋をふきぞ煩ふ」といひけるに其尼も流石のものなりしと見ゐ取り敢へず「月は洩れ雨はとまれと思ふにぞ」と附たるには法師も閉口せりと、又萬治年間禁裏炎上の時公卿皆な逃げ迷ひ玉ひし中に清水谷殿風早殿を呼びかけて「風早と聞も恐ろしけふの火に」と戯むれしに風早殿取敢へず「清水谷とて燒も殘らず」と附けたりと、又細川幽齋豊太閤に伺候し居る際太閤突然幽齋を顧み「時に細川ニヨット出でけり」これによき附句ありやと問ひ給ふに幽齋取敢へず「御所車通りし跡に雨降りて」と附たるよい太閤も一方ならず其才を感じ給へけり、又郡山侯は近衛殿の歌の門人なりければあるとき上京の序でに參られけるよ、折ふし雨降りければ近衛殿「五月雨にやうこそきたれみのゝ守」と遊ばしけるに郡山侯取りあへず「あの江この江を探る鵜つかひ」と付けたりと何れも即吟妙と云ふべし

●葦芽を以て盜を知る

江戸本所松坂町に葛西某なる幕臣あり其家婦一日金釵を室に失す惟ふに何人も室に入り來れるものなしたゞ家に二婢あり出入用を辨ずるのみこれ必らず其一ならんと乃ち之を訊ふ各々肯て知らずと答ふ婦仍て庭池に生ずる所の葦芽二本を拔き來り各々一本を持ち去らしめて曰く聞く盜まざる者は明旦に至るもこの葦依然たり若し果して盜める者ゝ必らず其長さ一寸を抽んず可しと翌朝各々召して之を撿するに一は依然として一は其丈け二寸を短くせりこれ必らずこの金釵を盜めるが故に芽の長せんとを慮り豫じめ之を切り去れるものならんと理よ責められて一婢遂に其罪に服せりとぞ

●候べく候

柳亭種彦の用捨箱に曰く昔しは行なり次第にしておけといふ事を、候べく候にやつておけと云ふもの多かりしが是れは昔しの女の文には候べく候といふ事多くありてゆきなり次第に書ても讀し故それを書く樣にしておけといふ意なり季吟十會集（寛文十年

の刻）の内に「つらねぬる歌の趣向は深かれや候べく候にあらましの文」といへる歌あり由りて考ふれば此諺は寛文前よりありしを知べし寶暦頃の輕口話に候べく候を人にすぐれて多く書く女ありしが、あまりに〳〵に筆任せに書きたる候べく候讀まじと思ひ其の側に候べく候と又書て再度思ふには二ッ書しを若し怪しむ事もやと又側よ此の候べく候は書損の候べく候にて御座候べく候脇の候べく候が本の候べく候に御座候べく候と書たりと云ふことあり此の話をもつても昔は候べく候を多く書きたりと見ゆ

●近松門左一夜に院本を作る

享保五年の冬近松翁京都の一酒樓に遊びてありしが俄かに大坂より二三の俳優來り昨夜細島の大長寺に男女の情死あり何卒速かよ大坂へ歸り淨瑠理よ作りて給らば明日一日の稽古にて明後日より直ちに興行せんとて只管よ賴みけるにぞ翁も首肯早籠に打乘りて大坂に歸り駕籠より下るや否や直ちよ筆を執り駕籠にて走りかへりしまゝ書き初めたりとて冒頭よ「走り書」と書き出し直ぐに「謠の本ゝ近衛流、野郎帽子は紫の」と書きつゞけ即時に一篇の院本を綴り終りて外題を大阪に橋の多き縁より「思の橋盡」し」と命じ翌日より興行しけるが非常の喝采を博したるよし翁の趣向の忽ち湧き出ること凡そ此類なり

●冬日の薄羽織

肥後の大儒藪茂二郎大阪の名儒中井積善を初めて訪ひしときは正さに嚴冬の頃なりしが茂二郎ゝ三伏の時節に用ゆる薄羽織を着用して見へたりければ積善怪しみて、如何なれば先生には夏衣を着給ふやと問しよ茂二郎答へて國許を夏出候ひしかばといひしとゞ其磊落物に拘らざるの狀思ひ見るべし

●千鳥の香爐

千鳥の香爐が天下の名器たることは何人も能く知れど其の名稱の由來を知るもの甚だ少なく或は其の形千鳥に似たるをもて斯く名づけたるならんと臆測し甚だしきに至りて非常の事あれば聲を發して報ずる抔云ふに至れり然れども元來此の香爐を千鳥と呼ぶは其形の千鳥に似たるを以て名付けたるにはあらずむかし東山殿義政風流を好み

一夕鴨河の千鳥を聞かんと漫歩さし給しとき何處よりか奇香の馥郁と薫じ渡るにぞ香を尋ねて行き給ふに一人の隱士川端に香を聞いてありけり東山殿も香道を好ませ給へるが故我れと樂しみを同ふするものなりとて限りなく喜ばせ給ひ遂ひに其香爐を請ひ得て館へ歸り千鳥の鳴く音を聽かん爲め出で行きて圖らず此の器を得たるよりかくは名付けたるなりと云ふ

●多年の夙志は蚊帳一はり

幕末加賀前田家の臣に一奇士あり井口嘉一郎と云ふ微賤の家に生れたれども幼より學を好み深く經義に通ず其家甚だ匱く一貧洗ふが如きも曾て治産を事とせず或夜友人の許に至り經論雅談に夜も更けたればとて其家に泊りけるに偶々寒氣膚を刺すばかりなるにも拘らず敢て寐床に入らず着服の儘端坐してけり友人怪しんで何故に兄の爲めに設けたる寐床のあるに夫れには就がずしてこの夜寒に坐睡さるゝやと問ひたるに然ればにて候僕元と赤貧家に夜具なし故に若し一夜幸ひにして兄の惠により溫袍に安眠するも明夜家に歸らば一層寒を感じ到底眠りゐ就く能わず或は感冒にても觸れんとを恐るゝが故なりと答へたり其後藩侯の拔擢する所となり擧られて儒員頭ともせられんとしけるに同藩中高祿重臣のものにて儒臣固より尠からざれば設令井口如何に碩學なりとて斯る微賤より擧られんとの嫉ましとて種々の妨害を試みたりと、中にも論語を讀むに一藩皆な「子曰」を「子のたまはく」と訓するを氏は獨り「子曰はく」と訓讀したりけるをこは孔子を貴ばざる嗚呼の擧動なりとて太く之を排斥したれば折角の主命も幾んど空しからんとせり仍て親友中氏を戒めて些々たる「子曰」の訓方の爲に出身の出來ぬとは殘念の至りなればこの義は枉げて俗衆に從はれよと忠告せるもの多かりしも氏遂ひに應せず爲之藩主も氏を擧ぐるを得ず登用の沙汰は其儘止みたりしとなん然るに維新の際に至り門閥任官の弊を改め人材登用の道を開きたれば氏も其撰拔に洩れず縣少屬に任用され其後東京へ轉任し數年を送る中一年夏期賜暇を得て歸省しけるに氏は欣々然として余今にして始めて多年の夙志を遂げたりと朋友知己に物語りたれば聞く人毎に其高節奇潔の初めゐ似もやらぬ事を言いるゝもの哉君い少屬位の小官よて甘んせらるゝにやと詰らぬはなのりければ氏は否なとよ余が夙志を遂げたりとは今日歸省

に際し俸給の餘金を以て一の蚊帳を購ひ得たるによりこれより盛夏の候と雖ども蚊軍の襲來を防ぐの具に乏しからざるを得たるを喜ぶのみと

●三好長慶危變に臨んで驚ろかず

むかし三好長慶京都なる某殿の連歌の會にありけるに「海に交る蘆の一もと」といふ句出で、難句なれば一座付け煩ひて有ける折節、早打の使來りて長慶に手紙を差出したり長慶見終りて、脇に置き此の附句は枉て某が申受仕候べしとしばらく思案して

古沼の淺き方より野となりて海に交る蘆のひともと

と附けたるに一座皆な秀逸を驚歎せり長慶座中に向ひ今見給ふごとく早飛脚來りて舍弟實休、泉州に於て只今打死仕り味方敗北に及べりとの事なり長慶此所より直ちに出陣いたし候也去れば今生の御暇乞にも成候べければ此句枉げて申受け附候なりと云ひ捨て直ちに出陣せり何ぞ胸裏の洒然たるや

●榎本其角俳句の點料を只取りにす

其角江戸の照降町に寓せし頃或人書狀に點料を添て草稿の評點を乞ひしに其角折しも燒味噌を下物とし一盃飲み居りしが盃を手にしながら開き見てこは無下の初心と見へ餘りよ拙なし我が點を勞するまでもなし門弟の内やゝ先輩の者に賴むべしとて返しければ使も餘義なく請取りて點を賜いらぬ上は點料をも戻し給ふべしと云へば其角否とよ點は加へねども一ト通り目を通して拙なしと見定めたれば料は收め置くべしとてやがて持ち來りたる點料にて更らに酒を沽ひ一夕の歡を添へしと云ふ又あるとき高貴の人(安藤冠里公なりと云ふ)盂蘭盆會に招かれて泥醉せしが主公席上に盛り來りし金柑を指して金柑あつて銀柑なきは如何にと座客よ戯れ問ひしかば其角取り敢ず睾丸ありて銀玉なきが如しと答へ大笑を博せしと云ふ其の不羈磊落にして逸韵ある概むねかくの如し去れば其のものせる發句も亦た豪壯跌宕なり即ち「夕涼よくぞ男に生れける」「聲かれて猿の齒白し峯の月」「雪の日や船頭どの丶顔の色」などの句宛から其人を見るが如し

●日本に婦人決鬪の習慣あり

寛延年間の著述にかゝる「八十翁昔語」と云へる隨筆を閲するに曰く百二三十年以前は

「女のさうどう打」と云ふ事ありしよしにて離別されたる先妻より後妻に對し結婚後五日或い一ケ月内に申込むを例とし、先妻方の親類(男子は毫も關係せず)打寄り相談の上屈強なる女を親類其他知人の家より或ひい二十人或は四五十人多きは百人と身分相應に借り集め扨て新妻の方へ使(使丈い男子を用ゆ)を遣いす其の口上は「御覺可有之候、さうどう打、何月幾日何時可參候」云々と又持參道具は、木刀なりとも、棒なりとも、竹刀なりとも、其譯を申遣すしかし大方は竹刀なり、新妻の方にても男出でゝ取次ぎ、或はれ相手可致と返答するもあり或は何分よも御詫言可申と謝するもあり斯く言ひ譯すれば其の女一生涯の恥辱となることあり扨て日限に至れば離別の妻乘物にて供女は皆な徒歩にて、くゝり袴、襷、髪を亂し、又かぶり物、鉢卷などし、甲斐〳〵しく出で立ち、竹刀を持ち押寄せ臺所より亂入し鍋釜、障子、あたるを幸ひに毀す、其の時雙方より仲人の女は同時に出會、仲へ立ち入りさまざまの言葉を盡して和解すと云ふ當時年頃の女にて此の「さうどう打」に備はれざるものは少れなり中には十六度賴まれたりと云へる老婆もありしよし右は八十翁昔語に載する處の一話にして其の前以て「さうどう打」を爲す旨を申込むを例とするが如き多勢の介添人を從へるが如き、豫じめ武器を定むるが如き、申込みを謝絶するを恥辱となすが如き處より見れば西洋の決鬪に大いに似たる處あるを覺ゆ去れば婦人決鬪の習慣我國に於て既に存したりと云ふも敢て誣言にあらざるべき歟

●風呂吹大根の事

俗間大根の輪切りを能く蒸したるを風呂吹と唱ふ今此の由來を案ずるにむかし風呂屋にて垢を去るを風呂吹と云ひたるより遂に假りて名を命ずるに至りたるが如し柳亭種彦の骨董集を閲するに昔しの風呂は皆な蒸風呂なることを記るし垢を掻くには屈竟の男、浴者の身体に息を吹きかけ其の濡ふを待つて掻けば妙に能く落るものなり又垢を掻くものは口拍子をとり息をかけては掻く其の調子を取るに巧拙ありて興あることなり故ゑ垢を掻くものを風呂吹と云ふ旨を載せたり此の說信實なるにや寶永五年の刻にかゝる本朝諸士百家記と云へる書中婿入に舅の方にて風呂を立てもてなす事を云へる條に「廣蓋にゆかた風呂敷かき替の下帶取揃上手の吹手一兩人相催して風呂へ入れ

ぬ」云々とあり又寶永七年の刻にかゝる自笑内證鑑と云へる書中大坂道頓堀の風呂屋の事を云へる條に「此風呂へ入相の比より來り吹いて吹れてザットあがり」云々と見も去れゞ寶永の頃まで垢を去るを吹くと云へること亦た疑なきに似たり扨て熱く蒸したる大根を風呂吹といふも息をかけて食ふ樣の湯屋の風呂吹よ能く似たるが故に斯くい名を命じたるならん歟

●其角宗珉の名刻を借りて返さず附り名刻瞬間に成る

昔し徳川三代將軍の頃江戸よ横谷宗珉とて町彫（猶民間の彫師といふが如し）にして有名なる彫刻師あり當時畫人社會よ在て盛譽を博したる英一蝶と其名を等ふせり某侯曾て其妙工を愛賞せられしより宗珉の名益を世に顯はれたり一侯其高名を聞き隅田川の風景を彫進せんとを命ず且つ其下畫は英一蝶と定まりたれば宗珉も之を榮とし兩氏は親しく其眞景を探ぐりてイデや一世一代の名作を奉つらんと凡そ三十日間も日々兩人隅田川の畔を徘徊して頻りに意匠を運らすも未だ美妙と思ふ景色を目擊せず殆と〳〵思ひ屈したるに一日偶然乘合舟にて今戸の渡しを向嶋まで過ぎらんとする船中に

於て遙か水上よ一羽二羽都鳥の飛び立つ樣の如何にも佳絶なるを見て此所ぞと兩人引返し共に丹精を凝して春江靜波の上に都鳥の飛び游ぶ景色を最とも精巧に彫刻し了りたり扨翌朝に至り之を侯に上らんとせしも先づ之を友人其角に誇らんものと思ひ携へ行きて見せしに氏も大よ之を嘆賞しつ愛觀の餘り朝明まで留め置かんとを懇請したりけれゞ宗珉も平生格別懇親の間柄にもあり何心なく其意に任せ歸りたるに其角は赤貧洗ふが如くなりければ私かに右の名刻を典物して若干金を借り入れたり其翌朝に至り侯より使者を以て兼ての彫刻は如何にと催促ありけるにぞ宗珉は急ぎ其角の許に人を遣りて返還を求むるに其角は包むに由なく其次第を打明けたれば宗珉大に驚き惑ひたれども今更ら詮術なく左りとて直ちに受返すの資力もなく不得止憤然として一時逃れに小柄の先きにて波上に都鳥の一二羽飛たる樣を瞬息の間に彫り付け使者に付して上りたるに侯見て大に喜こび誠に稀有の作ありとて激賞せられたり蓋し一時怒りよ乘じて刻みたるもの却て運刀非凡なるものなりしにやかくて其後某侯は此事を洩れ聞きて直ちに前の名刻を質受けしてともに之を稀世の名作として秘藏せられたりといふ

成瀬正成奇獄を斷ず

往時成瀬隼人正成の治下に米商八郎兵衛なる奸商あり父の代より陰かに大小兩量を用ひ不正の利を獲て富巨萬を致せり隼人領主となるに及んで政令嚴肅にして姦慝其跡を藏くすゑ至りたれば八郎兵衛大いに懼れて自首罪を請へり隼人謂へらく八郎兵衛人を欺き不正の利得を博するの罪赦し難し然れども自ち罪惡を知りて訴へ出づ其心情恕す可し況してや事を始めたるは舊主の代に在り必らずしも追究す可らずと乃ち令を八郎兵衛ゑ下して曰く自今以往は公然兩量を用ゐ買ふに小升を以てし賣るには大升を以てすると七ヶ年以て前罪を償ふ可しと隼人の意蓋し此を以つて其不正の富を損せしめんと欲するに在り既ゑして八郎兵衛の店頭に來り　米を買ふ者日々に群集し其富竟に昔日に倍せりとなん

上杉景勝一生中纔かに一笑す

上杉景勝は豪邁膽大の大將にて其軍陣に臨むや前軍既に戰を交へ矢丸雨の如く下り喚聲天地を震動する計りなるも身は尚ほ幕中に在りて起さず鼾聲雷の如きを常とす曾て其京師に朝するや一行の鹵簿數十百人寂として咳聲を聞かず唯人馬の足音を聞くのみ其富士川を渡るの際舟小にして人衆く中流に至り殆んど沈沒せんとす景勝怒りて舷頭に立つて鞭を擧げて一揮すれば衆皆な躍りて水に入り泳ひで無難ゑ渉るを得たりと景勝の嚴厲なる如此なれば人其一生中たゞ一笑の外曾て其喜悅の色を見たることなしといふ或時家に一疋の胡孫あり偶々景勝が脱ぎ置きたる處の巾帽を被むり去りて庭樹に升り景勝に向つて點頭もの三たび景勝之れを見て莞爾として打笑めりこれ實に左右侍臣が始めとも終りとも景勝の笑顔を見たる一生中の唯だ一笑なりとぞ

刺客の異人同名

明成祖の位に即くや先朝建文の遺臣左都御史景清なる者佯り降り利刃を懷ろゑし入つて成祖を刺さんとし事顯はれて殺さる本朝源右府の東大寺を慶するや平氏の遺臣假扮して眇目の法師と爲り利刀を持して之を伺ふ事成らずして執へらる之を惡七兵衛景清と爲す又た春秋の世ゑ宋に南宮萬あり我邦古代に物部守屋の臣捕鳥部の萬あり並びに勇力を以つて稱せらる異人同名而かも其の行事亦た相類す奇なりと謂ふべし

●織田信長の微察

織田右府嘗つて自ら十指の爪を剪り侍臣をして其剪餘を收めしむ侍臣左右を搜索し久ふして去らず信長、汝何故に退かざると問ふ答へて曰く剪餘既に九を得て未だ其一を得ずと信長爲めに起つて兩袖を拂ふ爪片墜つる者一信長大いに賞して曰く人の心を用ふる當さに如此緻密なるべしと又た嘗つて侍臣を召し至れば則ち事既に辨じ了りて復た用なし侍臣空しく退く少らくして復た一人を召す亦た始めの如し最後に一人あり召に應じて御前に出づ伺候すること良や久ふして亦た復た一事を命せず侍臣將さに退りんとす顧みて席上遺る所の塵一箇を拾ふて以て出づ信長俄かに呼び止めて曰く坐れ吾れ汝に語げん進退機あり機を見て動くはこれ兵家の秘訣なり汝今ま退くに徒爾たらず能く兵機を知る者と謂ふべしと其の機微細察大抵如此なりし

●板倉勝重絹を爭ふ者を判決す

幕初板倉勝重の京師所司代となるや一日三條通の街頭に二人の男一反の卷絹を爭ふものあり雙方とも確證あるなし遂に相携へて勝重の邸に訴ふ勝重雙方とも證の據るべきものなき上い止むを得ずたゞ當さに各其一半を分つべしと目前に中央より斷ちて與へ去らしむ後ち人を遣して密かに二人の狀を探ぐらしむるに甲は喜び乙は慍れる色あり之と還り報ず勝重即ち甲を捕へて獄に下す

●歌人秀吉の心を決せしむ

織田右府の弑に遇ふや羽柴秀吉既くも毛利氏と和し將さに兼程東上せんとす姫路の城に逗留すること一日盡く金銀を收めて以つて軍資と爲し夫々處分既に定まる其夕浴罷んで諸將を召んで之に語りて曰く此城無用の守備なり吾れ將さに一擲天下を賭せんとす子等の意如何堀秀政曰く然り僕を以つて之を觀る今ま潮候正に好し勢ひ帆を揚げざるべからず側らに和歌を善くする者幽古あり進み出でゝ曰く之を譬へば芳野山花正に滿開の如し安んぞ一たび往ひて之を觀ざるを得んや黑田孝高旁らより之を贊して曰く縱ひ花を觀んと欲するも時至らずんゞ則ち能はず今ま風綻ひ雨折く恰かも嬌容人を招くの狀あり時ある哉時なる哉宜しく此行を以て觀花の始めと爲すべしと秀吉意遂に決す

●紹鷗利休の奇才に感ず

利休茶儀を武野紹鷗に學ぶ紹鷗嘗つて利休の才を試みんと欲し私かに人に命じて庭中を掃除せしめ而る後ち之を利休に命ず利休茶亭の前に至るに帚痕拭ふが如く纖塵だに留めず林樹瀟灑翠色滴らんと欲す利休躊躇復た手を下す處なし竟ひに林中に入り試みに其一松樹を搖かし見れば墜葉風に飜へり片々地に點ず殊に一段の風趣を覺ふ乃ち報じて曰く謹んで命を了れりと紹鷗之れを視て其奇才に感じ盡々く秘訣を授けたれば利休終ひに茶博の名を得たり

●演劇俗傳の辨

我國に行はるゝ演劇淨瑠璃の十の八九は牽强附會の虛說にて取るに足らざることは世人の知る所なれど今其の二三を辨せんに夫のお染久松情死の演劇の如きは油屋の小僧が主家の幼女を負ひ遊び居りたるに誤りて油壺に陷り死したるを翻案せる也」浦里時次郎の演劇は明和年間吉原の遊女三吉野と云へるに伊之助といへるもの深く馴染め終に情死したるを浦里時次郎と改めて明烏の曲を作りたるなり」阿七、吉三郎の演劇は倭文の緒環（享和二年の著述）といへる書に見へたり其概略ゝ加賀侯の足輕山瀨三郎兵衛といふもの浪人して名を太郎兵衛と改め靑物店を圓山の本妙寺門前に開きしが菩提所なる駒込吉祥寺の七面大明神に祈りて一女を生みこれをお七と名づく後火災に罹りて其の弟の住持たりし小石川の圓乘寺に暫らく寓し居りけるが異寺に寄食せる幕府の士山田十太夫の子佐平といへる少年と人知れず深く語ひしに幾程もなく其家の作事出來して歸りければ佐平を戀ひて病に臥せしを其頃此家より行き通ふ吉三郎といふものあり此は吉祥寺の門番兵吉衛といふ者の子にて日頃行狀あしき故父より勘當受けし者なれども太郎兵衛ゝ菩提所なる寺の門番の子なればとて其まゝに交り居たりしが此の吉三郎竊かにお七の事を知り佐平に遇はせんと欺きて屢々金を賺し取り後にゝ敎へて火を放たせ其の紛れに乘じて物取らんとせしを盗賊奉行中山勘解由その場にて之れを見咎め吉三郎を捕らへて其の實を糺しお七と同罪に處せられしなりされは吉三郎を阿七の情人とせるは固より謂はれなし」又夕霧伊左衛門の實蹟を質すに抑〳〵夕霧といへるは寛文十二年の頃京都島原より大坂新町へ引移りたる扇屋四郎兵衛抱への遊女にて其頃同地に京女郎を抱へ居たる靑樓稀なりしかば世上の嫖客遊冶郎等いと珍らしと

相競ふて皆扇屋に登りしものから扇屋の繁昌大方ならず中よも別して夕霧い縹致すぐれしのみならず且諸藝に達せしかゞ其全盛實に比べん方なく餘りに引手あまたにして悉く接するにいとまなきより常に自ら花價を出して鹿子位女郎を雇ひ置きつ座敷は總て名代にして勤めさせしといひ傳ふ去れば扇屋伊左衛門といふは扇屋四郎兵衛の事なるべく之れを情郎の如く言ひ傳ふるは寔に謂れなき事なり、たゞ少しく據所あるは之を作りし淨瑠璃中阿波の大盡といへるにてこは其頃大坂よて人に知られし豪商阿波屋某が夕霧に深く馴染め其病中の世話よりして其沒後に至るまでいと信切にものせしを粧飾翻案せしとのことなるべし」又朝顔日記は熊澤蕃山が戯にものしたる「露のひぬまに」と云ふ琴曲を芝居芝臭が敷衍せるものにして跡方もなき虛說たるや固より論ずるまでもなし」俗間に傳はる演劇淨瑠璃は概むね此類にして世間或は八百屋に七の紋は「丸の内に封文」と心得るものさへあるに至れるは（享保年中三條勘太郎と云へる俳優嵐喜代三の追善狂言にお七を勤めし時喜代三の紋所丸に封文を付たり是より封文はお七が紋所の樣ゑ思ふとはなれり）誠とは謂はれなき事と云ふべし

●午頭天王の胡瓜

午頭天王を信ずるもの必ず胡瓜を食ふ事を禁しむ之を食ふ時は忽ち邪疫を感ずといふ或は云ふ午頭天王の紋處木瓜なれば胡瓜と讀み誤りたるにや素盞雄尊に紋處ありとも覺へずこは織田信長公午頭天王を深く信じ神輿の類盡く織田家の紋處木瓜を染めて納めしより遂には木瓜を午頭天王の紋處と誤り傳へたるものなれ偖て此胡瓜を食へば神罰ゑて必らず疫を患ふといふ是れ亦疫は瘧と同く「ゑやみ」と訓ずるより訛り來れるなるべし孟詰が食經に云胡瓜性寒不レ可ニ多食一動ニ寒熱一發ニ瘧病一といふ事見へたりかくあれば午頭天王の信不信には拘はらず胡瓜を多食すれば瘧を患ふるなり但し君子不レ病レ瘧貴人不レ病レ疫と聞けば高貴の爲には申さず

●畫を撰ぶの遠慮

後水尾帝畫工を召せられ仲和門院の御畫像を幾通りも書せられ扨て其内第一ゑ美しく見ゆるを取らせ玉ひこれ然るべしと宣ふゑ女房衆それは格別似寄らせられず彼やよからんこれやまさりたらんと聞へ奉つるゑいなとよ百年の後に至らば誰も知り覺へたら

んものあらじ同じくは美くしき御有樣の畫を殘し留むる方然るべからんとぞ宣いせける

●趙陶齋大に罵つて權家を拆く

昔し趙陶齋書を以て一時に名あり、一權家その名を聞き陶齋の友人某に囑して其家に伴ふ時に壁上壽老人及び鶴龜の三幅對を掲げ巨大の銀瓶に牡丹數朶を挿さみ器具飲食美善を極め精良を盡し主人大白を浮め大ひに威福を張り語甚だ不遜なりしかば陶齋箕居鯨飲大に罵つて曰く吾は知名の趙陶齋なり今夕爰に來るは孤鶴誤つて脚を雀群に失ひしなり鼠輩俗物いろんぞ先生に對して不遜なるや殊に床間の俗幅主人と等しく厭ふべきの極なりと遽然筆をとり畫幅を縱横ま塗抹し飄然として去りたりとかや此事狂暴に似たりといへども亦俗物項門の一針となすべし

●勘亭流の書、葦手書の繪

書に流々あるといふまでもなし、俗書も亦然かなり芝居の立看板にかく書体を勘亭流といふ勘亭といふ人初めて書出したれゞなり勘亭は江戸和泉町の人なり中村座十一代

目座元勘三郎これを手習の師匠としたるが彼人年老て後ちま勘三郎の仕切場にいでゝ中村勘七と稱せり、もとより書を善くしけれゞ番附看板の一流を創めて今の世に行なはれ、勘亭流の名高し此の人江戸にて始めしことなれば京坂には書く人なしと云へり此事嘉永中の狂言作者三升屋二三治が著はせる妓家諸人錄に見ゆ、此体俗書にはあれど、立看板にしてはれもしろきものなり又古人の戯れに書きしものま文字をもつて人物を書けるあり文字ま繪を加へて草木禽獸の態を顯はすもありて種々の趣きをなすその起る所も又さまゞなるべしたとへば天神の二字にて渡唐の天神の像を畫き人丸の二字にて柿本の像をうつすその外いろゝの人物みなこの定にて書きなすものなり是はもと眞言宗の僧木筆にて梵字をかきて佛像を作るより出たるなりといへり此類の内に又一種異なりたるは梅の字の草書末筆を長く引きて花をそへ梅花にかたどり、竹の字に葉を加へ龍虎の文字は尾を其物の象まかけるなどさまゞなりこれ古にいふ葦手かき歌繪などいふものによれる戯繪なるべし葦手歌繪の事は拾遺集後撰集などいふ古るき歌集に見えて中古禁裏は更なりさるべき公卿達の座興にもてはやしゝものなり源

氏物語にも（梅枝の巻）あして歌繪をおもひ〳〵にかけとのたまひ云々と見も

●古雅の招牌

昔より有來れる商賣の招牌に古雅なるもの多き中にも昆布屋の招牌に富士の形を畫くが如きは甚だ面白し元來富士は湖水より出現せし故之れを昆布の招板に用ゆるは「水から」と云ふの意なり又一説に「みづから」は「不見辛」なり思ひざりき山椒の入りて辛かりし故斯い名づけたりと

●女房は未ざ泣ぬか

豐竹麓太夫は享和文化年間よ美聲を以つて世に鳴りたる淨瑠璃語の達人なり、一代の語物多き中よも分けて名高きい蝶花形名歌嶋臺、繪本太功記等なり太夫新淨瑠璃、本讀の坐には何時も女房に傍聽せしむることを例とせり女房一心に聞き入り眞に迫りて愁を催ほし泣顔をするときい太夫即坐に手を拍ち申分なしと作者の苦心を勞らひ心の底より悅べども女房左まで悲しまざるときは再考あるべしと斷りを言しとなり此の女房も流石高名の太夫に連れ添ふ丈ありて常に風流を好み態度やさしく涙もろき婦人なりけるが彼の大功記の本讀にも例の通り女房に傍聽させ扨太夫語り初めしが作者なる河四郎は豫て女房の氣質を知るを以つて己が得意の段に至る毎にもうこゝらで泣き出しさうなものと時々窺へども更らに泣く樣子もなく遂に尼ヶ崎の段に讀み至るも泣ざるにぞ作者も落膽し到底此の狂言は納まるまじと思ひ居たるに太夫は段切迄讀み終り案の如く再考ありたしと云ひければ河四郎も是非なく宿所へ歸り笛躬、魚眠なんぞ云へる作者と相謀の上稍々脚色を變じ更らに太夫の許に到り語らせたるに女房は此度も泣くざるにぞ去りとは如何にすれぞ泣く事にや此後の本讀には唐辛子舐らさんなど詈り合ひ三度迄添削するよ至れり（最初本讀に用ひたる原稿は今日傳はる院本の仕組とは甚だ相違して彼十段目には重次郎も戰死せず皐月が竹槍にて光秀を突とめる仕組なりと云ふ）扨三度目の本讀には今度こそい泣かし呉れんと太夫の文談を耳にも入れず作者は唯だじろり〳〵と婦人の顔をのみ詠め居たりしが重次郎戰死の一段に至るや婦人は眞に聞き入りほろり〳〵と涙を流し果ては大音をあげて泣き立しにぞそりやこそと作者は勿論、太夫も滿面喜色を呈し上出來なりと作者の苦心を勞らひ早速狂言に取

り掛りたるに其の噂三都に高く開場の日より古今比類なき大當りをなしたりと云ふ或る人太夫を難じて曰く都新狂言の本讀は銀主、太夫、三味線、手摺に關する者の外他聞を許さゞる習慣なるに己が女房に眞先に讀聞するは一座の前ゐ對し無禮にあらずやと太夫答て曰く世に婦女子程些細の事に泣き笑ひするものはあらじ婦人すら泣き笑ひの出來ぬ淨瑠璃を如何に巧みに語りたりとて爭で多數の聽者を感動せしむるを得ん拙者が先づ女房に聽せて試むるは寧ろ聽者に對するの敬禮と云ふべしと實に名人と云はるゝ人は一見識あるものにて趣向は兎も角も太功記尼ヶ崎の文句に「軍の首途に呉々もお諫め申した其時に」とあり又蝶花形八ッ目に「姉い悅ぶ妹は手負にひしと縋り付」とある等は三歳の兒女も口癖に云ふところなるが孰も太夫が再考を作者ゐ請求したる結果なりと古老の話を聞が儘茲に記しぬ

●利休の風流豐公を驚かす

利休翁が豐公の寵遇を受けたる頃家園に牽牛花滿開せりとて請じまねらせけるに公いと興ありとて翁の家を訪ひ給へけるに翁は之れを庭園に誘ひ奉つり大いに得色あり公あたりを見廻し給へど牽牛花のいと奇麗なるもの一輪を除きては滿目すべて青葉なるにぞ公其意を得ず花觀ゐ來れと云へながら一輪の外に花なきは何事ぞと立腹の樣子なれば、翁は牽牛花は花繁き草なれば故さらに一輪を殘したるなりと答ひたるに公も大ひに感じ給へり抑々風流は斯る淡泊の所に存するものなり俗眼の得て見別くべきゐあらず

●塙保己一夫婦の俳句

塙檢校保己一は和漢の書を暗誦して一度耳に入りし事ゝ牛涯忘るゝことなき博學多才の盲人なり著書六百三十餘卷あり幕府より邸を番町に賜り和學講談所を設け門生日々群をなす、ある年八月十五夜に客を招き月見の宴ゐ開き主客共に酒興を催はしけるに坐中たゞ保己一のみ盲人にて月のいとさへたるも見ゐざるをうらみて保己一「花ならばさぐりても見ん今日の月」と吟じけるに其の妻臺所の方より襷をはずし乍ら良人の心をくみて涙ながらに「十五夜は坐頭の妻の泣夜かな」と吟じ出じければ主客一同いともあはれに感じ泣かぬ者はなかりしと此二俳句軸物として今ゐも塙の家に世々寶物

こ傳はり居るとぞ

●箱根山の分析

狂歌狂文を以つて有名なりし手柄岡持の著にかゝる「我おもしろ」と云へる書中よ左の狂文を載せたれば爰に掲げて讀者の一覽に供す

箱根山の皿しきに駕より出で歩ゆめは暑し駕にのれば寒し惡寒發熱のくるしみたはれうたも出でばこそ抑も箱根いかなる山にやあるらんと人もしきのば

大石一匁中石二匁小石五匁細竹二匁松樹三匁杉樹五分雲霧三匁水音一匁鶯聲一分挽物二分山椒魚五厘駕籠一匁

右陽症には富士を加ひ陰症よは松明を加ふ尤も湖水にて煎じ用ゆ若し温泉湯にて用ゐんとせば其方大いよ違ひあるべし

●野田笛浦損料の刀を借りて二百金を利す

野田笛浦は名は逸字い子明と稱し丹後田邊の人なり幕政の時文筆を以て仕へ清人と筆談の事を司る當時文人の風として磊落をのみ旨とせし程よ衣裝其外持道具も甚だ粗

末なりければ清客に接するに付新たに一領の禮服を製したりされども刀劍丈は急速に調へ得べくもあらざりければ止を得ず損料を出して立派なる雙刀をかりて應接しぬ話の序清客は頻りに其雙刀の美なるを稱賛して一見を請へり笛浦も人の物贊られてはづかしけれども詮方なく出して見せければ清客はしばらく見終り總て華美申分なけれど惜むらくは鮫の皮而已は精良のものならず歸朝の上い精良のものを送るべしと後清客約を踏むで送りたる鮫の皮は當時二百兩にも價せる上等の品なりければ笛浦は二貫文の損料にて二百兩を得たるは意外の利益なりと友人よ語りしとなん

●應擧と長常

天明のころ金工の名譽ありし長常い類ひなき上手にて應擧また畫よ於て妙手なりしが樫田阿波守といふ人長常に小柄を彫らせ應擧に下繪を書せんとて誂らへければ長常うけがひけり因て樫田氏應擧に下繪のことをしかくといひければ速かに畫ておくりし故即ち長常のもとに持參して與へけるに長常は此下繪にては得彫れじといへり、いかなればと問ひければ應擧は畫の妙手なれば我れよ彫らさんとて我か平生の

たかね癖を其儘書たり、惡しきたかねくせなれば常に直さんと思ふ欠點を彫らんは忍び難きことなりと物語れば樫田氏もこれを聞いてものゝ上手は異なる所あるものなりと感歎し小柄を彫らすことを見合せたりとなん

●此處小便無用

細井廣澤人に誘はれて初めて新吉原の貸座敷へ至られしとき此家の亭主廣澤が當時書名の喧しきを聞知し居るを以つて頻りに書を請ふて止まざりしかど廣澤は場所あしければ強ひて辭されしが再四請ふて已まざるゆゑ乃ち止むとを得ず「此處小便無用」と一行物を書て與られぬ然るに主人は餘りけしからぬ事と思ひ悅ばずして取納め重ねて乞はざりしがかくて其後晋其角來りたる折主人は右の話をなし取出でゝ示せしかば其角これを見てこのまゝおかんゝ無念なるべし我れ書添へんとて其下へ「花の山」と書たり于今二絶の雅品として人口に膾炙す

●鼻口聰敏

堅田　祐庵は享保の頃の茶人にして姓乙北村、近江堅田の浦の豪農なり頗る茶事ゆゑ精しく能く物の香味を知ると恰かも古の首朗、易牙の如くなりしと云ふ世に傳ふる所の奇話多き中にも常ゆゑ家僕をして琵琶湖の水を汲ゆしめて茶を點ずるに必らず某の處と指命す若し其指定外の所より汲來ることあれば翁必らず其所を知ると神の如くなれば終に欺くを得ざりしとぞ魚鳥に於るも亦然り其味ひにより獲たる所の地名を指示して當らざるゝなし殊に奇なるは或人豆腐を串指にて炙ふりたる（俗に所謂田樂）を供せしに翁の言へらくこの田樂は遠方より齎らし來れる竹を以て作れる串を用へて炙りたるならんと之を厨人ゆゑ質すに果して大阪より物を荷ひ來れる竹をもて削れる串にてありきと答ふ、又或家に招かれて碎き菜の汁を供せられたるとき翁ゝこの菜は必らず男の碎きたるものならんと言へり主人依つて之を料理人に尋ぬるに果して然り主人駭きて其故を問ふ翁の曰く男子は氣荒のものなれば從つて其碎き方も亦たあらし女子は然らず其力能く相叶ふべしと去ればその人を饗するにも能く物を選びて事々ゆゑ慎しめり例へば翁の魚を料理せしむるや常ねに俎數枚を用ゐしと云へりその故ゝはじめ鱗を去るより肉を切るにいたるまで手を換へる毎に次を追ふて俎を換へざれば餘臭を移し

て類からんとを慮りてなり又曾つて一日京師の茶友に遇ひしに瑟琶湖の名産源五郎鮒を所望されければ翁後日を期して來遊を約す當日に及んで友人翁を訪ひるに其門前巨鮒數十を籠にして入るを見る而るに膳に及び調理し供する所僅かにして腹に充すに足らず人々怪しみて互ひに顔見合せ最と訝り居る樣なりければ翁ハ笑つて云ふ諸氏必らず予が供する所の足ちざるを怪まるゝならん然れども曩さに漁家より取寄せたる鮒の中に就き足下等の望み給ふ所の源五郎鮒なるものを求むるに僅ゝに一二尾に過ぎざりければ斯く供する所少なきも止むを得ざる次第なりと其注意の至れる大抵如斯なりしと云ふ翁の如きは茶博士中の奢侈なるものにて該社會には餘り重んぜざるべしと雖ども其物の味を知るの異能に至つては蓋し非凡と謂ふべし

●加賀侯久隅守景を養ふ

久隅守景ハ探幽法印の門下にして畫を能くす家素より貧なれども志高くして容易く人の需めに應せず加賀侯其畫を愛し召して金澤に留むること三年未だ曾つて祿を賜ふの沙汰なし守景以爲らく斯くては鄕に在るも同樣なりいざ歸去なんと其情を侍臣に陳ず侍臣等も理りなりとて其由侯に言上せるに侯笑つて曰く吾能く之を知れり然れども守景は元來氣高き質にて膽太ければ若し衣食に足らしむれば中々人の需めに應じて畫くべしとも思はれず今ま當國に於て貧困せしむること三年に及びぬれバ彼の物せる畫相應に國中に弘りましならん去らばこれよりは扶持せんとて始めて厚祿を與へて生計に豐かならしめたりと云ふ

●三本杉

藤田伊勢守淸原吉辰は寛政文化年間の人なり加茂本居の流を酌み神道講釋と稱し專ら佛道諸宗を批判して日本人としては國神を尊崇せざる可らざる由を俗耳に入り易き談話を以つて說明し一時盛んに行はれ諸方よりの招待に虛日なき程なりしと云ふ其說く所非凡なる談諧を交へ例へば同じ神にても日本の神は天を上とするに依り理に順つて直く佛神ハ天を下にする故理に逆ひて曲れり天照大神天滿宮の如き日本の神は皆天を上とす大黑天、摩利支天、辨財天の如き天竺の神は皆天を下とすと云ふが如き說をなし大いに人氣を取りたり或日例の通り佛經を引き佛道を排斥りて講釋するとき一人の

僧堪へ難くやありけん汝が説誤れりと高聲に呼びかけて議論せんとせしかば吉辰哂て和尚は三本杉と云ふ事を會得せらるゝやそれを會得せらるゝならば議論を聞くべしと云ひしに彼の僧然る神道の事い知らず只佛經上の事に就て誤謬ある廉を正すなりと答へしかば吉辰曰く否とよ三本杉といふは神道の事のみにあらず佛道にもあるとなり師匠に問ひ其後議論に來るべしと云ひしかゞ彼の僧默して去り師僧に斯くと告げ三本杉の謂を問ふに師僧横手を拍ち夫は身すぎ、世すぎ、口過ぎと云ふ事なり吉が辰佛道を誹るも此の三すぎの爲なりと云ふ謎なり流石は吉辰なり汝等が及ぶ所よ非らずといひしとぞ

●兩歌人の決闘

濱臣と松の屋は同時詞壇に鳴りたる著名の歌人なりあるとき和歌の事につき兩人の間に紛紜を生じ互ひに相敵視する事となりたるが一年の花候に偶然花下に邂逅ふて遂に仲直りを爲すの端緒を開きぬ扨て兩人の申合せにて各々男根を較べて大いなる方を勝利と定むることゝいなせり此時の有樣を目擊したる蜀山人は自ち一話一言と云へる書に之れを記して曰く

（前略）扨濱臣と松の屋は和歌の事につきて近來不快あり、松の屋の著せる文にも濱臣と譏りたるよ、けふは花のもとにゆかりなく相見しかば中なほりせんには、各々男根を較べて大ひなる方を勝と定めんと興しければ、うたひ女に糸ひかせ、行司を立て扇をひらきて左右をあはせしに濱臣のもの、ふとくたくましきに、勢ひを添へて出しければ人々の目を驚かせり松の屋もれさ〳〵劣るまじきが勢なく、なへ〳〵として出せしがゞ劣りて見も人々めでくつがへりて（絶倒）ぞよむ計りになん、鳥羽僧止などのかける繪卷もの見る心地して古代なるたはぶれ今の代にはありがたくなん覺へし

松の屋の松たけよりもさゞなみや
　しがの濱松ふとくたくましと心の裡におもひはべり云々

●筑後の奇僧桃水の事

僧桃水名は雲開、筑後の國の人にして肥前島原禪林寺の住持たり中年を越たる後跡を匿して其の行衛を知るものなし歸依の尼之を尋ねんと諸方を遍歷し洛東四條河原に至るとき師は菰うちかづきて、同じさまなる乞人の病るを介抱してあられしに尼は驚き涙を流して拜す扨て師の爲めにとて自ら紡績し年を經て織たる臥具を背に負ひたるを取り出してまゐらすに和尚は今の身にてい用ゆるに所なしとて辭して受けざるにそ尼もさるものにてありけん自ら用ひ給ふ所なくば御心よ任せて兎も角もし給へ一旦師に奉つる上は直ちよ捨て給ふも憾む所にあらずと云へば和尚もさらばとて受けて軈て病る乞丐ようちきせ給ふと他の乞丐ども見て大に驚きこれは凡人よあらずと云ひて俄かに崇め尊みければ和尚い日ならず避けて其地を去りぬ、そのころ弟子僧兩人い師を尋ぬること三年にしてあるとき安井門外に乞丐數多集りたる中にて計らずも見つけしかば、其の跡につきて人無き所に至り師如しかくの如くならば我れ〳〵も同じ姿となりて從はんと再三請ふて已まざるにぞ和尚も是非なく然らば吾爲す所を見よとて伴ひ行くよ乞丐の死せるあり軈て弟子僧と共にこれを埋めつ扨て其の死者の喰ひあませる食を己先づ喫して汝等もよくこれを食はんやとあるに弟子僧も止むことを得ずして食ひたれど腐敗の臭氣に得耐へず忽ち嘔吐せるを見、然れどこそ此の境界には堪ざりけれと二僧よ別れて何處ともなく立ち去りぬ又あとさは肥後熊本の寺僧某、國侯のそが大旦那たるの故を以つて勢ひ甚だ猛に儀衛を盛んにして關東に赴く道すがら大津の驛に憩ふに馬丁は沓買はんとて老父と呼ぶこれは此地にある家の軒に假初にさしかけてある翁が造れる沓草鞋いと好ければ「ぢいがくつ」とて與夫馬卒もてはやしけるなり時に其沓もて來る翁を見れば桃水和尚なるにぞ與中の僧は驚き與をまろび出で手を取り涙を流して拜するも理道なり與中の僧は即ち和尚の法弟なりける、兎角舊を語りて別れんとするとき和尚は汝唯だ諸侯に媚ぶることなかれと戒めたり和尚が大津にて沓を造りたる頃或る人其の年老たるを憐れみ大津繪の阿彌陀佛の像を與へしかば其の小屋よ掛け消炭もて一首の歌を題して曰く

狹けれど宿を貸ずやあみだ殿後生頼むと思召すなよ

●宮筠圃妓を以て仁者となす

宮鈎閫は温厚謙遜にして而かも聰慧強記の聞え高き儒士なり幼時其母背に灸す涕泣頻りなり母熱に堪ねざるかと問ふ答ていふ然らず身体髪膚敢て傷らざるゝ孝の始めなりと聞く然るに兒病身にして灸せざれば健全を保つ能はざるかと打歎くなりと後ち東涯蘭嶼兩大儒に學び學藝ともに盛名あり京師に住ること數十年と雖ども曾つて都俗に染まず從つて世情に疎あり一日東山に往きその歸途雨に逢ひ偶々傘を齎らさず困じて二條加茂川の東岸なる一賤妓の家の簷下に避く妓之を見て内より頻りに入給へ〳〵と喚ぶ鈎閫歸り來りて人毎に語りて曰く「仁といふものは實に人間の固有性なるもの歟吾れ雨に困しみ之を妓家の檐下に避く彼輩傍觀るに忍びず頻りに吾を喚ぶこれ吾に傘を貸さん爲めなるべし」と時の人々之を聞きて大に笑ひ遂ひに妓輩を「仁といふもの」と異名するに至れり

●證左明白の講釋

何れの裁判所よやありけん其名は聞き洩したるが或裁判官訟庭に臨み原告人の訴狀を繰返しながらこれ原告其方は前裁判所の裁判書に其證左明白なりとあるを辨駁すれども是は其證左明白と云ふ意義を其證左に明白と誤解せしものと覺ゆ、此の證左の左の字は「タスケ」と訓み人偏をつけたる佐の字と同じものにて證據のたすけといふことなるぞと高聲に諭しければ原告は只ハイ〳〵と答へたり其時陪席したる書記役は判官の古事附片腹痛と思ひ穴よも入りたき風情にて餘所を向きもぢ〳〵して居たるが頓て審問も了り裁判官其席を退きければ書記役は跡に殘り原告人を呼返し先程裁判官より證左の字義を諭されしが若し誤解してはならぬゆゑ今一應申聞る元來證左の二字は始めて漢書に出で或は左驗明白などゝ云ひ何事にても其事を爲るとき左右に居たる人は後の證據となるに因り左右の字をとり證左又は左驗とつゞひはじめたるなり或は支那の古代には左劵右劵とて後の證據の爲め劵をとりかいせたるにより其左の字を取りて證左とつかひはじめたりと云ひ左の字の解し方いろ〳〵あれど結局證據と云ふよ同じと心得べしと判官の說明を破毀して退ぞきたり亦好笑話

●古池や蛙飛こむ水の音

賀茂規清の著、「烏傳日本魂復古廼乳」と云へる書に蕉翁古池の句の來歷を載せて曰く

傳へ聞く古池の句はある禪僧よ蕉翁見へたるとき和尚の問よ應レ無下所レ住而不生三其心ニ云々此意いかゞとあれば蕉翁乃ち一句を口ずさみて曰く「古池や蛙飛こむ水の音」と和尚唯々と答ふ時よ傍に侍りたる醫師某蕉翁ゟ向つて云ふ今答へ給ふ句ハ和尚大いに感じられたれど其意下拙には解しがたし願くば諭し給へといふ此の時蕉翁云ふ俳諧は近頃のものなれは聞ゑあしきはさもあるべしいで未熟ながら俗言歌を以て彼意を申さん「世の中ハ障子の手引峰の松火打袋よ鶯の聲」とよみ先づ世の中とは凡ての人といふ義なり障子の手引とは此とき既に春分の清明の暖氣なれば障子をしめてハ内にハ居難し於是障子を開て風を入れたさとの心現はる此時芭蕉の胸中にハ障子の引手は主にして芭蕉といふ人とあらず然して障子を開れば峰よ松が見ゆる此時又峰の松が芭蕉の胸中の主になりかハれば先の障子の引手は死してあらずかく涼しき上、峰に松が見ゆる面白きとあろにて烟草が呑たいといふ心が起る此心が又芭蕉の胸中の主となれば先の峰の松は死してあらず時に鶯が啼なりやれれもしろい鶯の聲かなと又鶯の聲が芭蕉の胸中の主となれば先きの火打袋は死してあらず斯く一髪の間に胸中の主が四度替る此通り年が年中時々刻々主の取替る事人壽八十年の間には無量數なるべし此無量數時々刻々に取替る心が佛といふものにして是が朝から晩まで働らきて芭蕉といふものゝ心は更にあらず見るものが主となりて夫がもの云ひ夫が嬉しがり種々の事統て悉く向ふより來り胸中の鏡に映る間其ものが主なり然れは其主鏡に願を殘さゞるなり今「古池や蛙飛こむ水の音」と云ふ意も亦これと同じく上にいふ胸中の鏡を池よ見立蛙飛こむは池の蛙か映る道理なり最も此池あらむ限りは蛙のみ歟月華鳥を始めとしてあらゆるもの映れど跡を止めず水は元の水にして一物なしと云ふ義なりと語りさるに醫師も其意味の深遠なるに歎服せりと云ふ

●三絃の妙手

役者五雜俎に曰元祿年中岸野次郎三といふ三味線彈あり古今に勝れたる名人よて古き唱歌を好み故律の正しき事を尋ねさぐりて自然と三絃の妙を得たり此人の所持したる三絃ハ鳴神と稱し日本に二挺の名器なり他の一挺は櫛山小四郎所持し常に之をもつて音律を論ず其身芝居に行ずして三絃をならし其の日の見物の人數の多少を知れりと又

山本喜市といふものも次郎三よおとらぬ妙手なりしが或秋聲々よ鳴虫の音をきゝ調子を細めて是に隨ひ曲節を作りしに忽ち虫の音やみたりしばらくありて虫又なき出せるよ由り心づき更らに調子を高くして引けれども今度は已まず又調子を細めて引ければ又虫の音やみぬこれより工夫して種々の曲節を作るよ聞人感せざるはなし

●土佐節の元祖

一藝一術の士以て與に語るべしと佐藤一齋翁の云へれしは實にさる事にて一ッの道を究め世の許しを受たるものは自から人よ異なる所あるものなり土佐少掾　橘　正勝は土佐節の元祖よて大坂境町よ住み同町に　繰芝居を興行し寛文延寶の頃盛んに行はれたりしかゞ其の直弟といへゞおのづから榮譽他よ異なりて聞ゆるより或る土佐節を語るもの土佐少掾の門弟なりと稱し、さる豪商へ出入りし其の家女へ土佐節を敎へ居りけるが此者實は土佐が門弟ならざる由或る人主人に告げければ主人竊かに彼れをして狼狽させんと先づ土佐の掾を其家へ招待し、さて彼の男を遽たゞしく呼寄せたりしかば某へ何事にやと急ぎ其の家よ至るよ主人今日は幸ひ足下の師匠を招待したれゞ

疾く奥へ行きて面會せられよと言ひたりしゆゑ某は大に驚きいかゞはせんと途方に暮れしが去ればとて其所より逃げられもせず據なく奥へ通り次の間に平伏して扨て其以來へ誠とに御無沙汰申したりと挨拶するに土佐も相應の答をなしつゝ何さま師弟の間の如く見ゑたりしかば主人の疑ひ始めて晴れ其席無事よて終りたり扨て某は不思議にも土佐の挨拶によりて恥辱を免れたるのみならず明白に門弟たる旨を衆人に認められしかば大に喜び其翌日土佐の家に詣り實は斯々の次第にて眞に進退谷まりしを存外の御接待を受けて始めて奇難を免かれたりと銀二枚を贈りて謝したりしかば土佐は打笑ひて夫は大なる了簡違ひなり凡そ土佐の淨瑠理へ我等其の家元なりされば今海内に土佐節を語るものは誰彼れとなく皆我弟子なり其許既よ土佐節を語るからは是れまた我弟子なり故よ弟子として接待しまでにて別に禮を云ふに及はず當然の事なりとて終に贈物を受けざりしとぞ度量廣くして着目大なるものと云ふべし東坡が所謂挾む所大ひに志遠しといそれ土佐の謂か

●華山翁の門下に奇士あり

昔し天保弘化の頃渡邊華山翁の門人ゝ金子武四郎と云へる擊劍家ありけり此人渡邊の塾にありし時粗漏至極なる人にて翁の使に行ば必らず物を遺し又は忘るゝこと毎々なる故翁もしば〳〵督責せられけるが一日翁のいはゝやふこゝに歩金七兩ありこれを此書翰にそへて留守居の八木氏の許へ持參すべしと同家中へ使を命せられしかば武四郎かしこまりて直ちに先方へ至り右の手紙を出せしに八木氏曰く別に金七兩とありそれを持參ありしやと問はれ武四郎大に驚き扨こそ例の粗漏必らず遺失せしかあり思ひ究め答へていふ正しく塾に置き忘れしと覺へ候只今置に持參すべしと述べ置き急ぎ走せ歸つて同門福田半香に内々此由を談せしに半香も氣の毒に思ひ毎々の事故に翁に告るわけにも行まじ好し兩人の衣類を典却すべしとて即ち麹町の質屋へ持行きて七兩の金となし八木氏ゝ至り受取書をもらひ翁の前へ出せしかば翁は甚だ訝り過刻足下ゝ渡したる金は其まゝ机上にあり何故に八木氏は受取を出せしやと問はれ武四郎又々仰天暫く言もなかりしが已を得ず前の次第を詳かに申せしかば翁曰く夫は不都合なり縱令遺失せしとて全く粗漏なれば是非もなし早く利子の懸らぬ内此金を持參して受出し來るべしと云はれたり、かゝる粗漏の人なれど大事に望み精神の慥なるは翁の日頃賞されし所なり斯て翁が晩年遭厄の時宅調の幕吏突然家に踏入しに武四郎忽ち痴漢の態をなし該吏に向ひてさわぐ景色もなく先づ見賜へ僕の畵を認め呈すべしなど種々戯言を吐き席上へ唐紙を持出し得意の墨竹を揮寫せしかば畵の妙と云人の癡と云珍敵人物かなと幕吏ども打興じ或は感じ或ハ笑ふうち家内の者例の西洋書籍などあちこちと隱すことを得たりしかゞ之が爲に幾分か翁の罪科を輕からしめしハ全く此の粗漏漢金子武四郎の力なりと

●只一纐にて足れり

或人枕屏風を製らへ搗て畵家に行き鯨魚を寫れむとを懇願しに畵工笑て鯨魚ハ大層大きなる魚なれば迚も貴殿の小屏風にハ墓寫と出來ませむと答へしかば或人の云ふやう澤山ハ要りませむたッた一纐でよう御坐ると云ひしとなむ

●鉋屑の卷物

嘉永七年四月京都柴御殿火を失し遂ひゝ延ひて内裏御所ゝ及び悉とく炎上しぬ去れバ

幕府より於ては直さま内裏御造營の事に評決し豫て深川木場に園ひ置ける良材ども引上げて京都へ廻漕せしに其中より三代將軍家光公の名を記せし大材あり其木質を調べしよこれなん木曾廻香山の鶉モク（木理の名）にて天下一品とも云ふべき檜の良材なりければ御造營掛の公卿達僉議の上年久しく關東にて保護し皇城萬一の御用に立つる事の珍らしさよ其人の誠忠と云ひ其材の良質と云ひ無下の場所には用ふべからずとて之を常御殿の床柱とはなさせ給へけり、又此外同じく家光公の銘を刻みし廻香山の檜の丈け七間に餘れる巨材ありたれば其心を去り四方マサにして同御殿の御長押にせられたり然るに當時御造營の爲め諸國より名ある木匠共を召されたるが其の中に加賀國より一人の木匠上り來り右の長押の木地を見て天晴れ見事なる御物かな此の仕上をば是非よ某に仰付られ度しと懇請し兼ねて召連れたる兩人の弟子に下削をさせ或日自ら充分に研ぎ上げたる及の徑六寸の大鉋を以つて彼の木に向ひ調子を合して鉋を當て削り初めたるに宛ながら風の發するが如き音してスラ〳〵と巾六寸より丈け七間餘の鉋屑を唯一息に削り出したれば見分の役人い實に妙じき腕前よと嘆賞せぬものなかりしが再たび鉋を當るや否や此度は屑を臺と刃の間よりグル〳〵卷き上げて六寸巾より七間餘の長さなるを卷物の如くに削り出し都合三本まで削り上げ之を三寶に載せて恭々しく掛役の前に出し再拜して引下りたれば人々唯呆然として驚き感ぜざるはなかりき斯くて一人の修理職は最と珍奇の物なりとて之を乞ひて持歸り厚紙より裏打なし一卷の大卷物より調成し卷首にい先づ委しく其來歴を記し次に當時有名の畫家に請ふて各得意の筆を揮はしめ後の紀念にとて珍藏し置かれしが今い其所在の知れざる由蓋し元治元年の兵火に燒失せしものか現に此卷物を一覽せし人の話を聞くに卷の初めより終より至るまで糸マサの筋通りて聊かも亂れず世より良材といふも多けれど斯の如きは絶へて見し事なしと

●大石眞虎の謝罪証文

大石眞虎は尾州名古屋の人にして畫名一世を聳かせしが其行爲亦奇偉なるもの多し就中左の一語は最も滑稽を盡せるものなり當時名古屋の或町に町代を勤むる何某といふものありけるが此者己が身分の素町人なるを厭ふを以つて常に士人風を粧ひ己れが町

代を勤むるを幸ひ肩を聳かして街路狭しと横行し其頭髪も士人の結様を爲ねて前頭を狭く剃り明け大髷に結ひ居りけるが元來此人い聟養子にて女房に對していい隨分閉口し居る方なりければ眞虎其近隣に家居して常ゑ其の士風を粧ふを氣に喰はず殊に其頭の狭き剃り方を見る毎に胸悪き思ひを爲し何とかして彼の頭を人並に剃り擴げさせんと陰謀を巧みありしが去りとい知らず某は一日近所なる髪結床に來り月代を剃らんとせしに眞虎これぞ幸ひなりと店主を私かに物陰に招き呟きて云ふ樣今來たられしは御身達も音に聞く町代某殿なるが旦那は養子の御身分にて何事も内儀任かせ頭の剃樣など旦那ゑは人並みにせんとを望まるるも何分内儀が士人風を好まるる故不得止斯く狭く剃り居らるゝ事なれば其の心得にて次第に剃り擴げよ但し人目があれば外邊は小言位申さるゝ事あらんもそこを堪忍して何分頼むとの旦那の仰せなりとて窃かに一分金を渡したれば床屋い眞ゑ受けて夫れより手過ちに托けて一分二分づゝ削り擴げ二三回にてやゝ人並の前頭に爲したるが一日某は例の如く床屋に來り太くこれまでの疎忽を叱責し今度い屹度疎匆をせぬのと言ひ詰れば床主い微笑しつ委細承知仕りたりと一向平氣の樣子にて月代に取掛らんとすれば某大いゑ憤り此奴眞の麁匆ゑ非ず必らず其故あらんと問ひ詰むれば床屋も終ひには隱し得ず先日眞虎に依頼されし旨を告るに町代いやッキとなり急ぎ我家に歸り直ぐさま眞虎を呼び寄せ我れに何の恨み有つて我頭を弄り物といなしたるぞ御氣の毒樣位の言ひ譯で濟むと思ふ汝の如きものは誤り證文を板にでも致し置くが宜いと散々に談じ付けたれば流石の眞虎もたゝ詫入るのみにて一言の返す詞もなく逃ぐるが如くに辭し去りたるが眞虎もさるものなりければ直に瓦板といふものに左の如き文言を彫刻せしめ翌日町代の許ゑ差出したり

誤まり申證文の事

一我等　ニ付キ貴殿へ對シ申譯モ無之儀誤リ入候以後斯樣ノヤリソコナヒ不仕樣精々心掛可申誤リ證文仍如件

年月日　誰殿　大石眞虎

然れば町代某も餘りの事ゑ呆れ果て茲に初めて其忠告の切なる心根を察し大いに後悔

してこれより頭も全く人並に剃落しいと丁寧なる人になれりとぞア、滑稽も此に至つて功なしどせんや

●蜀山の狂歌奇禍の媒をなす

世の諺に藝は身を助くると云へど又た技藝の爲めに災ひ其身に及ぶ事古今其例なきに非ず即ち蜀山人南畝の如きも其一例にして南畝が才學に富み文筆を善し且狂歌に巧みなるは能く人の知る所なるが一日登城の際雨強く降切り其從僕が着したる青漆塗の紙合羽より雨染みて肌を浸すばかりなりしかば南畝道すがら例の輕調にて「せいしつといへども知れぬ紙合羽油斷のならぬあめが下かな」と戯れたりもとより南畝の胸中他意あるに非ざるも當時閣老田沼玄蕃頭の威權天下に震ひ眼あるものは窃かに其擧動を候ひ居りし折柄偶々將軍家治公遊歩の際落馬し途中に於て玄蕃が藥餌を獻じて介抱せしも後ち之が爲めに病と爲して薨せられしより道路耳目相繙るゝ如き形勢とはなりたれば南畝偶然の狂吟も大いゑ當時の事に應じ何となく耳立ちて問ゐ謂はれなき浮言も起りたれば先生之が爲め遂ひに幕府の忌む所となり常職を解かれて小普請入（今の非職に當る）といなれりとぞ

蜘蛛を嫌ふ人と鼠を悪む人

人に依りて種々忌嫌のあるものなるが文政の頃德川家齊公の昵近に森川主計といへる者あり性來太たく蜘蛛を嫌ふ、或時公戯れゑ召して彼の軒端に懸る蜘蛛の巣を掃へよと命ず主計忽ち色を變じて氣絶したる樣子なりければ公大いに愕きよしなき事してけりと直さま部屋へ下げさせ給へしに主計い少しく人心地付し樣子なりしが夫より發病して晝夜となく彼の蜘蛛の恐ろしやと口走しりつゝ終ひに狂ひ死せり又天保の始め幕府城郭内なる太鼓打ゑ葛野部と云へるは常に鼠を嫌ふと甚だし或人戯れにその机の曳出しに鼠の屍死を隱し置きたるに部い之を知らず机に憑らんとせし際右の死鼠を一目見るやその儘倒れて死せり又幕府先手組に其頃鈴木伊兵衛といふ人あり此人生得百合を嫌ふ或時戸田伊豆守の許に茶の會あり鈴木も招ぎゑ與ゐり其席に侍べりしゞ膳部の出づるに臨み顔色忽ち變じて嘔吐を催し頗る煩悶し殆んど氣絶の体なりければ同席に居合いせし原田某は早くも察して料理の中に若し百合はなきやと尋ぬたるに一もそ

の品に似寄りたるもなかりければ人々介抱して家ゑ歸らしめその後茶事始まり茶具を廻覽せしに茶杓の銘に姫百合といふ箱書付のありしかば扨こそとて其嫌忌の奇なるを話し合へりしとぞ

●楓橋夜泊の詩

月落烏啼霜滿天、江村漁火對愁眠、姑蘇城外寒山寺、夜半鐘聲到客船の一詩は三尺の兒童も能く口にする所なるが扨て楓橋とは如何なる橋にして寒山寺とハ如何なる寺院なるやと尋ぬるに紫陽素隱と云ふ人の三体詩抄中に九淵和尚が入唐の時親しく寒山寺へ行きて見たる咄なりとて記せるを見るに楓橋といふハ石橋にして楓樹は橋の畔りゑ僅かに二三本あるのみ而して其寺内にハ太平寺といふ寺ありて其寺に昔し般若函の封藏しありたれば封經常住と或人が書付けたるを其儘封經寺と稱したるに後に至り楓橋寺と誤り唱たりと傳ふ又該詩中江村云々とあれども眞に江村の其邊りに在るゑハあらずしてたゞ寺前の茶屋の額面に何人か「江村」の二字を書せるを斯く詩句中に欲め込みたるものなる由又寒山寺とは楓橋寺の佛殿の本尊が寒山拾德なるが故に爾か假稱せるに過ぎず且つ其夜半鐘聲とは眞に夜半に響く鐘聲を指すには非ずして佛殿と法堂との間に在る鐘の銘に夜半鐘と鑄付あるを以てなり云々又天龍策彦が南遊藁にも楓橋の詩を載す曰く楓橋未ㇾ斷僅看ㇾ蹤、人物難ㇾ逢境易ㇾ逢、張繼去來無宿客、舊時山塔舊時鐘とこれまた目のあたり見ての作ならんと思はる詩境と實境とは往々斯くの如きの相違あるを免かれざるは珍らしからぬ事なゞらこれ等は餘りに意想外の話なれば斯くは物しつ（江村漁火對愁眠は一に紅楓漁火に作る）

●蘆雪十六羅漢の印章を用う

本邦の畫伯中纖細優美の意匠を以つて推さる、圓山應擧の門下に蘆雪と云へる畫人あり常に洒落なる粗畫を好んで先生の小心寫生に似ず故を以つて同門畫會の折々に叱斥を蒙むること間々ありき左れば或畫會のとき人々皆なまたもや蘆雪が粗大なる畫を物して師に叱られんか抔云ひ合へりしに其日に至り見れば案の如く大いなる登龍門の粗畫を繪がきて師の前に提出じたれば門弟等皆な目と目を合はして蘆雪の爲めに危みたりしゑ果せる哉師の應擧い眉を顰めて打眺め居たりしゞ偶其印章を見れば何時用ゆ

るものとは少しく異なる樣なれゝ能く〳〵撿め見るに眞の印章よはあらで僅に一寸餘方の印章形の中へ最と細密なる十六羅漢の肖像を悉く畫きありたれゞ應擧も初めて其才亦密畫を能くするを知り大いに歎稱したり

●横井也有の小話三則

也有翁は尾張藩の要臣にて千三百石を食む通稱横井孫右衛門致仕して後ち也有翁と稱す其人となり敏捷汎く和漢の學に通ず俳諧狂歌などは翁の末技なりされども翁の名をなすものは俳諧と狂歌なりき今其逸事の一二を錄さんに天明の頃琉球人來朝せし時翁其國人に逢ひ物語の末何がな物書きてと乞れけるとき琉球人半熟のもの書らんよりは と私に心を配り彼の王仁の難波津に咲やこの花の歌を書て出しければ翁とり敢ず「ならはずよかくや此假名文字まじり今い唐でもかくや此かな」(編者曰く此歌支那人程赤城が戲れよ讀めりといふ說ありいづれか實なるを知らず) 又或時成瀨隼人正翁に掛物一幅を出して讃を請れければ翁其幅を徐々と展見るよ大津畫の鬼の念佛の半身見ければ翁「鬼もあり」と云つゝ又のぶるに藤娘の笠見ければ「又姫もあり」と書き展べ盡すに外にゝ何の畫もなかりければ即ち「百合の花」と書添へられたりといふ又翁の未だ致仕せられざりし時臨時參賀の事ありて總出仕の前夕、平常懇意よ交はる某より書狀にて明日出仕時刻は何時にて着服は何なるやと問ひ來りし折しも翁は書よ向ひ居られしが傍の筆取り敢ず其手紙の端へ五半袴よ候也の六字を書きて返されしと云ふ通常の人ならば明日の刻限は五半時着服は半袴何々と認むべきを簡畧よして意盡せりと云ふべし又退隱の後名古屋より江戸へ至る途中一人の男馴々しく談話し互ひに一人旅の事なれば江戸まで同道せんと云ふ樣如何よも怪しく是れ必ず拐偷ならんと察し懷中聊か路銀もあり何分心配なれば百方工夫して外さんとすれども如在なく立廻りて中々離れず依りて拙者は俳諧修行のものなれば俗人と同道はいかにも迷惑千萬なりと云ふに彼の男夫は誠に妙なり私も下手の横數奇俳諧は飯より好物なれば願つたり協つたり道々風流のお話も申さんといふに翁も百計盡き果て即ち鼻紙を出し矢立の筆とく〳〵「うるさくもつき來る蠅や笠の中」と書て示しけれゞ彼の男さすがに耻ぢたる樣子にて是は御名吟と言ひ捨て〳〵横道へ遁れ去りたりと云ふ

●寝ながら觀の櫻

有馬涼及と云ふは四代相傳の醫家にして伊藤仁齋、東涯、闇嶋等と世々の交りあり孰れも國手の名あり且つ時行不拘の聞ゑ高く其狂態笑柄を傳ふるもの頗る多し、初代涼及は臥雲と別號し後水尾帝の朝特旨を以つて徵されて御醫に任せられ法印の階を賜ゝり寵遇甚はだ厚かりしが或る時主上より急よ召されたる折柄偶々人と碁を圍てありしかば直ちよ命を奉せず頻りに御使者を下されたれども涼及平然として局を終ざりしを以つて遂ひよ朝命よ逆ひ京師を追放さるゝれよりしばらく大津に蟄居してありしが間もなく召還されたりと云ふ又曾つて某侯病あり召されて其國に至り滯留數日に及びければ請ふて曰く側らよ召仕ふ者女子ならでは柔順ならず願くば借し給はり度しと即日侯の侍女中頗ぶる容色ある者兩人を貸し與へらる涼及大ひに欣んで喫茶喫飯皆な兩人に命じて其勞を取らしめ夜間も左右に臥さしむ然れども曾つて猥りが間敗行ひなし斯くて侯の病も程なく愈ゑて歸京の日よ至り其兩女を請ふて伴ひ歸り侯より醫料として賜ゝりし所の金を以つて皆な他に嫁せしめたりと又一日嵯峨の富豪角倉氏方へ治療に之くの途次櫻の大樹の花正よ爛熳として開けるを見て愛賞に堪ゑず直に持主に購求の事を談せしよ其價甚だ貴かりければ病家に乞ひて其金を借り多くの人に荷はせて我家よ擔ぎ運ばせたり、扨て家庭に持ち込ませれども枝葉へ樹大よして植ゆべき地なかりければ人々如何にせましと當惑の体に見ゑたるに涼及曰くたゞ其儘に置け余れ寐ながら觀る櫻とせんとて遂ひに庭上よ横たへたるまゝ置きたりしとぞ又其後嗣も何れも時人なりし由なるが二代三代の涼及共に若年の頃は孰れも放蕩無賴にして一旦は父子の縁さへ斷たれたる程にて一日病家に招かれて赴かんとせしに着るべき衣服なく裸体にて駕籠に打ち乘り往診せしとありと云へり又四代涼及は名を元函と稱しこれまた放蕩にして赤貧なりければ或時病家に至り病を療し了りて云ふ樣謝儀は私かよ余れに與へ給へかし我家に持參し來らるゝときは荆妻ハ直ちに米鹽の價に充てんとの惜しさよと喞ちたりと云ふ

●茶番狂言の由來

茶番狂言といふものは古しへ寶永の頃に始まり享保にいたりて益々開け寶曆明和の間

盛んに流行しけるとなん但し寶永より享保までは三芝居樂屋に於いて役者が玩弄したるのみなりしが寶暦の頃に至りては素人にまで傳來し其の後安永天明の頃にい趣向いよ〳〵新にして專ら素人の玩物となりけるにぞ竟よ茶番といふ名い三芝居樂屋に絶ゆるよ至れり今茶番狂言の起因を案ずるに寶暦三年の出版にかゝる「役者籤箱江戸の卷」と云へる書の發端に之を記せり曰く「此茶番と申す事は其もと五十年このかたの事にして原い芝居の三階より起りて其頃芝居大入よは三階二階打混じて茶菓子を出して祝ひしとなり（中略）もと芝居の狂言の勞を休めたるをいつとなく狂言茶番と號けて舞臺と三階を一致になしたるこれ裏と表と合体したるなり云々」これに由りて考うれば茶番狂言は劇場の繁盛を祝するより出でたること明らかなるに似たり又一種酒番といふものあり或老人の傳ふる所に據れば芝居大入の時に三階中二階よ役者おの〳〵集合して思ひ〳〵に酒肴を調へ日々の勞を慰むる宴なりされど酒肴を尋常に出さんも風情なしとて其時〳〵の狂言に寓せ又は役割などになぞらへて種々の題を出し其むれの人々に配り題を得たる人々はさま〴〵に趣向を考へ或はをかしみゐて興を幇け或い理屈よて笑を取り用意の酒肴を携さへ出かはる〴〵趣向を演べ順番に勤むるとなり（最初鬮取にて次第をさだめ一番二番の順にしたがひて勤むるによつて茶番と名づく本名は茶番組酒番組といふを畧して茶番酒番といふなり）さて連中悉く終りて後其景物をひらき大宴會を催はす、しかるに享保の頃澤村宗十郎訥子座頭なりし時我等い元より下戸なれば酒番いおもはしからず菓子を景物にして以來茶番を催すべしとありければ一座同意して敎へに從へしとなん尤も是は酒番ある間々に行ひけるよし、さて茶番狂言と狂言茶番と差別ある事なり即はち趣さを演て景物を出すをすべて茶番狂言とはいへども此中よさま〴〵の差別ありまづ鬘をかけ紅粉を裝ひ戯子の如く打扮て思ひ〳〵の狂言をなし尾に景物を披露するを狂言茶番といひ俗に立茶番といふ（立まいりあり座して演ずるゆゑ立ち茶番の名あり）又一種は座して趣向を演說しその趣に從つて景物を座中に並ぶこれを口上茶番といふ又一種魚鳥野菜或は料理したる物をすべて食物よ限れる景物を出し他物を交ることを許さゞるを食物茶番俗に食茶番といふ彼酒番に似よりたるものなり

●小野小町の髑髏

明治十七年中京都府下山城國愛宕郡市原村普陀落寺の寶庫中ゑ於て小野小町の髑髏を獲たりしとの事實を或書に記せるを見るに同寺はろの昔し後白河帝の御建立にて清原源蓑が幽栖せし舊跡に係り寺内にい小野小町と四條少將の墓ある事は世人の知る所なるが五月中旬(明治十七年)より本堂及寶庫の修覆に着手し寶庫に在る種々の古物を他に移せる際庫の一隅に古き箱あり曾て一度も披きしことなき物にて當時の住職も空箱とのみ思ひ居たりしが何ゐ中ゑ物のある樣子もゑ不審の餘り蓋を取りしゑ中に又一個の桐箱あり之を取り出して見れば絹に包みたる一物其中より現はれたれば猶之を披きしに何ぞ圖らん一個の髑髏にて能々箱を點檢するに普陀落寺秘藏小町の頭骨と云る文字の幽かに存し傍らに年號の如きものあれど明瞭ならず併し何れにせゑ小野小町の頭骨なること箱書によりて明らかなれば翌日直ちに佛殿へ安置し供養を營み又は其頃開設の京都博覽會へも出品して汎く世人ゑ示したりといふ「秋風の吹くにつけてもあなめ〳〵小野といはじ薄生ひたり」と自から詠じたりし昔しも想ひ遣られて最と珍らしき咄しにこそ

●私窩子の別名

風來山人の六部集吉原細見里のをだ卷評中に日本國中の賣女の異名を數へ擧げたるものあり(上畧)古より著るしきは江口、神崎、野上の里、大磯、假粧坂の類其名殘りて今いなし實に治れる御代の御惠み繁華の地は都鄙を限らず色里多きその中に押出したる免許の地あり、擬者あり、かくしものあり、地者あり、はんかあり、其品々をいはゞ傾城、湯女、白人、踊子、比丘尼、飯盛、綿つみ、夜鷹、蹴轉し、舟饅頭の類い小歌にも出たれば人々の知る所なり、近年提籠と稱するは持はこびの手輕きより云ひはじめ、山猫と名付けしは化て出るといふ事ならん、又地獄とあだ名せしい其初清左衛門となんいへるもの此事を企だてけるを箱根の清左衛門地獄よもとづき仲間の者の合詞に地獄々々といひしより今は其名とは成けらし、ものゝ名も所によりて易るなり浪華にては惣嫁といひ伊勢の鳥羽あたりにては「走りかね」と呼び古市にては「あんにや」といふ、伊豆の下田に「せんぴり」あり松崎に「くねんぼ」あり丹後に「しやから」越後

にては冷水浮身「あをのご」あり長門の萩に「かごまわし」下の關にて「手拍き」とは船を見掛けて手をたゝくより號く肥後に「さぶし」長崎に「はいはち」あり小女性あり信州上田に「べざい」あり松本よ「張箱」あり加賀よ「化鳥」名古屋に「もか」出羽奥州よ「根餅」とい其初め女共蕨餅を賣りける故其名とはなりけるなり津輕にて「げんば」といひ南部にて「れしやらく」と呼び松前よて「藥罐」といふい尻の早いと云ふ事なり云々

●狩野元信鬼の繪を案ず

一僧あり曾て古法眼元信を訪問なふて愚僧に鬼の繪を畫いて與へられよと懇望せしを當時は鬼と云ふ名稱ころあれ畫形とてなかりしかばやゝ困せられし体なりしもさすがは元信なれば心竊かに思ふ樣和俗に丑寅の問を鬼門と號し人々の最と恐るゝ所なればとて頭は牛の頭に形り腰より下を虎に形りて畫き與へられしい實に鬼畫の始りにて後人ます〳〵異形を工みて丹青を施し虎の皮の犢鼻褌をもなさしむるに至りしと云ふ

●北村雪山酒家の帳附となる（附奇行）

北村三立雪山と號す肥後の人なり文學を善くし最も書に長ず細井廣澤の如きい此人の門弟なり雪山初め書を漢僧雪機に學ぶ時に赤貧洗ふが如く、家根破れて雨を洩らすも之れを修むるの資なく浴盤を繩もて天井に釣し上げ其下に坐して書を學べり、あるとき肥前長崎のある橋下よ一夜寢あかして翌朝空腹を覺ひしまゝあたりの酒家に入て思ふ存分に酒を飲み立去らんとせしに主人酒價を請ふに無しと答ふ家は何れにあるやと問へば亦無しと答ふ主人更らに何を業とする人なりやと問ふにもの書くものなりと答ふるに主人も拗たるものなりけん然らば此頃の忙しきに帳面をつけて給れゝし酒の價に充てんと云ひしゝば雪山も行先き定まらぬ身なれば容易に諾してそれより日々店頭よ坐して帳面附をなし數日を送りけるが固より唐樣の草書なれば如何よも讀ざりしを流石に能書なりとは知りけん主人も深く敬ひ遂ひに周旋して長崎に家を構ひしめたり然るに其書名漸く著はれ隣國の大守あるとき額面を唐土へ遣し有名の書家に書かしめんと其の草案を書かしめらるゝに雪山大きなる筆を持ざれゝ是非なく軒に懸けたる簾の萱をとり打ちひしぎて書けり扨て唐土に渡したるに彼方にも斯樣の名筆なしとて返へしけれゝ其の草案は直ちよ大守の額となりぬ、雪山又曾つて薩摩に至りしとき藩侯

書を求め給ひければ金五兩賜るべしと請ひこれをもて蜆を積みたる舟五六艘を買ひ込み盡く之れを海に投じ吾れは仁を行へりと悅びしとなん

●家を造るを普請と云ふ事

家を作るを普請と云ふい沙門の語より出て普く諸人を招請し其の他力を以て事を爲すの義なり勅修清規云、普請の法蓋上々均レ力也、分二附堂司行者一、報レ衆掛二普請牌一、及用二小片紙一書二貼牌上一と雜長持に見ゆ

●母をカヽサマと稱する事

今の小兒母をカヽサマと云ふ是は家々の字なり通鑑陳の宣帝紀に曰北齊の後主泣啓二大后一曰有レ緣復見二家々一無レ緣永別云々胡三省註に齊諸王呼二嫡母一爲二家々一と、何代のころより日本に言傳へたるにや子が母をカヽと呼より轉じて父も妻をカヽと云ふ

●細君を山の神と云ふ事

邦俗細君を呼むで山の神と云ふ、一說にこれ「ヤマの上はオク」と云ふことの謎語なり其義いろは四十八文字の中に「れくやま」と續けたり乃ち「やま」の上い「おく」よて細君のことを奥と呼ぶに由りて然隱語を作りし者なりと果して然るや否や

●金のなる木

事物異名と云へる書に曰く許子和爲レ娼、臨レ卒謂レ母曰錢樹木倒矣、言爲レ娼得レ錢如二樹著一錢也と邦俗の女子を金のなる木と云ふ由來も之れに由りて知るを得べし

●川師と山師

今の世に山師と云へば一概に向ふ見ずに僥倖を希がふものゝ別名とのみ聞ゆれども其初め此稱の起因を尋ぬるに未だ必らずしも然らざるものゝ如し殊に山師とは其初め川師と云へたる由其故は昔時有名なる角倉了以といへる人京都浪華間に通ずる所の淀川の水路を開鑿して大いに水利を興したれば世人此類の事業家を呼んで川師とは稱せり而るに其後また河村瑞賢なる人ありこれも當時著名の事業者よて此人信州木曾山を開きて盛んに山業家の名を博したれば遂ひに時の人一般に事業家を目して山師とぞ稱したりけるより漸く其義を變じて僥倖を期する彼の賭博同樣の事を企つる者を呼ぶに尙ほ山師の稱を以てするに至れり

●金蘭齋細腰を指して造物者の無盡藏となす

金蘭齋い老莊一派の人にして其思想も境界も全く該派の風に合へり家最も貧しく何書にても人の講義を請ふあれば吾れ其書を有せずと謝絶するが故に輙ち豫じめ其書を購ひ得て贈るに愈々開講の日に及び書生集り來りて聽講せんとすれば先生既に其書を典賣して以つて米に代へたりといふ依つて止むを得ず書生の所持本を與へて講せしむるとその常なり又門弟中衣服を調成して贈るに何時も兩三日を出でざるに早くも賣拂ふて米代と爲しければ門弟共も困じ果て或時工夫を運らし背よ白地形の內に金蘭齋と染抜きたる紺染の被服の宛ながら土方の看板の如きを新調して進じたるに先生悅んで之を着て更らよ意に介せざるもの〻如し又其物に拘らざるとは殆んど人をして喫驚せしむる計りにて或時早朝に人の訪問へたるに先生未だ臥床の中に在り客の來るを聞き駭きて起き出で來るを見るに袴のまゝにて臥したりし又一日講義半はに神樂舞の吾家の前を過ぎるを聞くや書生に一禮も爲さず例の看板樣の衣を着け草履と下駄を片穿にして走り出で群兒と連立て神樂舞の後に付きて行き廻れりと其行爲單り此の如く奇異なるのみならず其言ふ所も亦た奇なり或時途上婦人の一群に逢ふや先生微笑しつ其腰邊を指して曰くこれ造物者の無盡藏なりと

●朧月夜

秀吉名護屋在陣の時一日陣屋を巡視せらるゝに或る小屋の庇よ一面の額を掲げ「朧月夜」と題せるを見て暫時考へ居られたりしが忽ち左右を顧みてこゝ誰が小屋なりやと問ふ、近臣野間藤六の小屋なる由を答へ乃ち藤六出て拜す、公藤六を見て打笑ひ汝敷物なきやとて即ち疊に白米を添へて賜はることは「朧月夜にしくものぞなき」と云ふ古歌あるに依る事なるを早くも察せられしなり又同じ時に小屋塲の僅かに空地ある所へ柴を作りたるを見て大に賞し永陣と見て退屈せず僅の土地をも空しくせざるいまことに武士の注意かくこそあらまはしけれとて其小屋頭を召し白米を賜はりしとぞ英雄人を御するの術まことに變化窮極なしといふべし

●雲介老人河原乞兒を罵倒す

中村佛庵は雲介老人と別號し天保の頃詩と能書とを以つて鳴りたる人なるが此人頗ぶ

る奇癖ありその雲介老人と自稱せしも謂れあるとにして曾つて京都に吟筇を曳きて歸るさ偶々駕籠ゑ乘りたるに六十餘歳の雲介が持居りし息杖の手摺れて何にも古色附きたるに目を留め頻りに見惚れてありければ雲介の云へる樣此の杖は僕が父祖の代より今に三代持傳へ就れも八十餘の長壽を保ちぬ指を屈すれば早や二百餘年にもなりぬと此の物語に佛庵愛翫の念彌や增して遂に相應の價を出して購求め家ゑ持ち歸り滅金も杖面に雲介の賦を記し常ゑ持ち歩き仍て自ら斯くは號けたるものなる由此の老人ろの後向島なる或人の別莊を儀りて寓居せしが突然家主より急に買人ありとて幾日まで立ち退かれ度旨申來りしに焦眉の急ゑ驚きたれども然あらぬ体にて承知の趣き使者に申聞け且つ其買主を問へしに當時名腕の俳優岩井紫若なりと云ふ老人此に於て扨ては彼奴か吾を追ひ出す事かと心快からずや思ひけん愈々移轉の當日となりたれば古禮に依りて家の隅々まで奇麗に掃除し客間の床へ無地の花瓶に時花を挿し正面へは黄色雲形の短冊を懸け「雲介が栖みあらしたる家なれば乞丐の外は誰もすむまじ」と萬葉假名にて筆太に書紀し悠然として立去れりとぞ當時俳優と云へば一般に河原者と稱して蔑如したる事なれば老人の此の狂歌ありしも道理にこそ

●十返舍一九最後の滑稽

十返舍一九人と爲り卓犖不羈、頗る酒を嗜ひでまた滑稽洒落なるとは其著膝栗毛によりても知らるべし其の歿するに臨んで門人等に遺言し我死なば只此儘にて火葬すべしと命せり依て死後屍を火葬場へ送り火を點ぜしに怪しむべし屍中より數道の星火翻飜として迸り出たりしにぞこは只事ならずとて能く〳〵之を檢め見れば玩弄の花火二三本を其体ゑつけ居りしとぞ死して後まで滑稽を以ッて人を愚弄すると斯の如し之れを一九翁が最後の滑稽と爲す

●今樣の秀歌

光廣卿江戸より歸り給ひければ、御門弟あまた待むかへて御詠草を請れければ、道すがら海山の風景にめでゝ心のれもむくまゝにくちづさみたるもいへどもこれをとおもふはどの歌はよみ得ずいがさても珍らしき歌をこそ承りぬ是を見まいらせては我等ゞ歌は御目ゑかけられずとあり、それは何なる人のよみいや貴卿さほどに感じ給ふは

よのつねならぬ名歌なるべしといづれも耳をそばだてらる、光廣卿ふとところを探り鼻紙の端に書つけ給ひたるを是見給へと出し給ふ「宮は朝舟四日市どまり關の地藏いすぐとはり」とあり、皆あきれて辭なかりければ、おの〳〵いかゞおぼしめし候や是れ戀の歌としられ侍る關の宿といふ所は賤しきながら遊女あまたありて上下を勤む人夫ども此宿に戀をもたぬいなきよし（そのかみい今の如く宿ごとに賣女むらがる事はなかりしなり）江戸より上方へのぼるゑ七里の渡をこえて桑名の驛ゑ着てとまり朝に桑名を發すれば關の宿まで十里ほどにてきいめて關にとまらんと期しぬるを宮の舟をあさとく乘り出して伊勢の海づらを畫のながめにし桑名に着きてなほ日高けれゞ四日市まで來り宿す關の驛へは五六里のほどなるもゑあけの日の午時ばかりに行過るの本意なさ、江戸より思ひ設ふけし戀のたくはへいたづらになりぬるをうこちける歌なるべし關のやどりにかり寐の夢をむすばざる恨を云いんとて宮は朝舟四日市とまりといひかけ來れり戀の詞ゑ前後にゑけれどもすぐとはりの五文字ゑ其情うらめしきさま言外に溢れてありもとより賤しきものく辭なれば其躰はいふにもたらねどおさ〳〵いにしへ歌仙の意にも叶へければいと深く感じけるまゝ都の家づとにと書つけ來りしと仰けるにいづれも始めて感心せりとぞ

●由善機智を以て放蕩子を誡しむ

江戸十軒店ゑ大黒尾善兵衛なるものあり自ら由善と稱し家世々絹帛を賣るを以て業となす其の親族に橋本某なるものあり弱ふして父を喪ひ縱肆放逸娼妓に惑溺して大に家産を破りたるにぞ其母これを憂へて親姻を招き誡規を加ふると屢々なりしが由善も親姻の一人なれば何時も招かれて其席にあれども常ゑ默然として烟を喫し始めより一語を發せず然も退屈ゑ耐へざる風にて衆に先ち辭し去るを例とす後一日橋本由善の家に來り謝して曰く僕の頑冥なる久しく親戚を累いす今昨非を覺り慚悔に堪へずまさに將來を愼み以て前過を補なはんとす請ふ幸に宥されよと由善曰く甚た善し橋本又容を改めて曰く向ゑ妓僕ゑ春服を要求す僕過つてこれを諾し今に迫むで追悔及はず然れども然諾果さざるゝ男兒の耻なり僕が畢生の願ひ唯此一事あるのみ而今而後誓つて花柳の場絲竹の地を踏まず由善曰く信に然らば亦何の不可あらん橋本曰く約する所の衣帶

い云々染繍は云々其價約略五十金伏て願くは爺之れを擔當して與へられんことを由善曰く是れ吾が業とする所なり之を辨する何ぞ難からむ但歳已に臘なり恐くは速成しがたし晦夜を以て期となす如何橋本欣舞拜謝して去り直ちに妓家に至り誇つて曰く吾れ汝の爲に春服を命ずと已よして歳玆に暮れ待て夜半に至るも輸り來らず橋本怪み數々人を差して之を促す是よ於て由善奴をして之を貧て至らしむ橋本狂喜帕を發けは綿衣二十枚皆皂色橋本氏の章あり橋本愕然として曰く除夜紛擾誤つて他物を齎し來るにあらずや由善色を正して曰く咄汝父死して一の善を作すとなく色に荒み産を破り憂を母氏よ貽すは何ぞや因て名簿を懷中より出し之れに示して曰く是皆な汝が故舊今や貧困支へず凍餒歳を守るもののみ吾れ爲めに春服を製す速に人を差して分給せしめよ且つ一妓に衣するは何ぞ二十人よ衣するに若むやと橋本茫然自失奈何ともする能はず遂に其言の如くす明日贈物を受けたる故舊陸續來つて年を慶し恩を謝す家章、鵶列驚次懽聲屋に滿つ而して妓は則ち怨を鳴らし之を絶つ本橋悔悟遂に志を改めて身を修め家産漸く故に復せり

●唯顔を見る爲めの謝金

岸玄知は出雲國侯の茶師にして和歌を好めり一日郊外に遊びたるに一農家の圃中に梅花の盛りに開けるを觀て愛賞措く能いず頻がてその樹を買求めんと圃主に談すれども肯はず强ゐて所望して高價をもて約し來りしが家素より赤貧なれば産を傾けて代金を調ひ翌日懷ろにして農夫に與へ酒を携へて花下に賞詠し暑の移るを忘れて家に歸る其後月を經れども移し栽ざれば農夫怪みて之を問ふ玄知曰く汝の見る如く吾矮屋彼大樹を容るゝの餘地なしたゞ永く汝の地に置かしめよ農夫曰然らば果實熟せば撫り來るべき歟玄知笑つて曰く否とよ吾れは果實に望みなしたゞ花を賞するのみ果實を取る爲めよ木を傷ふなければ可なりと農夫駭ろいて曰くもと彼樹を高價に賣りしはその實の多きが爲めのみ若し果實を撫り給はずとならば先きの價は返し申さん花の咲ける頃は幾日にても自由に來り覽らるべしといふ玄知首を振り人の花は觀て面白からず我が花にしてこそ興あれとて此後花信至る毎に獨り酒を携へて終日花下に醉ふて歸るを常とす此梅後まで玄知が梅と呼びて有名なりし又一日金一分を包み近松門左衛門が宅に至り

慇懃に刺を通し對面を請ふに門左衛門出迎へければ件の包を贈り其顏を熟視して何事をも云わず辭し去らんとするに門左怪しみて何か御用のありて訪れしに非ずやと問ふ玄知否な足下は淨瑠理に妙なりとて兒女までも高名を知らざるはなし依て吾たゞ足下の顏を見置かんと思ひ訪ひ申せしまでなり他に何も用ありて來れるに非ずとてその儘立ち去れりとぞ又或時その宅に連歌の會を催し大祿の人々をも招きしに或賓客則に往かんとて案内を玄知に乞けひれば玄知やゞて鍬を把り出でゝ庭の隅に誘ひ地を堀りてこゝに召せと案内す人其の故を問ふ曰くおのれ平生用ゐる所の厠は汚穢にして貴賓を誘ふべからずこれ却つて新らしくして清潔なりと亦奇人なりと云ふべし

●三井養安奇骨あり

三井養安は越前の國府中の醫士なり其人と爲り無欲正直にして且つ逸興ある人なり病家より藥禮を贈るに酒肴抔添ゆるあれば必らず之を返して受けずまた藥禮も分に過ぐると思へば適當と思ふ程を收むるのみ然れども若し遊女の輩梅毒の治療を求めゝ來るあれば汝等は實なきものなれバ藥料は必らず納むるや否やと問ひ慥めて後治療すといふ或時戸外に人の訪ふあり内より案内する聲の何となく地中に在る樣に覺ふれば怪しく思ひ居りたるに養安口に烟管を銜へながら足には草鞋を穿ちて井の内より出でたり客愕ろきて何故ぞと問ふに餘り暑さに堪へ難ければ井の中に納涼せるなりといふ足に草鞋を穿たるは如何よと問へば梯を升降するに滑べらんとを虞れてなりと答へたりとぞ養安六十歳計りの頃其老妻と一僕を携へて伊勢より尾張大坂大和邊を巡遊せり其尾張名護屋を過ぐるとき偶々一商家の店前に石に小さき木艸を植たるを並べ在りたるをめで〻杖を樹て〻見とれ居るにぞ妻と僕とは行先きを急ぎ頻りに催せども去らず遂ひに此所に宿泊せんといふ仍て一旅舍に投宿したれバ養安又々彼の店前きに赴き件の石を見て愛玩止まず終ひに之れを買求めんと申出づ其主訝りて旅人と思はるゝに何地の方なれば斯く重き物を買ひ行かるるやと問ふ養安吾れは越前のものなるゞ此石を持運ぶべき人夫をも世話して給はり度と乞ふ仍て石を購ひ人夫の賃錢多きをも厭はずその故郷へは一封の書面をも出さずたゞ斯々の處なりと敎へて之に托しそのまゝ歷遊の途に就き京に上り處々見物す夫れより大坂よ至るや日々妻と僕とのみ處々見物に行かし

め己れ一人は何處へ行くや知るものなし宿主怪しみて一日踪跡せしにその旅舍の程近き道頓堀なる或る所に乞食の繩もて色々の物を造くる小屋の前に終日杖を樹て〻見居れり何故ぞと問ふに敢てその技を喜ぶに非ずたゞ毎日あまたの見物人が錢をも遣らずして散じ去るが痛はしさに毎日一百文を與へて彼れを憐むのみといへりとぞ又た巡遊の途中首夏にあひたれば「血をわけた虱ひぢらし衣更」と詠じたりこれを見ても其人の奇骨を知るに足るべし

●老武者の失敗

梶原平藏兵衛なるものあり醫を以て業と爲し江戸本所相生町に居る妻孥なく獨り一僕を畜ひ貧素なるも晏如たり家ゑ長物なく牀に戎衣を置き長押ゑ薙刀を掛くるのみ性、介慤武を好み人と交はらず嘗て謂ふ太平日久しく人々偸惰、奮迅發揚の氣なし若し不幸にして海警あらば何を以て事に從はん醫、方外に在りと雖ども亦是れ神州の人、報効を圖らざるべからず凡そ事素と定まれば踣づかず宜しく今に及んで之を講ずべしと、乃ち僕に命じて曰く汝喝して蹶け來り且つ跪き疾聲大呼して敵已に逼れりと報せよと、僕其意を知らず笑を忍んで其言の如くす、翁乃倉皇鎧を擐り薙刀を提げて踴躍樓に登り顧眄叱咤、薙刀を輪揮して刺戟の狀を作し曰く快甚しと、如是もの月餘稍く熟して咄嗟に辨ずるを得たり翁欣如とし笑つて僕に謂て曰く此伎戎事の要務なり、敏捷如此なれバ我決して人に後れずと、一夕霖雨新ゑ霽る躍て露床に上る床滑にして地に倒れ誤て隣邸の園に墜ち痛く腰肋を打傷して起つこと能はず、主人驚て以て賊となし燭を乘り短槍を手にして來れば介士露刃を執て偃仆る主人大に之を怪み熟視すれば翁なり乃ち扶起して家僕ゑ命じ負て之を家に送らしむ翁後往て隣邸に謝す主人諭して曰く其志甚はだ善し但た人の視聽を驚かすを奈何んと、翁も亦失敗に懲りて終に之を廢せり

●大高源吾と細井廣澤

細井廣澤は獨り能書を以つて高名なりしのみならず文學及び算術に通じ兼ねて經濟の才に長し又畫を能くし多能の士と稱せらる而して又義心に富み決して尋常文雅の人に非ざりしといふその赤穗の義士中大高源吾ゑ交るや最も親し故に源吾亦〻廣澤の尋常

人に非るを知りて豫め其復讐の事を洩らしたるものと見ゐ吉良家を襲ふの前夜窃かに書を贈くりて今曉事を果さんとすと告しかは廣澤い我家の吉良氏の館に遠うらざるを幸ひ頓かて他へ適くまねして門を出で人知れず家の棟に登りて其樣を窺ひ事鎮りぬと覺しき頃歸宅せる狀まて内に入りたゞ獨り起居て在りしに門を叩くものあり乃ち自ら戸を開けば果して大高にて漸やく宿志を遂けたる由を告げ、形見にとて脇指の小刀を拔きて與ひ同伴せる武林唯七も亦兼ねて相識れる者なりしゃばこれも具さに別を告げ血に染みたる手覆をとりて與へ去れり、此事廣澤生涯人ょ語らずたゞ自ら此事を記して彼の形見と共に一函ょ納め堅く封じて秘藏せしを歿後子息なる九皐初めて發見し傳へて家寶と爲せしとなん

●水戸西山公の逸事

水戸黄門光國公退隱して後常陸の國久慈郡太田の鄕西山に假初なる庵室を設けこゝに移り住み玉ひ自ら西山の隱士と稱し、松の柱竹の簀の子いかにも疎略にて全く尋常の賤山樵が家居の樣にて暮し給ふ、ある時江戸より私の御使ありて直ちに此西山の幽栖へ向はれけるに（一書にい水戸への上使を請じて此幽栖へ伴いれたりともいへり）柴の折戸は苔むして門内一面夏草生しげり側らにいと微小なる厩めきたるものありて内に馬ひとつ繋ぎあり庵室は僅かに二た間にして御居間の次は居爐裏にて老たる隷僕の草鞋を作り居るより外他に人なし御使の由申し入るれは西山公親から出迎へ上意の趣濟みて後扨のたまふやう珍らしき客人なれば出來合の麁飯參らすべし緩々語られよと即て彼の僕ょ命じ町へ行きて何なりとも新しき魚を買ひ來れよとて戸棚の引出しより鳥目を出して遣り給へば程なく大なる鯉魚を一本提下げて來るを眞魚板取よせ手づから調理し種々の物語をし給ひながら美事に刺身を作り又骨附の片身は細かょ截りて是は汁にせよとて彼の僕に命じ一汁一菜にて主客飯を喫し御使歸るに臨み引出ものとして繋ぎ置きたる馬を贈られしといふ又ある時水戸郊外を間歩し給ふ時行脚僧に行き遇ひ玉ひ御身はいづ方へ行るゝやと問ふに雲水の身なれば何方とさす所もあらずと答ふさらは今宵宿るべき所も定めずやと問ひ給ふょ足に任せて歩し勞れて臥す素より宿もなしと答ふさらば我庵室にて一夜を明し給へとて西山の幽栖へ伴ひ居爐裏に對し

て四方八方の物語よ語らい深し夜も深更よ至ればとて臥し給ふ翌朝彼僧大に寝過し五ツ時過ぎて起き出れば小坊主傍に在り室の三方押入にて内に文書夥しく入りたる容体など何さまよし有けなれゞ小坊に向ひ此庵の主人い何人ぞと問ひけるに水戸黄門公なる由を答へければ彼僧大に驚き知らぬ事とて方外なる無禮を申したりとて逃げ出さんとする折しも公出座し給ひ決して苦しからず四五日も逗留して物語承はるべしとのたまひけれども彼僧甚だ恐れて御暇を乞ひけるばさらば路銀の足し草にもとて金五兩を賜はりしとぞ此公常に民間に徘徊して親しく民情を察せられたること概ね此くの如し

●瀧野瓢水の酒落

瀧野瓢水い富春齋と號し後剃髪して自得といふ家元と富豪なりしが遊蕩の爲め産を傾け後は甚だ貧窶に暮せしも生得無我洒落にして敢て意に介せず俳諧を好むで生涯風流に世を送りたる人なるゞ酒井侯の封を姫路へ移さるゝや兼て瓢水が風流の名を聞きて所領巡見の砌り其ゞ居村なる加古郡別府村を過ぎ瓢水の家を訪はれしに瓢水如何なし

けん夜に及んで去つて行く所を知らず、侯いと不興にて歸城されたるが後漸やく兩三日を經て瓢水還り來りたるにぞ人々問ひ詰るに當夜フト門前に出でしよ餘りに月の光りの麗はしさに須磨の眺めのもかしくて何心なく赴き觀來りしなりといへり又近村の一小橋を渡るとて踏み外して水中よ落ちたれば兼ねて知れる農夫が通り掛り駭ろき救ひ上げんとせしに瓢水い平氣よて水中に立ちながら懐中より餅を取り出し喰ひ居れりとぞ、又曾て京師に在りし日相知れる如流と云へる畫師その貧因を憐み、自ら丹精を凝らして數十張の繪を畫がきて之れに發句題をし人に頒ち給はゞ許多の利を得んとて與へければ瓢水大に打喜びて懐中に入れ歸りたるが其後如流に遇ひたるとき先日の繪い如何されしやと問れしに瓢水は平氣にて彼の畫は歸途何れにか遺して失ふたりとて一向如流に對し面目なしとの氣色も見ねざりしと

●英一蝶石燈籠を買ふ

英一蝶い狩野安信に就て畫を學び畫風一家の趣きを成し頗る妙手なりと聞ゆその性膽勇餘りあれども母に仕へて至孝なり一旦故ありて遠島に流さるゝや始終畫を送りて母

が衣食の料に充てしむ後赦免に遇ふて歸り來ればその畫名益々高し或時兩國なる某々の兩太守一の石燈籠を買はんとて互ひに競へる由聞き得たれば直ちに走せて大金を出してその石燈籠を買上げ極めて狹き己が庭前へ移し据ゑ付けたり折しも初茄子を賣行くものあり乃ち其價を論せずして之を購ひ取り生漬となして喰ひ彼の石燈籠にひを燈して以て天下第一の歡樂なりといへりその磊落豪放なる凡そ此類なりしといふ

大石良雄の葉歌

赤穗浪士の隨一と聞ゆたる大石良雄の京都山科なる西山村に在るや假住居ながら美麗を盡くし其身持は放蕩云ふはうりなく晝は祇園の艶花に醉ひ夜は島原の朗月に眠る、耽酒溺色更らに人倫の振舞なかりしも固とこれ本心より出たるに非ず其胸中曾て一日も復仇の事を忘れざりしは彼の勾踐の臥薪に於けると毫も異なるなかりしならんとは後人の持囃す所なるが此頃或書中に氏が廓中に戯れし折節ろの頃流行の投節といへる唄を作り三絃に合せて唄はしめたるものを見たり其歌に曰く

更て廓のよそほひ見れば宵の燈火うち背き假寐の夢の花さんにくや嵐のさそひ來て寐屋を呼び出をつれ人おのこ餘所のさらばも亦た哀れにて塀も中戸をあくる東明當時廓中にて此うたを專ら唄ひけるとかや

文字の死活

書札の文字中にも自ら死活の別あり例へば一筆呈上仕候より御無事、御堅固、私宅無恙候、御自愛、猶期後日云々の如きは何事もなきことにて書くも書かざるも知れたるとなり同じ事ながら「此間の寒氣い一層甚しく弊郷抔は海濱にて氷を見云々、或は半月一月の旱なるに他所には夕立すれども此にい降らず」抔云ふは寒暄を敍ぶるは同樣なれども其地の氣色まで思ひ遣られて書狀の文意も自然活るなり又た月日の末に此書認め了りたる時は雨頻りに降りしきり時鳥の二聲三聲おとづるゝなど書き添ふるは彌々其時其人の情相さへ想ひ見るが如くにて面白し長さ三尋餘りある書札にても死たるあり三行四行の書簡にても活たるあり云々とい或人の隨筆中に見ゆたる所なるが曾て賴山陽が池田の酒家某に贈りさる書中に如何と書き更らに之れを塗抹して奈何の字を用ゐたるを見たり一箇の商賈に與る手簡すら如此用意密なりと謂ふべし

●藤田東湖と趙子昂

藤田東湖慷慨にして大節あり嘗て書を學ぶに趙子昂を喜び座右を放さず餘念あくうの墨帖を習ひけるが何時も其墨帖は机上へは載せずして机の下へ卻ぞけ置きければ一日或人側より怪んで問へらく先生の趙子昂の書を敬愛せらるゝは今に始めぬことなるが何時も其墨帖を机上には措かずして机下ゑ放擲して之を寫さるゝは敬愛さるゝ趙子昂に不敬なき歟と先生色を正し叱して曰く趙子昂は何人ぞ彼れ宋の末世に仕へ累遷して翰林學士に擧げられ頗る帝の恩顧を蒙りながら一朝宋亡び元興るに及び忽ち身を翻へし節を屈して元朝ゑ仕へ漸く身を全ふするを得たり彼れ書を能くし古今獨歩の稱ありと雖も其心事に至りては二心を懷く國賊なるを免れず故に我は其書を愛して其人を卻くるなりと

●手取釜

天正十四年豐臣秀吉の關白たりし頃舊三條通り白川橋より東五丁目に良恩寺といふ淨土宗の寺あり此寺の傍らに年老たる隱者あり粟田口の善輔（善法又善浦とも云ふ）と云ふ此翁の住居といふは藪葺屋根に四本柱の四疊半一間にて床も無けれゞ土間に爐を切り圓座を敷きて賓主の座を分ち貴賤の別なく茶を振舞ひ物語り抔せしめて樂しむ事晝夜の別ちなし糧盡れば一瓢を鳴らして人の施與を乞ふ人皆其人柄を知りて金錢米布を惠むに其物のある間は家を出る事なし爐にかくる所の手取釜にて粥を炊き又湯を沸かして茶を喫す其湯の沸く時は彷彿松濤聲を吟じて獨り笑ふ又「手取釜おのれは口がさし出たぞ雜炊たくと人に語るな」など戯れし事もあり太閤其事を傳ひ聞き利休に命じて其手取釜を得て茶筵せよとの給ふ利休ゆきて云々の命ありと傳ふるに善輔聞くや否や色を損じ此釜を奉つれば跡に代りなしよし無き釜故に兎角物いはるゝとの思の外なりとて其釜を邊りの石に抛うち碎きて「あらむづかし阿彌陀が岸の影法師」とつぶやきたり利休も呆れ果て太閤は短慮にましませど如何はせんと思ひ煩へど今更せんすべなければ歸りて有のまゝに申けるに却つて御氣色よく其の善輔とやらは眞の道人なり彼れが持てる物を所望したるは我が過ちなりとて、其頃伊勢阿濃津に越後と云ふ名ある鑄物師ありければ之れに命じて利休が見し儘のもの二ッを模造せしめて一ゝ善

輔に贈り一は太閤自ら藏せらる斯くて善輔沒して後其釜良恩寺に納りたるよしなるが之れを見たる人の話に據れば其高サ五寸五分底廣サ七寸口徑三寸二分弦は蝶番ひなり蓋より釜の腹へかけて木の葉を廣く鑄つけたり總体今の鐵瓶と云ふものなり桐の箱よ入る箱書は利休居士にて「手とれ釜」と記せり又此釜に添たる太閤の文書あり其書に曰く

手取釜　並　鈎箱に入鎖迄入念出來　悦　思召候尙山中橘內木下半介可　申　也

十月十一日　　太　閤（朱印）

田中兵部太輔

此の文書は善輔に關係なき者なれども此釜に緣あるより後同寺に寄附せしものならん尙此の釜の後傳とも云ふべきは細川玄旨法印の寫し釜にて法印も此釜をうつさせんと右の越後に命を傳へしに越後答へて曰ふ御所樣の思召にて唯二つ鑄たる事に候へば又た同じ形に鑄候はんと憚りありとて辭して止まざれば法印　理　なりとてざれ歌をよみさらばこれをその釜に鑄つけよ是れ同じ物ならぬ證據なりとて頓かて鑄させけるとぞ其の狂歌は普ねく世に傳ふる「手とり釜うぬが口よりさし出でゝ此は似せじやと人に語るな」此の釜今も細川家に秘藏せらるゝよし

●著作家の奇癖

人の心の一ならざるは面容の異なるに齊しく其の癖の種々あるも亦た面容の異なるが如きものあり近頃日耳曼の或る記者が古來有名なる著作家の奇癖を書き列ねたるを見るにアウベル氏は常に馬上にて筆を執るを得意とせり又氏にゝ一の癖あり巴里の外へ踏出しては筆が自由に利かぬと云へりアダム氏は寢床の上にあらざれば面白き趣向をつくること能ゝず、ドニセッチー氏ゝ天然の景色を愛する癖ありて伊太利瑞西等に旅行し山水明媚の佳境よ入るときは之に眺め入りて覺えず其處に打臥して睡むることあり フ井マロサ氏は己れが著作を爲す傍らに人ありて談話を爲す間あらでは更らに妙趣向を得ずと云ひサチニー氏は机上に猫兒の戯れ遊ぶを見るにあらざれば工夫途切れて出ずと云へりサルチー氏は何もなき薄暗き空室に入らざれば珠玉の作を爲すこと能はずスポンチニー氏ゝ暗中にあらずんば趣向が立たずと云ひメールビール氏は大雷雨の

節軒の下に彳みて名作を案ずるを常とし　サリエリイ氏い菓物を嚼ながら街頭群集の間を早足に歩み過る間ゑ趣向を着けハンデル氏は寺院の庭園を逍遙し脚色の端緒を得るや直ちに隅の方の柳の下ゑ蹲りて工夫を凝らしたりハエシレラ氏は寢床にて趣向を着け出來上るまでは起出ることなしスキレル氏い林檎を机上に置き此を嗅ぎながら趣向を考へ出せり此人は又己が趣向中にある人物事柄等を眼前に現はして之れを見ては考へる癖ありてアリイ、ステユアルトと云へる小説を作りし時は常に下僕に命じ黑衣を着けて傍ゑ立たしめウオルレンスタインと云へるを著したるときは細君に征師の詞を奏せしめたりジーンポール氏は趣向を立る前に麥酒一杯を傾け街頭に出でゝ逍遙しながら工夫を爲せりクライスト氏が詩を作るには最も苦心し冥鬼と戰ふの心持なりと云ひフハサー、ウ井ランド氏は歌を唄ひながら詩を作り、コチエブー氏は院本を作るに自ら役者となり戲を演じつゝ筆を執れりホルデルリンテ氏ご詩を作るときは屢々泣入ることあり一日其細君が良人の机前ゑ至りたるに氏はまだ初冊さへ出來上らぬとて聲を上げて泣き出したりと云へり

●加賀の千代蕪村の畫に題す

謝蕪村は大雅堂の高弟ゑして有名の畫工なりしが或時中仙道を旅行せる際熊谷驛なる本陣に一泊せしに其家ゑ偶々新調の襖ありければ氏の畫名をきゝて揮毫を乞へしに蕪村直ちに諾して　鷄二羽を畫き與ふ其後師の大雅堂此家に宿泊せし砌り蕪村の畫きたる襖を有せりときゝ乞ふて之れを一見せしゑ如何にも鷄は能き出來なれども野遊とした二羽のシマリなしと思はれたれバ主人に向ひ何氣なき體にて鷄二羽のみにてはチト寂し氣なりとて筆を採りて烏籠の轉げし圖を畫き添へて去れりとなんこれ鷄の羽振りが今ま正に籠を出でたるか巣を出でたる時の樣に畫きありたるに拘はらず之れを野遊の鷄とせしは瑕瑾なれば師の好意にて之を補へたるものなりと又或人蕪村に屏風の畫を乞ひしにたゞ雁一羽を畫きて與へければ主人餘り寂し過きて面白からずと思ひ居りしに偶々加賀の千代女が訪ひ來りたれバ件の屏風を示し賛を乞ひしに千代は取り敢ず「初雁やまだ跡からも〳〵」と書しけれい主人は大に喜び謝したりとぞ

●賴三樹番所の番人に向ッて論語を講ず

頗三樹三郎往年越後柿崎の番所に通り掛りたるとき番人に咎めらる三樹曰く余は儒者と申すものにて諸國を遊歷する者故何處へ往くとも定めなきものなりと番人は其身形の甚だ粗末なるを見て是れ必定僞儒者ならめ此奴一番困まらせ遣らんとて然らば幸ひの事なり何ぞ一席の講釋を願たしと云ふに三樹喜びて此れ我輩の本分なりいと容易の事なりとヅカ〳〵と立關先に到り傲然として洗足せしめ上段の客間へ上がり床の間に坐を搆へさり番人共は來り集ひていざ講義を初められよと促せども三樹聞かざるもの〻如く床の間より下りもせざれば番人共い餘りのことに呆然とし早く坐につき講釋されよといきまけば三樹いやとよ余今聖賢の道を講せんとするになどて汝等と同席すべけんやとて聽かず番人共は困じ果て何卒其儀は畧して聽されよと謝しければ三樹漸く下りて上席に直り番人共に向ひ汝等聖賢の道を聽かんとをるよなどて禮服を着けざると叱責したれば番人共は益々困じ果て困たとを始めたりと心中大に悔ひ皆な赤面して仰御尤もには候得共身共は未だ小身にして禮服を用ふる能はず何卒羽織袴にて御勘辨ありたしと平身低頭して願ひければ三樹さらば初めより斯く斷れば宜しきに粗忽なるよ

り由なき口を叩かしめたり然らば是れより一席聽りせんに奥深き議論は身よ入るまじいざ論語を少々講せんと里仁爲政の篇を長々しく講ド何時止むべしとも思はれざればに引換ひ厚く待遇して關所を通したりと云ふ

番人共は欠伸交々至り最早日も傾きたればと推して停講を乞ひ若干の謝義を呈し初め

●嫁入の辯

水野澤齋が「嫁入の辯」なる一篇あり荒唐無稽戲謔の談に過ぎずと雖ども其中自ら至理の存するものあり因て左に抄錄して好事者に頒つ乃ち左の如し

女は三界に家なしとて我家はなく夫の家を以つて我家とす故に漢土にて嫁よ行を歸と云我家に歸ると云ふ意なり

嫁入のとき白無垢を着て親の内を出づるは死せし意にて再び歸り來らぬやうとて門火を焚い葬式の意を表したる者なり上々方にては一旦嫁入りしては生涯親の内へ來るとなし里歸り折見舞など云は下々の事なり

聟の内へ白無垢を着て這入い死せし躰にはあらず目出度席へ死人が入りては宜しか

らず白きは色の始にて白よりは何色にても染る者なり嫁か躰を白絹に表しいまゞ何色にも染ぬ白地なれは亭主の心まかせに染るべしとの意なり近來の嫁は親の内にて色々の色に染り嫁入のときは色拔したるゞあるは油斷すべからず

色直しとて赤き衣裳を着替るは亭主の内へ始て生れ出たる赤子の躰なり

婚禮の坐附に鮑の熨斗を戴くは今日までは嫁の貝も飽貝のごとく蓋がなきゆゑ只今より聟を蓋に頼むといふの義なり

盃を取かはして後蛤の吸物を喰ふい蛤は蓋が二ツよく思ひ合ひ若別々に離れしとき素の片貝ならでい千萬合しても合ぬものなり斯のごとく一旦亭主と定れば一生外の男とは交るまじとの意なり

盃を嫁より始むるとは上古は媒介を以て互の約束極まると女の方へ男行て婚禮をなし後に男の宅へ女を連歸るとなり是男は陽なれゞ進みて女の方へ行く女は陰なれゞ退て男を迎ふの理にして女が亭主方なれゞなり中古以來は略して聟取り沙汰なく初より嫁入とて女ゞ男の方へ行とゝなれども盃は古禮に隨ふて女より始むるとなり

婚禮の時聟が黑色の衣裳を着ると黑い色の終にて何色にても黑色には染るなれども黑色を外の色に染かへることはならぬものなり聟も男なれば遊女の色にも娘の色にも染り玄ともあるべし今より改て女房より外の色には染かへまじといふ意にて黑色を着るとなり

右の條々片時も忘れず夫婦連添ふときい生涯喧嘩口論なく富貴繁昌疑ひなし

●尾上の遺書

享保九年四月三日松平周防守の奥女中お道（演劇にては尾上の事）が朋輩女中澤野（仝上岩藤の事）の爲めに耻辱を受け自殺せし時侍女のおさつ（お初の事）に持せ母の許へ遺はしたる遺書の寫しなりとて或書に登載せるを見るまゝ左に抄錄して考古家の參考に供す

お二人様いよ〳〵淫機嫌よく淫坐遊ばし淫嬉しく存ぜ上ま〻〳〵淫上い私しこと何とも一分相立がたき淫事淫坐いま〻自害いたしい其譯は淫上度いへども「さつ」へ夕べ夫れとなく物語り致しま〻淫聞遊ばしいはんと存じま〻〳〵細々淫

上じゃへは却て冷歎の上の冷立腹を重ね候樣なるゆゑ爰にはヤ上ずゝ死候程の事故能〳〵の事と恐ながら思召下さるべく候冷奉公中も冷恩の冷事は少しも忘れヤさぎ候へども夫のみ草葉の蔭にても氣に懸る〳〵必らず〳〵冷歎き遊ばし下さるまじく候唯だ〳〵何事も皆先の世の約束と思し召わきらめ爲られ罪の一ッも輕くなり佛果の種と成候樣に逆さまなる冷事に冷坐候へどもおもし（圈點附したる處い原文のまゝ以下準之）ながら冷供養のみ遊バし下され候べかしと願上る〳〵最早押付爰許より也此譯こまり候間左樣に思召冷恩上ながら宜敷樣冷計ひ見苦ゝらぬ樣に仰懸られ可被下候分てヤ上る〳〵は此文庫の中に十四五色も小道具冷坐候はん儘皆夫々よ冷見分させられ形見に遣され被下かし此内妙養院樣（此處虫食にて分らず）の内に下され候地藏と紙一包る〳〵御ともじ樣へなもしながら上させられ可被下候九重の御守懷中の鏡は朝夕御前樣へ出候度ごとよ私し顏を寫し候まゝ御逢遊はし候と思し召し御覽くだされ候樣にと差上げる〳〵必らず〳〵御歎の種と思召下されまじく候三五郎方へは殿樣より戴き候御香合鼻紙袋遣はし申度候お宮へは是も殿樣より戴き候御繪と奥樣より戴き候かんざし子安貝遣はし候儘成人の後姉と思ひ出し候へとお遣しくだされ可候下谷のおば樣はじめ仁右衞門樣半平樣お百代どのなど其外皆々樣暇乞ひ仰せ下さるべく樣小田原の伯父樣にも御忌掛り候半と定めて仰せ遣はされ候と存じ被參候其折から妙くわん樣へ此の觀音樣遣はされ下さるべく候御伯父樣へも宜敷品何成とも少し宛お上げ下さるべく候本庄の「うば」は分て悲み候半ところ見る樣に思はれる〳〵其外にも何方へも暇乞よく〳〵願上被參候「さつ」もゞ樣の事とは夢にも知らず此の文を御覽遊ばし候はゝ初て驚き候半と存上被參候年月の内念頭よいたわり呉候儘能々仰られ下さる可候いつ迄認めても盡ぬ御名殘に御暇乞計と申殘る〳〵不孝の者とて定めし御ともじ樣御叱り遊はし候半と存じ上る〳〵へども何事も定まる業因と思し召下さる可候思ひ設けし御事なるも今日になり泪に目もくれ後先さ文もしどろに見へわかず候まゝ早々申上る〳〵

御かもじ樣　　みちゝ

因に曰く澤野ハお道を耻かしめたる事を後悔し詫を爲さんと思ひお道の房に來し所を侍女おさつは只一刀に刺殺して主の讐を復したり因て大騒動となりたるが奥家老堀野次郎大夫大目附小池利右衛門等の計ひにて之を穩便に治めおさつへは故なく暇を遣はされしと又たお道が辭世の歌ハ曰く

藤の花ながく久しき世の中になり行く今日ぞ思ひしらるゝ

岡本氏女生年廿一才　美地

●身体の矮少能く志氣を皷舞す

近代の碩儒息軒安井翁は頗ぶる醜男子なりしが常に予が斯る身分ハなりたるゝ全く醜男子たりしに依ると云へり英國の海軍に武名を輝かしたるネルソン氏ゑりの初めて命を受けて艦長となり軍艦に臨むや埠頭の人々皆な嘲つて何ぞ此侏儒を艦長と爲せるやと言ひ合へるを耳にしたればネルソン氏は大に此言に激せられ此後「ナイル」「トラファルガル」等の戰にも常に之れを忘れたるとなく終ひに海將の芳名を擅まゝにするに至れりといふ又バズリフト氏曰く一世拿破崙をして身の丈六寸高からしめば法朝西皇帝とはならざりしならん何となれば拿翁後日に至り歐洲を震動せしめたるはその初め一友人が之ハ「侏儒なる兵」といへる綽號を與へたるより非常に名利心を刺激せられたるハ在るものゝ如くなればなりと又古代希臘の大儒ソクラチスは其鼻平かにして天を仰ぎ其眼突出して唇は大に且つ厚かりしと又英國の詩人ホウプは身の丈低く且一方に曲がりたれば甚だ醜かりしが曾つて自ら言らく吾れ身体は曲りて醜きも詩は直立にして美なるを要すと古今の英傑大家の多くハ醜貌なりしと此外枚擧に暇あらず世の賢婦ハ美容の少なきも同樣の例にやあらん歟

●八の數

九は數の極なりとは夙とに世人の知る所なるが從つて其次ぎなる「八」を以つて最大數となし數知れぬ程多きと云ふ所へ用ふるは古來その例少からず例せば本朝ハは八百萬神あり漢土には寶壽一萬八千載の帝王あり、佛家に八萬地獄と云ひ八大龍王と云ふあり又た八雲八十島八陣八省は實數ハして八音八相は自然ハ出で法華經の八卷百八の梵鐘、正八幡八犬士は蓋し各々據る所あらん幕府旗本八萬騎江戸の八百八町大坂の八百

○八橋新瀉の八千八水八百八嬬ハ嘘八百にて青物屋と八百屋と呼び口も八丁手も八丁と稱するはその數多きを云ふならん又た八字は分字の上分体にして之を細微分子にまで除し得るの意を寓せりとは少し附會に近からんか

●黄檗山門の額

宇治黄檗山の山門に掲げたる第一義の額ハ高泉禪師の筆よして觀る人毎よ感賞せざるはなき絶筆なるが當初禪師が筆を執るや其高弟大隨和尚坐側に在りて頻りに不足を唱らし此れも見苦し之れもチト不出來なりとて排斥し書き改むること八十四枚に及んで大隨は立つて厠に赴きたり禪師ハ餘りに書き惱み且つ大隨の甚だ酷なるを憤ほり其留守の間に今度は彼れを驚ろしめんと筆を揮ふて書き了りたる處へ大隨戻り來り之を見て大よ賞しこれでこそ山門を鎮ずべきものなりと手を打つて悦べりとぞ故に彼の額を高泉禪師ゞ書改むると八十五回よして成れるものなりとて今に至り世に激賞せらる古今名工佳作の成る往々にして精神の激動せる際に在りこれ以て其一例とすべき歟

●苗村介洞藥を與へゞ

苗村介洞通名道益世々醫を業とし近江八幡に住す幼時堀川なる伊藤家に學びて文學あり日常の務めも漢文を以つて記す素性豪放にして物に拘らず而かも我慾の念なければ人憎むものなし一日近村へ醫療に行く途すがら農夫の田植するに遇ふ其地方の習ひとして行人の挿秧者の前を過ぐるにハ必らず慰勞の辭を掛くるを恆とす然るに道益道を急ぐまゝ一禮も爲さずに行き過ぎぬ農夫等之を見て彼れ無禮なりと口々に誚りたれども道益聞かざるまねして去る其歸るさ先刻より田植せる一人の農夫を招き寄せて難じて曰く汝等先きに予を誚れるを聞けり汝等能く思ふべし汝等の苗を植ゆるも實業を務むるなり予ゞ醫療に通ふも同じく我が實業に務むるのみ予れよして若し汝等を慰勞せざるを禮なしとせば汝等の予を慰勞せざるも亦た均しく禮を欠くものに非ずやと農夫其理に服し頭を搔て退きたりとなん又或家の請に應じて大病者を診察せしに按脈了るや速かに出で去らんとす主人急に引き留めて藥を乞ひしに道益曰く既に門外に出でゝ數百歩の客の爲めに饗宴を設くるが如しと言ひ放ちてそのまゝ立ち去れりとぞ

●武將の風流

筑紫にて關白秀次公定家卿のかゝせられたる小倉の色紙を求め得たまひ扨て座敷を改め色紙開きの御會あり利休を上客として相伴三人あり頃は卯月二十日あまり一日の曉方の事なりしに風呂の御茶の湯なり人々座敷へ入りてありけれども短檠の火もなく釜の沸音のみにていかにもしづ〳〵としたるようだいなり如何なる御作意ならんと思ひ居ける折から利休の居られし後の明障子にはの〴〵とあかくなりしをふしぎに思ひ障子をあけられければ月影のあかり御座のうちにはのかにうつりけるまゝ去ればよとにじりよりて見るに小倉の色紙の御かけ物なりしとゆやその歌に

時鳥啼つる方を詠むれば
たゞ有明の月ぞ殘れる

誠に折にふれおもしろきといいんかたなしその時利休その外の人々さても名譽不思儀の御趣向かなと同音に感じ奉りぬ

●伊藤介亭謹孝にして人を憐れむ

介亭先生伊藤長衡は仁齋の第三子なり生質篤實に過ぎて魯ゑ似たり殊に純孝友愛にして其母痛く雷を懼るゝが故に講談中と雖ども空合ひ曇り來れば直ちに辭して急ぎ家に還り母に侍すると夏日の常なり而るに群弟皆青年にして時々青樓に遊び往々朝に及んで歸る介亭獨り謹愼にして常に早晨ゑ起きて屹坐す群弟之を厭ひ一日窃かに門内に入り急聲火事だ〳〵と呼ぶ介亭即ち走り出て屋上に登て火を見る其間に群弟内に入り之を紛らす後ち屢々之を行ふに介亭何時も草皇出でゝ屋に上る長兄東涯先生の門人奥田士亭告げて云くコハ令弟達の所爲なりと介亭答へて予れ之を知らざるに非ず然れども若し近隣實に火を失せるの時にも例の僞策なりとなして放置せば或は甚だ狼狽するともあらんかと斯く僞りなりと知りつゝ弟等に騙らるゝなりと又たある日住家の板敷を引はなちて頻りに何やらん人を指揮してありければ一書生入り來りて先生何をか搜索し給ふと問ふ介亭曰く過ちて鐵の火箸一本を落したればなり書生曰くそれ式の物に斯く騷がしくし玉はずとも其儘に置かれては如何と介亭曰くイナとよ予れ斯ばかりの物を惜しむに非ず此家は他人の家なり予れ若し此を轉じて他の人來り住し知らずして板敷を踏破ぶり足を傷くるともあらんにはこれ豈に前住者たる予の不注意より人を害す

るに當らずやこれ予が飽まで搜索し出さしめんとする所以なりと書生深く慚ぢて謝しぬとなん又曾て一僕ありその性甚だ愚直なり一日鮑を割烹せしめんとて鮑は庖丁をねせて切るべきものなりと敎へ其日は事に紛れて打忘れ翌日に至り昨日料理を命せし鮑いと問はれたるに僕答へて曰ふ左ればにて候庖丁は昨夜より寐せたるまゝ今まゝ起こし申さずと介亭怪しみて臺所にゆき見るに其一隅に割木を枕とし布巾を打ち着せ寐せ置きたり又た或時鯛の頭の切りたるを炙るには角に掛べしと吩咐たるに頓がて僕は繩にて縛り屋の角に懸けたりし程なるに介亭は奴僕なるものは却つて如此きがよしとて生涯愛して之を使はれしといふ

●昔時の花柳

寛永年間の著作にかゝる「八十翁物語」と云へる書に昔しの遊廓通ひの樣を記せり曰く昔しは惡所通ひ（遊廓通ひを云ふ）するに支度大分むづかしく先づ巧者なる人ゞ諸事いき方習ひ支度第一は先づ金子を拵へ刀脇指の物數奇結構ゞ拵へ小袖はゞま羽折まで巧者と談合しよき伽羅を求め身持をたしなみ此等の支度五ヶ月も半年も掛り扨て奢んと

おもふ四ヶ月も前より茶屋へ行き茶屋女をあしらひはづみを修煉し額の拔樣、髮月代の仕方まで巧者の指圖に任せ身の取り廻し口せきまで惡所風に成て巧者と同道して行くゞ依て惡所通ひする人は時宜公儀ぶり格別悧發なりとすべし昔しは遊廓を以て風流を鬪わすの場とおしたるが故に風流の事諸書に散見するもの少なからず今其一二を擧れば洞房語園と云へる書に曰く江戸町西村庄助が家に香久山とて名取の太夫ありし或時庄助が方へ年頃三十四五なる男藍染の股引に同じ木綿の布子を着て草鞋をはき荷棒に荷繩を結付け手拭にて頰冠し庄助が方へ來て不案内おがらこの家ゞ香久山どのといふ名取のお女郎があると在所でも取さたを致す、けふは此近所まで參りたれば爰に尋ねて立寄ましたそのお女郎をちよつと見物して參りたいがなりませうことかと云ひければ折ふし庄助女房居り合せてお望みにはあれど香久山は夕方より揚屋へ參り茲に居ませぬと挨拶する處へ香久山揚屋より歸り來りたるにぞ女房はしか〳〵のよしを申しければ香久山打笑つてかの田舍人の側へ行き香久山とは私の事でござります先づ御腰をれかけ遊ばされといふて手づから茶を汲で出しければ彼の在鄕人辱なくは御座れ

ども迎もの事に御酒が一ッたべたく御座るといへば香久山禿に言付て酒を出しければ身どもは冷酒はたべぬとて自ら燗鍋を持て圍爐裏の側へ行き鉄より長さ六七寸計りの伽羅の割木を二本取出し圍爐裏へくべ燗をして茶碗にて一ッ飲み慮外申せしとて香久山にさす香久山戴いて飲みて返しければ又た續いて飲み、舌うちして大事の上臈を見物して酒までたべて忝なしと禮を云ふて歸りしが何處の人といふことをしらず其後にて庄助女房彼の伽羅を取上んと去ければ香久山いふ樣田舍人のやうなれどいたづらなる殿方の態と御出で在りて炷給ひしものならんも知る可らずうれを其の儘取り上て い如何なれば御たき被成させといふに庄助女房も尤もなりとて一本は炷けれども一本は取り上げたり吉原五町の外までも薫じわたり家毎にけしからぬ事哉隣りか向か何方で伽羅をたくぞとさはぐ計りに薫じさりといふ二ケ月ばかり程經て芝筋より有德なる町人來りて二三度此の女よ逢ひ身請させて連行きしが實は町人にてはなかりしといふ又た昔し一客あり吉原大文字屋にしばらく立寄りて歸りけるおりに懷中より古錢一文取り出し投棄てゝ去りぬ樓主は心を得ず両替屋に持行きてこは何錢といふものやらんとたづねたるに是なん秦の始皇の五銖にて希有の品なりといひけるに樓主は好事の心もなきものなれど兩替屋にてあまりに贊め稱へければさすがにうちも捨かねて存し置きたるに其後益々著名のものとなり遂よ其家の重寶とはなしぬ

●室鳩巣蘆東山の前途を卜す

蘆東山は仙臺藩の儒員なり藩主嘗て命じて其前に書せ玄め躬親ら墨を磨し紙を展て以て請ふ東山筆を援て大書す字稍々斜なり藩主曰く斜なり矣、宜しく改め書すべしと、東山色を正ふして對て曰く臣が書斜なりと雖ども亦字たるを失なはず、國政直からざれば必らず政体を失なふ、公何ぞ之を改めざるやと其剛直此の如し、然れども東山純ら剛直なるものにあらず少時京に在つて三宅尚齋の門に遊びける時一日櫻を嵐山に觀て歸る尚齋曰く風日清美、遊客雜沓する勿らんかと東山曰く特に櫻を見るのみ其他を知らずと、人皆其超脱に服すと云ふ東山名は德林字い世輔一字茂仲、玩易齋と號し又梅隱或い貴明山下幽叟と號す通稱勝之助、又善之助、又幸七郎晩に東民と稱す嘗て書を室鳩巣に寄す署名屢々變ず鳩巣嘆じて曰く彼れ終を善する者に非ずと後果して直言

を以て罪を得終に幽囚屈辱に終ると云ふ

●貝原益軒の小話

貝原篤信は筑前福岡の鴻儒にして有益なる著述頗ぶる多し其の性篤實にして恭敬なり或時京都より歸國の際衆客と同船せしに客中一少年あり喋々として經義を談ず先生袴を着し嚴然として聽問す舟中の人其何人なるを知らず已にして船岸に着く互ひに別るゝに臨みて各々刺を通じて再會を契る益軒亦告るに其名を以つてすゝに於て衆客始めて其大先生なりしを知り皆愕然たり而して少年赧然として大ひに恥ぢ逃ぐるが如くに上陸して姿を沒せり

●一字亦忽かせにす可らず

詩句、一字と雖ども苟くもすべからず或は一字佳ならざるが爲めに全作佳ならざるとありむかし弘仁帝小野篁に一聯を似して曰く「閉閤唯聞朝暮鼓、登樓遙望往來船」て れ朕が此頃河陽館に遊び偶々得る所なり篁曰く御製大に佳なりたゞ遙の一字を空に改めば更に可ならんと主上曰く是れ白居易の作ゑして原と空の字を用ふ朕今故らに一字を換へて汝を試みたるなりと又た麓堂詩話に曰く任翻といふ人台州寺の壁に題して曰く「前峯月照一江水、僧在翠微開竹房」と既に去る傍らよ覩る者あり即ち筆を取りて一江の一字を改めて半に作る任翻行くこと數十里即ち半江の殊に好きを思ひ亟のに引返して之れを易へんと欲せしに既に改竄せられしを見て愧色ありしといふ又た橘直幹曾つて石山寺に遊びて「蒼波路遠雲千里、白霧山深鳥一聲」の佳聊あり僧齋然宋に入りたるとき右の直幹の詩句中雲を霞に鳥を虫に改めて其儘己ゞ作と僞り彼邦人に示せしに霞虫の二字を雲鳥の字に改作せば甚ぞ佳ならんと云へりとぞ

●難題の俳句

ある人加賀の千代に「海の中には碁を打にけり」と云ふ句を出し、よき附句ありやと云ふに千代取敢へず

白まけて黑に目をもつ鰈かな

と附けたり又「かまの下にも船つなぐなり」と云ふ句を出したるに

すゝきたくそのたきなかにほの見へて

と附けたりと又ある俳偕師近江八景を一首の俳句に讀みこめてよと請はれたる折取り敢ず

七景は霧にかくれて三井の鐘

●里村紹巴太閤に事ふ

里村紹巴は連歌の名あり且高貴に媚屈せざるを以て稱せらる、豐太閤或時連歌會に於て「奥山に紅葉ふみわけ啼く螢」と口吟みて懷紙に書せよと命じ給へるゑ紹巴は季も違ひ体を成さずとて肯ずる色なりしが太閤少しく氣色を變ひ給ひければ側らより玄旨法印古歌に「武藏野に篠を束ねて降る雨に螢より外啼く虫もなし」との先例もあれば苦しゝらずとて之を書さしめたり扨て翌日紹巴は法印の許を訪ひ昨日の古歌とは抑も何人の吟にして何書に在るや承り度と詰るに法印微笑しつゝ足下の首繼ぎの歌なりと答へたりとなん、其後太閤「谷かげに鬼百合咲きて首ぐなり」と咏じ給へたれば紹巴妙句なりとて懷紙ゑ書す太閤怪んで螢は啼かずとも百合の首はぐゝなりなるやと問はれたれば紹巴去ればゑて候古歌に「まくずが原に風戰ぐなり」とあれば差支なしと云へたりと又名護屋の陣中ゑて太閤甲冑を召し舟より海面に臨ませ給ひ我影の映りたる樣を御覽じて「海の中にも武士ぞありける」と打吟じ給へけれゞ紹巴側に在り取り敢えず「釣針にかゝりて上がる甲具」と附句をなしたりとぞ

●豐太閤壯士の罪を赦す

豐太閤名古屋に在り一日樓に倚て觀望す一士人あり手拭を以て面ゑ蒙り馬を馳て來り公門を過るも下らず又手拭を免ず公怒て曰く匹夫無禮縛して之を刻ねよと人に命じて追捕せしむ既にして曰く彼も亦士太夫なり宜しく自裁せしむへし又曰く此壯士なり殺すべかちず只姓名を識らんとを欲するのみと使者命を奉じ絡繹相望み追者疾呼するも行者顧みず姓名を問ふに及ひで方めて馬を降て回り懷中より封事を出し之を授けて曰く賤名その内ゑ具すと言畢り再び馬に騎て去る乃ち封事を以て公に呈す事、中に留て洩らさず世終に其人を識るものなかりしといふ

●尺八の辯

世俗或ひは尺八と一節尺と全く異なる物となし其長さ一尺八寸なる物をさして眞の尺

八とするものあり是れ大ひなる誤といふべし抑々尺八の何の頃に起こりしかは未だ確かに知るを得ざれども律書樂圖に曰く尺八爲二短笛一縱向吹者也とあるを見れば古くより在りしもの丶如し然れども月卿雲客の執るべき器よは非ざりしもの丶如く源氏未摘花の卷に「例の御遊に非ず大篳篥尺八の笛など吹上つ丶太鼓をさへ高欄の下にまろばし寄せて手づから打鳴し云々」とありて大篳篥太鼓なんどの地下樂人の器と同等に言なせり偖又其尺八と號けし所以は中に一節をおさて節の上を三寸七分節下を七寸一分併せて一尺八寸よ切るの定格ゆへ扨こそ尺八とも亦た一節切とも唱ふるなり然るに彼の一尺八寸のもの出で來りしは去る元祿年中浪花の俠客に雁音文七といへる在りて尺八を好み且つ頗ぶる妙手なりしかば世人太く之をめでたゝへし程に子分手下などいふものも皆な之をたしみ遂には外へ出るにも少しも放たぬとになりし或時不圖途上にて喧嘩をなしたる折別に得物なかりしかば此の短笛にて打合ひ其事果て丶後あはれ是れが今少し長く且つじやうぶならばと思ひ付きしまゝ即ち長も一尺八寸に延して殊更節多き竹の根際より切りし物を用ひ初めしに起れるにて樂器の尺八い今いふ一節切にて又尺八は一の喧嘩道具なりしのみ

●郭巨の金釜

郭巨が黃金釜とは本邦人の稱する處なるが盍簪錄に郭巨兒を坑にせんとするに忽ち黃金一釜を見る釜上云々と蒙求の註なる孝子傳を引けりされば今の二十四孝の圖を畫けるもの金釜を畫くは誤りなり是は一釜に滿つる黃金を得たるにて金の釜よい非るなり法苑珠林に此事を記して土中に於て一釜の黃金を得たりと書するは益々證とすべし又畫師永納が郭巨が故事をしるしけるとありしに或人蒙求の文を讀みて云く黃金一釜を見るとあり金の釜ならば一金釜とあるべきに黃金一釜とある時は釜といふは量の名なり論語に之に釜を與へよの釜は重さ一釜の金といふとにて此釜にてはあらずとて軈て圓き形の金錠をゑがきたれどもこれまたひが事なり惟ふに論語の註に釜は六斗四升とありて斗斛の類にて目方にはあらず且蒙求の註に釜上銘に云くとあるをもつてその量名に非ざるや明かなりといへり畫史會要に島繪とて載せる埋兒賜金の圖には千鳥形の如き金を數多く堀り出でたるかたをゑがけり同書に載する探幽が圖には長方形なるも

のを數多く畫けりされば釜にゑがくとい古くいなかりしとよやこれ等の圖よても亦た已よいへる如く釜上銘とゝふ本文のあるにても金釜と爲すとの誤りなると明かなりと或書に見ゑたり

楠氏家紋の由來

楠正成公の先祖におはしける橘諸兄卿は晩年山城の國井手の里に致仕し給ひけるが此井手の里玉川には春來る毎に山吹のいとゝ咲き匂ふを卿には春の日永のつれ〴〵に時折杖をこゝよ曳かれ殊の外愛で給ひけるを後には花散り綠失せつる時にも朝あ夕な其景色を思ひやられけり遂には其景色を直衣などに繡せしめられめさせけるをば後胤これを探りて水よ山吹を畫かしめて家紋と定めたりさるを星移り代更り子孫此山吹を菊と誤りけるにや何時となく菊水といなれりとぞ

加茂季鷹東山に遊んで敷物を借る

俳諧歌の名人加茂の季鷹ひと年京都東山の花見に行き玆かしこたどりあるき或る寺の境内地藏堂の前の櫻盛りなれば爰にて酒を呑まんと思へども敷物なし折節寺僧の見えければこや〴〵なふと招き寄せ我れい季鷹といふ歌人なり敷物一まい貸賜へと乞ければ其頃有名の季鷹なれば寺僧異議なくいと美くしき毛氈をかしぬ季鷹悅んで芝生に打しき吸筒取り出し思ふまゝに酒を呑み「山寺の櫻々と來て見ればつとめさへたゝうか〳〵の春」と詠じ暫らく興じつゝ又外へ出行きけり後にて寺僧來て見れば季鷹と名乘りたるものは何地へ行けん又貸したる毛氈もなし扨てはゑせ者季鷹と僞り毛氈を斯き奪ひたりとあたりを見れば地藏堂の樣に毛氈に添へて一首の歌あり「敷物をかりる時には地藏顏かへすときにはちよつとゑんまで」今にも此寺に季鷹の毛氈とて此の歌を添へて代々殘し置くとぞ

印度の盜賊

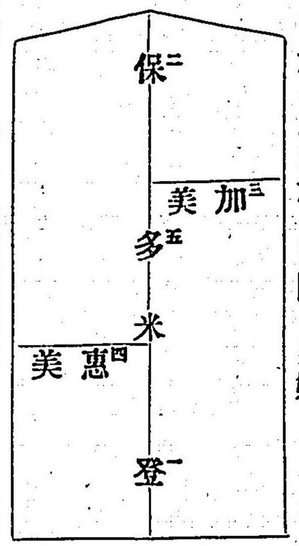
蟲類が其形色を草木花果岩石泥沙に擬似してろの襲敵の防禦に充るは往々見聞する所なるが爰に珍らしき一話は印度の盜賊が危急の場合に臨み身を樹木の間に寄せ巧みに樹木の形姿に似せ巡査の慧眼を遁るゝことなり元來印度地方の盜賊い其皮膚の色恰かも土色よして常に之れに油を塗り裸体跣足纔かに首に一口の短劍を掛るのみなれば黃

昏の頃に當つては縱令隱匿すべき處なきも亦た之を確認すること至つて容易ならざる程なり時に或い畫間英國の巡査に邂逅するとあれバ忽ち逃れて深林に匿るゝを常とすることなるが或は追捕切迫將さに捕われんとするに殲燒したる枯木の外他に隱地を得ざるときは直ちに地を穿ちて贓物を藏し其半身を枯木の蔭に隱し其木の形に從つて或は立ち或い倒まに或は横はり少しく遠方より之を見れば實に辨識し難からしむ曾て英國の一官未だ該賊の追捕に熟せざるとき騎兵隊卒を率ゐて此等の賊を捕へん爲め曠原に到りしに恰かも好し一群の賊を發見したり則ち隊卒を指揮し輕驅捷馳追て岩石の邊りに至れば忽ち其踪跡を失へり是に於て各々大に驚き東奔西走百方搜索に盡力せしかども遂ひに再び發見する能わず止むを得ず隊卒を集めて枯木の下に來り皆な帽を脱して側らの木に掛け襟を開ひて凉を取りたるに何ぞ圖らん其木は則ち賊にして倏ち起て東西に離散せり英人之れを見て大に驚愕すと雖ども捕ふるに暇なく遂に其帽子をも掠め去られしと云ふ亦一奇談と謂ふべし

❸トホカミエミタメの說

世間に一種別派の宗敎あり天主敎にあらず佛敎にあらず道家にてもなく神道にもあらず名づけて富士講或と御嶽講といふ其修むる所を見れば匹婦匹夫打集り或は鐸を振るもあり或は幣の如きものを捧ぐるあり同音に登保加美惠美多米と呼ぶ濁聲は轟々近傍の眠を破るに至る竊に其の由緣を繹るに何の宗敎より來るを知らず頃日齋藤彥麿氏の「カタヒサシ」と云ふ隨筆を讀むに龜卜の事を載せ「トホカミエミタメ」の說あり曰く龜卜の五兆の中の形の見はれたるをタメアヒタリといふ五兆とは則ちトホカミエミタメなり古歌に

思ひかね龜のますらに事とへば
ためあひたりと聞くぞ嬉しき　師時



されば卜ホカミエミタメといふ龜卜の符にて神を祀るときの詞よあらず其形は右の圖の如し

此五邊形は龜甲なり其中央よ縦線を畫し最下わ登の符を記し最上に保の符を記す次に中央より少しく上に於て縦線より右に正交線を引く之を加美の符とす又中央より少しく下に於て縦線より左に正交線を畫す之を惠美の符とす此の二正交線の間なる縦線を多米の符とす斯の如く龜甲に線を印したるを後ち櫻の木に火を點じ其上に之を載せ火熱の爲めに龜甲の破裂したる線を見て占ひ判斷するなり而して裂線の惠美と加美と相連なるときは多米合たりと唱ひ是を吉兆とす若し相連續せざるときは惡兆とすといへりされば卜ホカミエミタメの調い卜兆の符なり神佛祭祀の辭にあらず俗間誣妄の弊習尤も笑ふべし

●欲

拇尾の明惠上人北條泰時に敎て曰く天下を亂るものは欲の一字にてこの欲種々の名相をかへて天下を亂ると太田錦城之を賛して要言不煩といへりとぞ格言と謂ふ可し昔し唐の天禧の間盜三人あり共に一墳を發す其中金寶充塞す共に收斂して囊に入る二盜密に計略を設け一盜をして飯を買はしめ其飯至るを俟つて食し訖り彼れを崖下に撞落して二盜その財を分んとす一盜去つて飯を買ひ潛に毒を飯中に置き二盜に死を致させ己れ獨り全財を獲んとす已にして飯至る二盜果して一人を崖下に撞き落し欣然として件の飯を食し訖りたるに二盜も遂に毒よ中りて死せりとなん小人利を爭ふて共よ其終を克せざる世間此類鮮からざるを觀る

●字義の辨

水野澤齋が養生辯の中よ人生よ切要なる文字の義解を說きたるものあり多くは偏畫の上より意を立て丶一家の說を爲せり荒唐無稽戲謔の談に過ぎずと雖ども其中自から至理の存するものあり以て世を諷し俗を戒しむるに足る彼の王荊公が水の皮(波)と水の骨(滑)とを爭ひたる類にあらず因て左に數條を抄錄して讀者の參看に供す

「人」の假名は日止よして日の陽が躰に止るといふ意なり故に人死するを日去ると云ふ死に向々とすれども未だ死せざるを日去ぬといふ「ひ」と「し」とは音が通ふもゑな

り又或ひと曰く人は「ひふみよいむなやこと」と一より十迄程よく揃ふを以て人と云ふ故又始と末の假名を取て一十といふ若此數に揃はぬ者を足らぬ者と云は心が不足して十の數又足らぬといふとなり

人の字ハ棒を二本寄せ合したる字なり棒の長さを長者として上に位し短きを少者として下に位す猶人に親子兄弟男女夫婦老若貴賤あるが如し同官の人にても年に少長あり受領に前後あり故に二人會すれば必らず上下あり是長短の棒を合して人の字とする所以なり

金の字ハ俗に人の主と書て躰に續く寶なれども殺伐の者にして金ゆへ盗賊に害せられ利欲の爲に天壽を夭ると刀劍の人を傷ふより甚だし又銀は金偏又艮と書く艮は鬼門又して鬼の出る方角なり柔和なる人も銀ゆゑよい鬼となるといふ意なり錢ハ金偏に戈を二ッ書たる字にして戈を以て二人金を爭ふ意なり

賣買の字は本貝の上に皿を戴きたるが買なり皿は說文に飯器なりとありて飯や野菜を盛る器のとなれども此所にてハ唯品物といふ意なり貝を出して品物を求めおくが買なりろの品物又十分一の利を懸て人又與ふるが賣なり故に賣の字ハ買の上へ十一を書きたる字なり

賤の字は貝偏に戈を二ッ書きたる字にして二人戈を以て貝を奪ひ合ふ狀が賤なり運は字書に運轉運旋運動運移と續け俗にも運賃運送などいひて皆めぐらし。はこび。うつり。うごくの意にして銘々家業に氣を運し拵き動くを運と云ふ故に職人は職人にて今日を氣安くゝらせば運の宜しきなり商家は商家にて工面よく暮せば運の善なり

（以上）

●俳優小話

中村芝翫ハ田代歌右衛門の後を嗣ぎ初め福助と稱し愛敬優技衆優に絶す此の人性來虛弱にして且つ癲疾を患ひ中年の頃放心して其技を廢すと雖ども後病癒えて藝能頓に進み終に中村家の名を益々高からしむるに至れり元來此の俳優は性質愚直にして痴の如しと雖ども又た無慾にして毫も邪の行ひなし維新の初め一侯深く芝翫を愛し時々其邸に召さる或時金側の時器一個を賜ふて曰くこれ最近舶來の最上品なり汝常に之を携佩

せば如何芝翫謹んで拜領し更らに侯に問ふて曰く此名器も矢張毎日の午砲には螺旋を捲ねバ相停み申す可やと侯曰く然り芝翫之を聞て然らば左樣ゑ煩はしきものは御返し申すとて其まゝ返上せり侯益々其の淡泊なるを愛で給ひ然らば何品にても望むべし好みに任せて遣はすべしと仰せければ芝翫然らば御厩に繋留の上馬匹を賜はらば此上の望みなしといふ侯ゑは面白き好みなりとて直ぐさま一名馬を引出さしめて與へらる芝翫大に悅び勇み彼馬を拜領して歸宅す家元より厩の設けなく飼草桶の用意もなければ先づ馬を格子戸内に繫ぎ門弟等をして手桶の手を切り去りて飼草桶に充てる抔朝夕の混雜一方ならざれば斯くと察せられてか侯より兩三日經て馬丁兩人を貸遣はさる芝翫愈々喜びてこれより日々高帽を戴き黑紋付に裾高の袴を穿ち悠然として彼の馬に跨がりつゝ某侯の標法被を着したる馬丁を供して先づ淺草觀音堂より府下の所々を遊覽す途上往來に出會する縉紳貴族達皆その馬丁の法被を看て某侯なりと誤認し慇懃なる禮を施すを以て芝翫不得止馬上帽を脫し答禮を爲すゑ其頭髮は純然たる俳優の結髮なれば挨拶の方々孰れも一笑して過ぎ去る又芝翫はその度毎ゑ答禮せんとの最と五月蠅しとて五七日の後ち侯の邸に至り具さに其旨を述べて馬を返上に及びたりと云ふ、又た一般ゑ俳優社會にては當時ゑ至ても古例なりとて毎月の三日には座頭其他重立たる役者各々黑紋付を着して樂屋部舍々々へ挨拶ゑ廻るとなるが芝翫の女房い或る日今日は朔日ゑて月の三日に當れば禮服にて廻はるべしといふ芝翫怪しんで問ふて曰く三日といふは月ゑ幾日ありや女房曰く朔日十五日二十八日の三ッ日あり芝翫一々指を屈して然らば朔日より十五日までは其間十五日あり十五日より二十八日までも十三四日の間を隔つ然るに一昨二十八日が三日ありしにその間僅かゑ一日さへ隔てざるにまたも三日が來る筈なしとて承知せず女房曰く先月は二十九日が晦日に當れば中が一日を隔ても今日が朔日なれば三日に當れりと辨解すれども芝翫頭を振りて肯かぬ何時も〳〵己を欺して紋付を着せ樣とするともサウ甘く欺さるゝべきやとて更らに承引する色も見えざりしとなん

●夢中讐を報

加藤傳内い美濃大垣の人なり父傳太夫大垣の藩老たり嘗て藩士某の爲めに殺さる、傳

内年十六報讐の志あれども某防護甚だ密にして隙の乘ずべきなし而して傳内適々病に罹る、大竹喜平次なる者あり武技を以て諸州に遊ぶ、時に大垣を經、逆旅宿を許さず、已を得ず城外に之き一樹下に就て臥す夜將に半ならんとするころ夢に耳に附して呼ぶ者あり顧みれは一少年在り之を問へば曰く吾は加藤傳内なり父の讐を報ゐんと欲するも力弱して濟らざるを恐る公は豪傑の士なり幸に一臂の力を假されよ喜平次曰く諾、即ち相伴ふて城門に至る門峻くして越ゆべからず傳内曰く公唯我に從へよ乃ち之を攀づるに捷なること獼猴の如し喜平次之に從ふ一門ゑ至れば又之を攀づ此の如きもの數次、一宅を得たり曰く是より仇我を恐れ夜寢るときゑ常ゑ廩の樓上に在り今我入て刺さん倘し或ゑ逃るゝあらば公の一擊を煩さんと即ち入る驚喚一聲傳内刀を提げて出つ滴血淋漓曰く濟る矣、公ゑ煩すと勿きなり乃ち出て城門を攀づると初の如し一宅を得たり廼ち傳内の宅あり諸れを一室に延く時に家人皆寢ぬ傳内親ら膳を供し又短刀を出して曰く是れ敢て恩ゑ報ふといふに非ず聊か以て志を表するのみと固辭すれども聽ず乃ち受く傳内送りて門外に出れば喜平次夢適々覺む身仍ほ樹下ゑ在り而して刀ゑ現存す因てこれを怪み夢中の路を辿るに歩々迷ゑず城門を經て其家に達し傳内に見へんとを請ふ家人辞して曰く主人ゑ病甚し人を見るべからずと乃ち刀を出して曰く子之を知るか其人駭いて曰く是れ主人傳家の刀なり客何れより之を得るやと因て詳らかに夢中の事を叙ぶ其人曰く是れ有る哉主人實に昨夜を以て死す之を審かにすれは其讎を報ずるの時と少しも差ゑず人を走せて仇家の消息を問ゑしむ曰く某昨夜驟かに死す其時亦相符合す聞く者始めて孝子報讐の志死するも而かも爲すとあるを知る

●天野桃隣手拭を盗む

天野桃隣は伊賀上野の士人にして蕉門に入りて俳句を善くす壯年の頃早く官を辞して江戸に遊び初め桃隣と云ひ後桃翁と改む其調淡泊にして自ら一家の風格を成す元祿の初師芭蕉翁に伴ふて江の島に詣づ道に藤澤驛に宿す旅店の女房當夜臨産せるに偶々二人の叟の來宿を認めて出家なりと爲し頓みに安産の符を乞ふ桃隣そゑ最と易き事なりとて直ぐさま盃に符の一句を書して與へたるに早速に平産せりとて亭主大ゑに悅び直ちに出來りて兩叟を九拜して深く謝す退いて後翁桃隣に問ふ何を書し與へたるや桃隣

答て「とく出でゝまた乙みせよ花の兄」と翁之をきゝこれ能く其道に叶へりとて大に嘆美せり又或大家にて賓客を響應せしに桃隣亦招きに與かる時正に炎熱に際したれば主人の注意にて一間々々に手水鉢を設け新らしき手拭を掛け置きたり然るに客散ずる後打よりて掃除するに掛け置きし夥多の手拭一つも見えざるにゞ皆々不審の思ひを爲し居りしに一両日經て桃隣の許より謝狀を遣ハしたる其末に「かへるさよ手拭盗むあつさうな」と認めたりされば前日の偷兒は全く桃隣にてありしと一坐笑を催ふせりとなん

●本阿彌光悅の能書

本阿彌光悅は累代刀劍の鑑定磨礪及び淨拭の業を以つて聞えたる本阿彌家の後を嗣ぎ殊に淨拭の事に精しく亦た尤も書に妙なり或時近衞三貌院殿光悅に問ふ方今天下に能書と稱すべきは誰ゞと光悅曰先づ、扨て次は君その次は八幡の坊(松花堂を指す)なりと近衞殿さゝ給へて先づとは誰れの事なるやと推して問はる光悅平然として即ち私なりと答へしとゞ蓋し當時これ等の三筆天下に聞ゆ敢て私僭に非ざるなり一日近衞殿にはかに光悅を召じければ何事ならんと遽てゝ參上せるお直ぐさま御前に召されて悅が手を屹と執らせ給ひ「己れは〳〵」と言もあらゝかに仰せらる悅思ひも寄らぬとなれば何事の御意に逆へしやと恐る〳〵申上たれば殿下打わらはせ給ひ汝は何としてかかく能くは書く手を有せるやと戲れられけり此にても當時能書の名高うりしこと推して知るべし

●蟹の滑稽踊

英國モルガン氏の說に曰く凡そ動物にて情慾を有ざるもの殆んど稀れにして就中鷄鵡の如きは其雄常に雌に對し媚を呈し百心方を盡して雌鳥の己れを愛せん事を勤め車の音を眞似て雌の頭を己の方に向はしめ以て我が美容を示さんとする者あるよ至れり蓋し「チヤーム」(俗に云ふダテ)を盡し女性の愛顧を買はんとするは動物の天性にして我々人類が時として光輝燦爛たる軍服を着し又或と優美洒落の當世風に扮裝し得色あるも亦此範圍を出でざるに似さり茲に最も奇と謂ふべきは蟹の情慾を含むの一事に在り何人も知る如く蟹は其貌醜惡にして烏の如き美羽を有せず又虫の如き艶毛なく蝶の

如き麗翼、軍人の如き壯服を着くるなし其甲は炙らるゝ時ならでは殷紅色となる能はず然りとて鶯蛙の如き美聲を發する能はざれば男蟹の女蟹に思ひ付れんと極めて難きものゝ如し然れども蟹が惟一の賴みとするは其形容を棄てゝ藝術を取るに在り左れば蟹社會にも時折り集會ありて醜美となく男女打集て遊ぶ此際女蟹に思ひ付かれんとを熱望する男蟹は一同の前に出て三對四對の手を擴げ鋏を上げて頭部の形容を整ひ突眼を見張て空天を眺め其狀態實に笑ふべきの至りながらこれ即いち蟹群中の踊にして其巧拙によりて頗ふる女蟹等の愛情を左右するよ足る左れば此面白き滑稽踊を見んと踊子が心を屬すると否とに係はらず數頭の女蟹相携へて傍らに寄り集へば踊子い益々圖に乘り右よ歩み左に驅け或は進み或は退き踊る間にソト鋏を以て我が思ふ情婦を鋏み柔らかに引寄すれバ踊に見恍れて笑ひ居る女蟹は何時か虜となり引るゝまゝれ打とくるとなん亦一笑話と謂ふ可し

●秘魯國の結繩文字

南米秘魯民族は近來著しく開明に進み其國王をインカスと稱し政治文學等頗る長足の進歩を顯はしたる事能く人の知る所なるが此國の一奇事とも稱すべきは今に結繩の文字を用ふるとこれなり其繩は「ラマ」或は「アルパカ」と稱する秘魯に產する一種の羊の毛を組みて之れを造り且つ之を紅、黃、綠、白等種々の色に染め成して其色合と結び方とに依りて同國人の思想を自在に言ひ顯はすの法なす、此法たる固より困難にして繩の色合、結び目が應に代表すべき社會の事物と、社會の狀態が應に代表せらるべき繩の色合、結び方を悉く心得ざるべからず故に國王たるインカスは民族中天性記憶力に富む人物を擧けて一國の記錄を掌らしひ而して其の記錄者平生の實務に由て得る所の熟練は甚だ驚くべきものにして人民より徵收すべき租稅の納不納、屬國より取り立つる貢物の多寡、或ひは他國よりの使節、戰爭の布告或ひは條約の締結等一見して直ちに之を了解し得べく且つ時々の事變即いち地震、天災或ひは海賊の襲擊或ひは國王の薨去及び其の降誕等よ至るまで細大漏さず悉く之を記錄して以つて後世に傳ふとい ふ故に此帝國の書籍館に到れバ只種々樣々の色を以つて染め作りたる毛繩が物の見事に結び付けあるを見るのみにして絕て他の文書を見るとなしと此の結繩の政を「キ

ッブス」と稱し此法尙ほ此外「アンデス」山の種族中にも常用さるゝと云へり

●謝生童子を欺いて滿引す

長州の謝生酒を嗜む嘗て張幼于先生の門に遊ぶ先生宴會を喜むも家貧しふして客を醉しむる能はず一日美酒を得て客を招く童子率むね半杯を掛むのみ謝生咽渴して足らざるを苦む因て席を出でゝ紙に土塊を封じ密かに童子を招で之に授け囑して曰く我れ臟病發るに因り飲むと能はず今ま數文の錢を以て汝ぢを勞ろふ幸ひに汝が淺く吾酒を掛まんとを求むと童子封を發けば土塊を得たり恨むと甚しく故と之に滿掛す謝生是日獨り倍飲することを得たり

●宗祇の佳話

宗祇初めの名は宗久平吉氏九州筑紫の產なり性和歌を好み後ち世を厭ふて僧となり諸國を行脚して一生を送くり佳話逸事も多き人なるが或時修行の折り何國にか途を行き疲かれて近邊に遊べる主も知れぬ野飼牛を引出し打乘りて心に任かせ歩ませ行くうち牛の主野に行き見れば牛の居らざるに驚ろき必定惡漢の奪ひ去る處となりしならんと息せきて追つかけ來り宗祇を捉へて大いに怒り沙汰の爲めとて奉行所に至る奉行其仔細を尋ねけるに、余れは宗祇とて諸國を經巡る修行者なり餘りに足の勞れたるまゝ野遊びせる牛を引よせ乘り去り侍りぬ物盜み抔爲すものゝ候はず夫れとて主なきに乘りたるが過ちゝ候ゝ固より乘りたる價は遣ゝし申すべし事なくて宥し給ひねと何氣もなく答へたれば奉行も宗祇と云へば聞ゆる和歌の修行者のとなれば然らば何か歌を讀みて謝罪せよ且つ牛の事なれゝ十二支を其歌に讀み込みて然るべしと云ふ宗祇は畏まりて暫し考ひありたるが頓ぢて左の如く讀み侍りぬ

ひまひつじさるとりいぬもいなばいねうしとらぬさへうきなたつみに

又た或時怪異ありと傳ふる廢寺に宿りたるに人々寄集ひて連歌の式あり中に「今宵の月ゝ空にてそあれ」と云ふを吟じ出でゝ附句を求めたるに皆々附けかねて打煩へたれば宗祇その末席より「やどるべき水も氷にとぢられて」とつけたれゞ皆々アッと感じてその儘消失せたりとなん又石山寺に詣でたるとき「うき草に火を埋めたる螢哉」と打吟じて心私かに誇り居りたるに側らより一童子出で來りこれにてゝ螢が死すべしと

て「池水に火を打つ波の螢かな」と咏じ直ちに何處ともなく立去れりと又あるとき武藏野にさしかゝりけるに足を休むべき所もなく日向のみあるさしゆゑ頻りに咽かはきて「うれしや水に近づきにけり」との古歌も今は我身に當りやう〳〵人家を見付け立寄るに内には女一人障子を細目に明て夕日の影まばゆく錦にはあらぬ玉川にさらす細布さら〳〵に單なる物縫て居たり宗祇戸の外より聲をかけ途に勞れたる法師に候れ茶一ッ賜りなんといへば女肝をけしハタと障子を閉ぢて奥へ入りぬ暫らく待てども待てども茶もくれず又音もせねバ腹たゝしく茶なくバなきと斷るべきに情なの女よとつぶやきながら「今たてし障子がお茶になるならば門の口ろのむべかりける」と歌よみて出んとせし時女茶をもち出で宗祇の袖をひかへて腹わしの御僧やと笑ひながら「れ茶ひとつぬるゝほどにあるものをいかに嗔意のわきかへるらん」と返歌しければ宗祇も大にはぢ入りしとぞそれより東海道をのぼりある酒見世に立より酒呑んとおもふて頭陀袋を見れば一錢もなし呆然として居りしに酒やの主人これを見て何ぞ物を落したまへしやと問ふに錢なきよしをいひて「つぼのうちに匂ふと見れば梅の花さけがな一ッ春のきどくに」是れをきゝ酒やの亭主「つぼの内に匂ひし梅もちりはてゝかすみぞ殘る春のきどくに」とよみやがて酒を出し心の儘に呑たまへとすゝめけり然るに此見世に生醉居合せ面白き呑やうなり我れ振舞んと澤山强けれど過ぎたるよしを斷はりければ彼の生醉の者大に怒り宗祇の手を後へ捻り歌よめば免るさんといへば「なら酒や此手をとつてうらいらにとにも角にもねぢる人かな」とよみて逃げ去りしとぞ

●太田道灌の幽懷

太田道灌が江戸在城の頃老子の語を取つて其燕居の所を靜勝軒と號し又杜工部が聰含西嶺千秋雪、門泊東吳萬里船の二句を取り其西方の室を含雪、東方の室を泊船と名く又た此句の意を取り靜勝軒の眺望の絶佳なるを賞せし歌に「我庵は松原續き海近く富士の高峯を軒端にぞ見る」と詠めるは皆な人の知る所なり（一説に此の歌は寛政年間上洛の折勅に答へて其居の眺望を叙せしものとも云へり即ち江戸名所圖繪には此説を取れり）又城西なる瀧野川村の林巒溪流の幽勝を愛し此地にも別墅を構ふ今の靜勝寺といふ禪刹は即ち其の遺跡なり又ろの性深く風流を好むの餘り武總の境に流るゝ隅田

川の古來名勝の區なるを絶愛し彼の萬葉集に所載の「眞土山夕越ゆけば庵崎の隅田河原にひとりかも寐ん」とある古歌を思ひ出で偶々その名の大和吉野川の末流なる紀の角田川と同じきを以つて即ち水涯なる金龍山を紀の眞土山に擬して其名を冒し或は一地を庵崎と名づけ又志賀の關に擬して關屋の里を設け加之ならず彼の秋夜長物語の梅若の故事を憶ひ出でゝは隅田川を近江の湖水に擬し一の古塚の在りしを修理して之を梅若の塚と稱し又白髭の社を勸請し牛御前の祠をも叡山の山王に擬ひ此地に一小寺を建てゝ三井寺と稱し（後に常泉寺又た長命寺と改む）如此くにしてその東岸は近江、西岸は大和紀伊の名區に擬へり左れば此地西は富岳、東は海灣の勝を收めて以つて園中の大觀とし顧眄すれば大和紀伊近江等の上國の名區を几席の間に賞翫するを得べく其風流の概、宛ら河原左大臣が陸奥の千賀なる鹽竈を京の六條磧に模擬せしにも比すべく其意匠の巧且つ規模の大なるに至つては優かに之れにも過ぐるものありと云ふべき歟道灌最も城壁を築くに長じ當時東國の城池率ね其意匠に依らざるはなしと傳ふ去ればその餘力を以て庭園を造くるに又自ら巧みを極めしものと知らる其幽懷風流想ふ可し

●水鳥記

今は昔し德川幕府の頃には種々物好なる催しもありたりしと傳へぬるゞ中にも今の世には最も珍らしき催しとも稱すべきは一時盛んに江戸中に行われし酒戰會の一事にてありき此頃は折々處々に斯る催しもありし由にて慶安二年地黃坊樽次大蛇丸底深が兩將となり大師河原み於ての戰ひ文化十二年十月龜田鵬齋山東京傳の兩氏が首唱して千住宿中屋六右衛門宅に於ての催し同十三年八月兩國萬八樓に於ての再戰等は孰れも著名なる酒戰會と聞ゑたり中にも慶安二年の春大師河原に催せるは最も目覺しき景況なりしと傳ふる所なるゞ先づその起因は如何と尋ぬるに當時江戸に於て兩酒將と聞えたる二人の大酒家あり一を大塚に住せる六位大酒官地黃坊樽次と號し一を川崎大師河原なる池上太郎左衛門尉底深と號す各々門戸を張り多くの水鳥等を率ゐて相對峙す一日底深の門下山下作内請安なるもの大塚なる樽次の宅に到り鯨飲の末甚しく醉ふて殆んど生氣を喪ひ戸板に乘せられたる儘送り還され途中夥しく吐血する抔醜体を極め

しかば底深一門の恥辱なりとて此事遂ひに遺恨の基となり世に名高き大師河原の大酒戦を聞くとはなりぬ或日樽次の門下なる南河原の忠呑の方より六位大酒官の許へ注進せる狀に云く

潜に奉捧愚冊候于茲池上太郎左衛門尉底深と云ふもの大師河原に居住し唯我獨酒と法を立て夏は前庭に池を堀て酒をたゝへかうべを傾けて是をのむ只夏の桀が酒池牛飲ともいひつべし冬は酒を暖めて桶に入れ舌をたれて是をのむたとへバ大蛇が湖をほすにことならずしかのみならず大盞を投げて近郷を馳せめぐる間若干の水鳥等皆な彼れに歸服して樽次にそむく者多く剩へ彼の一門等が恥辱をそゝがんため近日大塚へ可致參入風聞ありはゞかりながら御思案をめぐらさるべく候注進の條如件

慶安二年四月三日

大塚地黄坊樽次公御館に於て

南かわらの住人

齋藤傳左衛門尉忠呑

飯嫌殿　御披露

樽次方よりの返書に云く

珍冊到來再三令披見候仍て大師河原の住人池上太郎左衛門尉底深かたじけなくも唯我獨酒とはさかへすのみならず夏の桀が酒池牛飯をまなび近郷をはせめぐるに因て若干の水鳥等我にろむいて彼に從ふよし歴劫不思議の珍事なりあまつさへ一門等の恥辱をすゝがんため當地へ入來せんとはつするの條是非なくさて底深が一門我宿所にとりてみなば當坐のついへ後日の内損かたゞ以て迷惑に及ぶべし是に依て愚案をめぐらすに大師河原へさかよせにれしかけ勝負を決せんよりほかは他事これなく是いはゆる人に先ずるのはかりごとにあらずや猶其の節案内せらるべき者也

慶安二年四月三日

大塚地黄坊樽次

齋藤傳左衛門尉忠呑どのへ

其後地黄坊樽次ハ二人の供を引具して大塚の宅を出で途中酒飲みながら南河原なる齋

藤が家に赴きたるゝ兼ての案内に早や同家に走集まりたる面々と相州鎌倉の甚鐵坊常赤あか坂の毛藏坊鉢書武州蕨宿の半齋坊敷呑川崎の小倉又兵衛忠醉多摩郡菅村の住人佐保田某醉久小石川の佐藤權兵衛胸赤平塚の來見坊樽持江戸船町の鈴木半兵衛飲勝淺草の名子屋半之丞盛安木下左兵衛尉飲嫌とび坂の三浦新之丞樽明麻布の松井金兵衛夜久及び齋藤傳左衛門忠呑等都合十六人なり樽次は以上幕下の水鳥連を伴ひ直ちに川崎なる大師河原に推し寄せ池上方へ斯くと通じたるに生憎底深は偶々腫物の爲に惱まされ打臥し在れば折角の入來遺憾ながら酒戰を開き難しとの返答に一同大いに落膽し中にも樽次は遺憾遺る方なくてや遂ひに荏原郡古川村に鎮守在し坐す藥師如來堂に一通の立願書を捧げ只管敵將底深が病氣平癒を祈りたり其立願書に曰く

歸命頂禮、大藥師如來者東方淨瑠璃世界之本主也、令衆生之願爲圓滿誓給、偉或其德矣所以盡誠也、樽次潛依有諸頭奉捧愚書旨趣者非他事、于玆有池上太郎右衛門尉底深者、聞其行跡常枕麴籍糟、提盞招友傾樽飲之、惟如鯨魚吸大海、故姻勢日盛而近鄕之水鳥等盡被强臥畢、加之稱唯我獨酒剩掠樽次酒法恣醉狂焉、倩惟是佛法酒法之兩敵也、我荷生此家不强臥彼者天下之嘲難逃、非吾耻辱而何乎、故與彼爲決勝負也、揚策馳來於當地之處、底深俄然被犯大病、依傾枕于老後之病床、樽次掩憤延引可謂無念也、悲哉、進而欲企乱酒彼病過急、嘆哉、退而欲待後日彼命不定、若今般不參會何時散遺憾乎、樽次一期之浮沈在焉、嗚呼伏希施靈佛之藥力、忽爲本復、然者即是押掛强臥事可廻咽本也、再拜

慶安二年四月二十日

藥師如來御寶前

一　大塚地黃坊樽次敬曰

扨ても樽次は底深が病床に在りて迚ても酒戰を開く能はざるを憂ひ件の立願書を奉り熱心に祈願を疑らせしかば如來も其心根の切なるを憐み給へてや不思議ゝも底深の病は頓みに平癒を告しにゞ去ば早速よ一大酒戰を開くべしと雙方打合せを爲し先づ時日と場所とを定約し當日遲しと待ち搆へたり斯くて池上底深の方に於ても檄を四方に飛ばして門下の水鳥連を喚び集むる抔其用意に怠りなかりしが當日までに追々と馳寄りし人々は名主の四郎兵衛經廣（後に底廣と改む）藪下の勘解由左衛門尉早呑竹野小太郎盥呑回瀦太郎藪成米倉八左衛門吐吹底深が惣領長吉底成次男百助底平田中の內德坊呑

久九郎左衛門桶飲儘尾與四郎常佐底深ゞ舎弟池上七郎左衛門底安同左太郎底無及びさきに樽次の方よおいて酔倒吐血せし山下作内請安池上三郎兵衛强盛此外一人の若者喜太郎等にして中にも此の若者と云ふハ或時底深が遊山の折り大樹の枝より倒まに下り居れる者あり底深怪しみて何故なるやと問ふよ件の若者の答る樣自分事如何程酒を飲むも忽ちよ醒めて興味の甚だ短きを憂ひ居つたるに或人教へらく身を倒さまに致し居らば長く酒氣を保つ可しと依て其教へよ從ひ斯くなし居るものにて候と底深之れを聞き扨ても希代の人物なる哉シテ汝が姓は何と申すぞと問ひ返されたれば若者の申す樣身微賤に生れ名もなく姓も知らずたゞ幼より深く酒を好み終ひに所持山の木も田地も殘らず賣り盡し飲み滅ぶしたれば自ら喜太郎とは申し侍べるのみと底深益々嘆稱止まず直ちに其門下の一に加へたるものなり總勢凡そ十四五人時刻を遣へず朱塗の盃の目標推建てつゝ豫ねて定めの松原の方へと推出したるゞ勇ましかりける斯くて又向ふの方を打ち見渡せば瓢の標章おし立てゝ寄せ來る者は誰れあらふ樽次の一門なり之れを見るより早りにはやりし若者どもは今日を晴れの戰なりと各々左右に陣取りたり其入口には制札に墨黑々と數條の文字を書付けて高く掲げたり其文に云く（此の制札は今尙ほ池上氏の珍藏する所にして年所を經る多さがため僅かに其三分一を留むるのみ其の全文を見る能はざるハ遺憾の事なから幸に池上の記錄に存するものを綴合する事如左且文中「　」を施せるは其三分一の古制札上に現存する所にして尙ほ墨痕歷々として讀むべきものなり）

定

一「既酒はや」したて候うへは出入せらるゝ面々は今日より「して御」酒のみやと申さるべし若しあやまつて茶やと「申族於」有之はその過怠として下戸に酒をしゐ「上戸にハ還」てふるまふまじき事

一於此内に
　ふて出入況
　會之達

一「亂酒の砌」上戸の歷々は地謠の役たり吉組の「下戸等ハ」舊地をなみ居てけるいたくゆめらるべき事

一惣別口論
　露な機
　以愍爲元
一恭會之（一字不分明）
　相嘉用於
一「酒宴之刻」たがひに酌を取て多く呑ひべし酒は「以過爲樺若」しすぐさずんバあに
　なんの益あらんや
右之條堅可相守者也
　慶安二（磨滅）年半は（を見るべし）

五　月

斯く公然と制札を立て、開きし程の大酒戰なれば雙方の水鳥連い我劣らじと呑み仰る
と宛ながら長鯨の百川を吸が如くに杯飛び觴行ぐり獻酬もはや煩しとて手酌に樽を傾
くるもあれば大盞をかざして酒波を打たせつ、差し向にて競飲するもあり皆なともど
もよ飲めよ被ぶれよと叫びつ、目たゝく間に見る〳〵數十の樽は早やくも倒ふれたり
之れを見るより兩軍益々勢を得て飲むと愈々壯んなり去れども兩軍末派の小水鳥共
は皆な追々に醉倒し去りて影だに留めず獨り兩酒將たる底深樽次に於ては兩將差し向
ひに互ひに盥大の大盞を傾むけてさしつ獻されつ飲めども〳〵醉色を呈せず恰りも初
めより一滴を飲まざるが如し斯くて三日三夜の間連戰流飲寸時も休まざれども孰れ劣
らぬ天下の强酒なりければ勝負の程何時果つ可しとも見ねざりき斯る狀況なりければ
最早とても兩將の酒量孰れか大小强弱を較すべくもあらじと終ひに其儘双方和睦の約
を成して引分れたるは實に慶安二年の五月某日の事なりしとぞ

●近松巢林の遺文

近松門左衞門の遺文及び辭世ありとて傳ふる所のものを見るに流石は一代の作者ゥの
文章は更なり見識さへ氣高く頗ぶる見るに足るものあるを覺るまゝ左に抄出しぬ
　代々甲冑の家に生れながら武林を離れ、三槐九卿に仕へ咫尺し奉りて寸爵なく、市
　井に漂ふて商賣を知らず、隱に似て隱にあらず、賢に似て賢にあらず、ものしりに
　似て何もしらず、世のまがひもの、唐の大和のをしへ道々、伎能雜藝滑稽の類まで、

知らぬ事なげに口にまかせ、筆にいしらせ、一生を囀りちらし、今はのきはにいふべく思ふべき眞の一大事は、一字半言もなき倒惑、こゝろに心の耻をおぼへて、七十餘りの光陰、れもへばれぼつかなき我世經畢んぬ、もし辭世はとゝふ人あらば

ろれ辭世去ほどに偖もその後に

のこるさくらの花しにほはゞ

●揚屋の差紙

昔し遊廓通ひを爲す者は衣帶を整ひ化粧を成し頭髮は香を薫じて遊興せりと或書に記したるさへ今時の人よは奇異の想ひを爲もとなるが文化八年の印本に係る花街漫錄と云ふ書に揚屋差紙てふものを載せたり而してその端書に據れば天和貞享の頃は吉原町の揚屋は殊の外繁昌して凡ろ廿餘軒ありて今の茶屋とは違ひ家作も廣く何れも雅致に住居取なし當時の太夫格子遊女抔はすべて揚屋ならでは遊び馴染むとなし例へば客ありて太夫を招かんとするには必らず揚屋より某々の太夫をやとひ度よし遊女屋へ左の如き差紙を遣はすを常例とせりとぞ

一　今日客汐坐ひに付其方の汐内つまさき殿と申す女郎衆壹の内雇ひ申し此客右方汐尋の汐法度衆にては無汐坐ひいかにも慥か成る人に汐坐れ若し横合方御法度の衆と申す者御坐候はゞ何方迄も我等罷出申分可仕ひ爲後日如件

いぬの五月五日　　宿主　久右衛門印

月行司　長兵衛印

庄三郎殿ゟ

右の差紙い全紙竪九寸六分横四寸三分にしていぬの五月五日あとると天和二戌年の事にて宛名庄三郎とあるは角町角萬字屋庄三郎を指したるものなりと云ふ又〇印の處當時の取締向の嚴重なりしを窺ひ知るに足らんか兎に角往時の遊興も亦た古雅嚴格なりし狀想見るべし

●澁團と幸四郎

文政の頃堺町茸屋町兩所劇場の樂屋に銀杏の實を燒て食する事流行したりけるに當時堺町なる中村座の座頭と市川團藏（俗に澁團藏と云ふ）なりしが此人至つて老實なる氣

質にて隨分筋道をやうまし く言ふ者なりけり或時頭取某を己が部屋へ招き此節の流行物なれども他の座と違ひ當座にて銀杏を食ふとは遠慮するが宜し何故なれば太夫元勘三郎殿の定紋は銀杏なるに其抱の俳優たるものが太夫元の實を喰ふとは穩かならず思はるれば爾今樂屋一同に遠慮する樣傳へらるべしと命せり因て頭取は樂屋中へ其旨を通じたるに此頃幸四郎も其一座なりしが偶々舞臺に來りて此沙汰を知らず驚かて幕なり樂屋へ來り例の一件は燒けたかとの問に衆優は其事なり只今頭取より自今當座で銀杏を食する事出來ず其譯は太夫元の實を食するに當り不都合なりと命せられたりと云へば幸四郎莞爾と笑ひヨシ〳〵誰れにても頭取の許へ往て「貴下の樣に仰せらるゝと若し太夫元の鈴木家で稻穗の定紋を着くる人ならしめば俳優は米を食はずに居らずばならぬ譯あるや」と問ひ試むべし必らず許さるべし何條遠慮にや及ぶべきとて子分に命じ例の通り燒け〳〵と常の如く燒き初めたるが頭取は忽ち馥郁たる香氣を嗅ぎ付け遽てゝ樂屋に來り幸四郎に打ち向ひ前の譯を以つて之れを止めんとするを幸四郎は前の如き理由を滑稽交りに陳べ更らに頓着せざるにゞ頭取も其理に服し是非なく此由を團藏に話しけるに流石の團藏も苦笑して止みたりとなん

●偸詩

或時書生うち寄て詩會を開きたるとき、一書生先づ炎蒸未レ改朱明節、淡薄先含白露風と吟じ出せり傍に惡口の薄徒ありて古人嘗て此句を竊みたるを見たりといへバ一座みな失笑せりと戒せたり、是れ未レ改朱明節、先含白露風と云る古句に二字冠らせたるなり、むかし僧惠崇か詩に河分二岡勢一斷、春入二燒痕一新、は上句司空曙を犯し下句劉長卿を犯したれば徒弟其踏襲を嘲て河分二岡勢一司空曙、春入二燒痕一劉長卿、不二是師兄偷二古句一、古人詩句犯二師兄一と詠じけり又魏周輔陳亞に上る詩古人の一聯を犯す亞賤んじて禮を作ざりしに周輔又絶句を上れり其の詞に無レ所レ用レ心唯飽食、爭如窓下作二新詩一文章大抵多相犯、剛被二人言一愛レ竊レ詩、とありしかば亞、次韻之よ答て昔賢自レ是堪レ加罪、非二敢言一吾愛レ竊レ詩、亘レ耐古人多二意智一預先偸二子一聯詩一といへりとゞ、みな頤を解き一笑するに足れり

●謠歌史傳を補ふに足る